Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

210.6
N688o
0022810 7

大隈重信関係文書 第六

大隈重信関係文書 第六

228107

大隈重信關係文書第六

自明治二十九年
至四十五年

目次

明治二十九年

一〇六一　加藤高明書翰「大隈重信宛」　明治廿九年一月三日　一頁
一〇六二　菊亭修季書翰「大隈重信宛」　明治廿九年五月十六日　三
一〇六三　犬養毅書翰「大隈重信宛」　明治廿九年五月廿六日　七
一〇六四　菊亭修季書翰「大隈重信宛」　明治廿九年六月八日　一〇
一〇六五　加藤高明書翰「大隈重信宛」　明治廿九年六月十日　一一
一〇六六　加藤高明書翰「大隈重信宛」　明治廿九年九月廿三日　一五
一〇六七　加藤高明書翰「大隈重信宛」　明治廿九年十月一日　二一
一〇六八　加藤高明書翰「大隈重信宛」　明治廿九年十月九日　二八

一〇六九　土方久元書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十月二十日　三五
一〇七〇　渡邊昇書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十月廿一日　三五
一〇七一　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十月廿二日　三六
一〇七二　副島種臣書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十一月廿八日　三八
一〇七三　九鬼隆一書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十一月　三九
一〇七四　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十二月四日　四七
一〇七五　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十二月十日　五二
一〇七六　九鬼隆一書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十二月十七日　五七
一〇七七　犬養毅書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十二月二十日　六三
一〇七八　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十二月廿一日　六五
一〇七九　九鬼隆一書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年十二月廿二日　七二
一〇八〇　犬養毅書翰　「大隈重信宛」　明治廿九年　七四
一〇八一　志賀重昂意見書　明治廿九年　七六

明治三十年

一〇八二　金子堅太郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅年一月八日　一七九
一〇八三　高橋健三書翰　「大隈重信宛」　明治卅年一月十三日　一八〇
一〇八四　村田寂順書翰　「大隈重信宛」　明治卅年一月十六日　一八一
一〇八五　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年一月十七日　一八三
一〇八六　岩倉具定書翰　「大隈重信宛」　明治卅年二月十六日　一八五
一〇八七　北畠治房書翰　「大隈重信宛」　明治卅年二月十七日　一八五
一〇八八　佐々友房書翰　「大隈重信宛」　明治卅年二月十九日　一八七
一〇八九　金子堅太郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅年二月廿四日　一八八
一〇九〇　小久保喜七書翰　「大隈重信宛」　明治卅年二月廿七日　八九
一〇九一　岩崎彌之助書翰　「大隈重信宛」　明治卅年三月二日　九〇
一〇九二　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治卅年三月五日　九一

一〇九三　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年三月七日　九七
一〇九四　大木喬任書翰　「大隈重信宛」　明治卅年三月十六日　九八
一〇九五　本野一郎書翰案　「露國外務大臣代理宛」　明治卅年四月三十日　九九
一〇九六　黑田清隆書翰　「大隈重信宛」　明治卅年三月十八日　一〇二
一〇九七　九鬼隆一書翰　「大隈重信宛」　明治卅年三月廿九日　一〇三
一〇九八　岩崎彌之助書翰　「大隈重信宛」　明治卅年三月卅一日　一〇五
一〇九九　蜂須賀茂韶書翰　「大隈重信宛」　明治卅年四月二日　一〇六
一一〇〇　谷干城書翰　「大隈重信宛」　明治卅年四月二日　一〇七
一一〇一　高橋健三書翰　「大隈重信宛」　明治卅年四月六日　一〇九
一一〇二　德富猪一郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅年四月廿四日　一〇九
一一〇三　有栖川宮威仁親王書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月三日　一一一
一一〇四　大隈重信書翰　「黑田清隆宛」　明治卅年五月四日　一一二
一一〇五　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月五日　一一四

一一〇六　角田眞平書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月九日　一一一
一一〇七　金子堅太郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月二十日　一一二
一一〇八　佐々友房書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月二十日　一一三
一一〇九　伊東巳代治書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月廿一日　一一六
【參考】伊東巳代治書翰　「伊藤博文宛」　明治卅年五月廿四日　一一七
【參考】伊東巳代治書翰　「伊藤博文宛」　明治卅年六月八日　一三七
一一一〇　村田寂順書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月廿三日　一四八
一一一一　神鞭知常書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月廿五日　一五四
一一一二　大隈重信書翰　「黑田清隆宛」　明治卅年五月廿六日　一五五
一一一三　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年五月廿六日　一六三
一一一四　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年六月十四日　一六五
一一一五　藤波言忠書翰　「大隈重信宛」　明治卅年六月廿二日　一六七
一一一六　高野孟矩書翰　「大隈重信宛」　明治卅年六月廿四日　一六八

一一一七　北畠治房書翰　「大隈重信宛」　明治卅年六月三十日　一七五
一一一八　藤波言忠書翰　「大隈重信宛」　明治卅年七月一日　一七八
一一一九　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年七月三日　一七九
一一二〇　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治卅年七月九日　一八〇
一一二一　横田國臣書翰　「大隈重信宛」　明治卅年七月九日　一八三
一一二二　高平小五郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅年八月三日　一八五
一一二三　栗野慎一郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅年八月四日　一八六
一一二四　高野孟矩書翰　「大隈重信宛」　明治卅年八月八日　一九六
一一二五　村田寂順書翰　「大隈重信宛」　明治卅年八月九日　一九七
一一二六　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年八月十三日　二〇一
一一二七　星亨電報　「大隈重信宛」　明治卅年八月十六日　二〇四
一一二八　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治卅年九月十六日　二〇七
一一二九　島田三郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅年十月一日　二〇八

一一三〇　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年十月二日　二一〇
一一三一　神鞭知常書翰　「大隈重信宛」　明治卅年十月九日　二一三
一一三二　德富猪一郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅年十月十四日　二一六
一一三三　松方正義書翰　「大隈重信宛」　明治卅年十月廿一日　二一七
一一三四　犬養毅書翰　「大隈重信宛」　明治卅年十月廿四日　二一八
一一三五　松方正義書翰　「黑田清隆宛」　明治卅年十月卅一日　二一九
【參考】伊東巳代治書翰　「伊藤博文宛」　明治卅年十月三十日　二二一
【參考】松方正義書翰　「黑田清隆宛」　明治卅年十一月四日　二二八
【參考】伊東巳代治書翰　「伊藤博文宛」　明治卅年十一月廿一日　二三〇
一一三六　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年十一月十三日　二三五
一一三七　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅年　二三八
一一三八　大隈伯外務大臣在官中に主催の宴會調　明治卅年　二四〇

明治三十一年

一一三九　大隈重信書翰　「伊藤博文宛」　明治卅一年一月十三日　二四三
一一四〇　井上馨書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年二月廿四日　二四四
一一四一　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年三月卅一日　二四五
一一四二　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年六月六日　二四七
一一四三　北畠治房書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年六月廿五日　二四八
一一四四　角田眞平書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年六月廿七日　二五二
一一四五　佐野常民書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年六月三十日　二五三
一一四六　北畠治房書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年七月二日　二五五
一一四七　高野孟矩書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年七月二日　二五七
一一四八　大隈重信・地方官訓示　明治卅一年七月五日　二六〇
一一四九　宮崎寅藏書翰　「犬養毅等宛」　明治卅一年十月一日　二六一
一一五〇　宮崎寅藏書翰　「犬養毅等宛」　明治卅一年十月七日　二六四

一一五一　江藤新作書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年十月十二日　二七〇
一一五二　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年十月十八日　二七二
一一五三　中川恒次郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年十月廿六日　二八〇
一一五四　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年十一月三日　二八一
一一五五　鳩山和夫書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年十一月二十日　二八三
一一五六　尾崎三良等陳情書　明治卅一年十一月廿七日　二八五
一一五七　大倉喜八郎等陳情書　「大隈重信宛」　明治卅一年十一月廿八日　二八九
一一五八　角田眞平書翰　「大隈重信等宛」　明治卅一年十二月三日　二九一
一一五九　角田眞平書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年十二月廿日　二九四
一一六〇　島田三郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年十二月廿二日　二九六
一一六一　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治卅一年十二月廿九日　二九七

明治三十二年

一一六二　本野一郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年一月十一日　三〇一
一一六三　梁啓超書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年一月三十日　三〇八
一一六四　武富時敏書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年五月四日　三一一
一一六五　牧野伸顯書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年六月五日　三一二
一一六六　近衞篤麿書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年七月六日　三一七
一一六七　富井政章書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年七月廿三日　三一九
一一六八　富井政章書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年八月八日　三二〇
一一六九　富井政章書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年八月廿三日　三二一
一一七〇　岩崎彌之助書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年八月廿三日　三二三
一一七一　富井政章書翰　「大隈重信宛」　明治卅二年九月十三日　三二三
一一七二　石井菊次郎書　「大隈重信宛」　明治卅二年九月廿一日　三二四

明治三十三年

一一七三　稲垣満次郎書翰　「大隈重信宛」　明治卅三年二月十二日　三二七
一一七四　犬養毅書翰　「大隈重信宛」　明治卅三年八月廿六日　三二八
一一七五　林董書翰　「大隈重信宛」　明治卅三年十月十五日　三二九

明治三十四年

一一七六　關直彦書翰　「大隈重信宛」　明治卅四年五月二日　三三一
一一七七　關直彦書翰　「大隈重信宛」　明治卅四年五月十日　三三二
一一七八　角田眞平書翰　「大隈重信宛」　明治卅四年十二月十六日　三三四

明治三十五年

一一七九　重野安繹書翰　「大隈重信宛」　明治卅五年三月廿四日　三三七
一一八〇　重野安繹書翰　「大隈重信宛」　明治卅五年四月廿二日　三三八
一一八一　鳩山和夫書翰　「大隈重信宛」　明治卅五年四月廿八日　三三八

一一八二　神鞭知常書翰「大隈重信宛」明治卅五年八月廿三日　三四〇
一一八三　香川敬三書翰「大隈重信宛」明治卅五年十月卅一日　三四三

明治三十六年

一一八四　神鞭知常書翰「大隈重信宛」明治卅六年七月廿七日　三四五

明治三十七年

一一八五　江藤新作書翰「大隈重信宛」明治卅七年十月十五日　三四七

明治三十八年

一一八六　江藤新作書翰「大隈重信宛」明治卅八年一月三日　三四九
一一八七　福地源一郎書翰「大隈重信宛」明治卅八年五月廿一日　三五〇
一一八八　福地源一郎書翰「大隈重信宛」明治卅八年八月廿五日　三五一
一一八九　中島錫胤等書翰「大隈重信宛」明治卅八年九月十六日　三五三
一一九〇　津田仙書翰「大隈重信宛」明治卅八年十月廿二日　三五八
一一九一　福地源一郎書翰「大隈重信宛」明治卅八年十二月廿七日　三五九

明治三十九年

一一九二　福地信世書翰「大隈重信宛」明治卅九年一月廿四日　三六一
一一九三　寺本婉雅書翰「大隈重信宛」明治卅九年十一月三日　三六一
一一九四　稲垣満次郎書翰「大隈重信宛」明治卅九年十二月二日　三六四

明治四十年

一一九五　藤井健治郎書翰「大隈重信宛」明治四十年一月一日　三六七
一一九六　匹田鋭吉書翰「大隈重信宛」明治四十年八月一日　三六八
一一九七　寺本婉雅書翰「大隈重信宛」明治四十年十一月二十日　三七三

一一九八　西田喜兵衛書翰　「大隈重信宛」　明治四十年十二月八日　三七七
一一九九　寺本婉雅書翰　「大隈重信宛」　明治四十年十二月廿三日　三八〇

明治四十一年

一二〇〇　寺本婉雅書翰　「大隈重信宛」　明治四十一年一月九日　三八五
一二〇一　鳩山和夫書翰　「大隈重信宛」　明治四十一年一月十八日　三八七
一二〇二　小池張造書翰　「大隈重信宛」　明治四十一年二月五日　三八八
一二〇三　高田早苗書翰　「大隈重信宛」　明治四十一年四月廿八日　三九一
一二〇四　寺本婉雅書翰　「大隈重信宛」　明治四十一年十月廿七日　三九二
一二〇五　寺本婉雅書翰　「大隈重信宛」　明治四十一年十一月　三九五
一二〇六　大隈重信起草・閑叟公臨時祭々文案　明治四十一年　四〇六

明治四十二年

一二〇七　巽來治郎書翰　「大隈重信宛」　明治四十二年一月十七日　四一三
一二〇八　李夏榮書翰　「大隈重信宛」　明治四十二年三月十二日　四一四
一二〇九　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治四十二年四月廿五日　四一五
一二一〇　岡本柳之助書翰　「大隈重信宛」　明治四十二年十月廿八日　四一九
一二一一　岡本柳之助書翰　「大隈重信宛」　明治四十二年十一月三日　四二二
一二一二　岡本柳之助書翰　「大隈重信宛」　明治四十二年十一月十日　四二四

明治四十三年

一二一三　岡本柳之助書翰　「大隈重信宛」　明治四十三年二月廿一日　四二五
一二一四　巽來治郎書翰　「大隈重信宛」　明治四十三年三月八日　四二六
一二一五　巽來治郎書翰　「大隈重信宛」　明治四十三年九月一日　四二七
一二一六　野村直吉書翰　「大隈重信宛」　明治四十三年十月十九日　四二七
一二一七　巽來治郎書翰　「大隈重信宛」　明治四十三年　四二八

一二一八　巽來治郎書翰「大隈重信宛」明治四十三年　四二九

明治四十四年

一二一九　小久保喜七書翰「大隈重信宛」明治四十四年三月二十日　四三一
一二二〇　永井松三書翰「大隈重信宛」明治四十四年六月十九日　四三一
一二二一　渡邊千冬書翰「大隈重信宛」明治四十四年七月十六日　四三三
一二二二　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治四十四年八月二十日　四三五

明治四十五年

一二二三　床次竹二郎書翰「大隈重信宛」明治四十五年一月十九日　四三七
一二二四　床次竹二郎書翰「大隈重信宛」明治四十五年一月廿四日　四三八
一二二五　床次竹二郎書翰「大隈重信宛」明治四十五年二月廿四日　四三八
一二二六　巽來治郎書翰「大隈重信宛」明治四十五年五月二十日　四三九

大隈重信關係文書補遺

一二二七　伊達宗城書翰「東久世通禧等宛」明治元年閏四月十三日　四四一
一二二八　サトウ書翰「大隈重信宛」明治元年六月十三日　四四三
一二二九　寺島宗則書翰「大隈重信宛」明治元年八月廿三日　四四四
一二三〇　東久世通禧書翰「大隈重信宛」明治二年四月十二日　四四五
一二三一　岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治二年四月廿七日　四四六
一二三二　内廷辨事書翰「大隈重信宛」明治二年五月一日　四四七
一二三三　平井希昌書翰「大隈重信宛」明治二年五月二十日　四四八
一二三四　名和緩書翰「大隈重信宛」明治二年九月六日　四五〇
一二三五　外國官書翰「大坂府外國掛宛」明治二年　四五一
一二三六　遠藤庸伺書「大隈重信等宛」明治三年五月廿八日　四五二
一二三七　島義勇書翰「大隈重信宛」明治三年八月三日　四五四

一二三八　三宮義胤書翰「大隈重信宛」明治三年九月廿八日　四五四
一二三九　平井希昌書翰「大隈重信等宛」明治三年十月廿五日　四五六
一二四〇　齋藤篤信齋建言書「大隈重信宛」明治三年十一月　四五八
一二四一　副島種臣書翰「納言・參議宛」明治四年正月十八日　四六〇
一二四二　東本願寺光瑩歎願書　明治四年十二月　四六〇
一二四三　三條實美書翰「大隈重信宛」明治五年二月十八日　四六四
一二四四　箕作麟祥書翰「大隈重信宛」明治五年四月十六日　四六五
【參考】箕作麟祥書翰「杉浦讓宛」明治五年五月四日　四六六
一二四五　渡邊昇書翰「大隈重信宛」明治五年九月十五日　四六七
一二四六　三條實美書翰「大隈重信宛」明治五年十月廿一日　四六九
一二四七　柳原前光書翰「大隈重信宛」明治五年　四七〇
一二四八　東洋銀行某書翰「大隈重信宛」明治六年二月十三日　四七一
一二四九　黑田清隆書翰「大隈重信宛」明治六年十一月廿七日　四七三

一二五〇　黑田清隆書翰「大隈重信宛」明治六年十二月十二日　四七四
一二五一　田中不二麿書翰「大隈重信宛」明治六年十二月廿八日　四七四
一二五二　大隈重信書翰「三條實美宛」明治七年五月三日　四七五
一二五三　陸奥宗光書翰「大隈重信宛」明治七年七月九日　四七六
一二五四　岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治七年七月十四日　四七七
一二五五　横山貞秀等書翰「大隈重信宛」明治七年七月卅一日　四七九
一二五六　大隈重信建議書「三條實美宛」明治八年一月四日　四八〇
一二五七　伊藤博文書翰「大隈重信宛」明治八年一月十八日　五〇六
一二五八　五代友厚書翰「大隈重信宛」明治八年五月廿七日　五〇七
一二五九　福地源一郎書翰「大隈重信宛」明治八年十月三十日　五〇八
一二六〇　西村貞陽書翰「大隈重信宛」明治九年六月一日　五〇九
一二六一　大久保利通書翰「大隈重信宛」明治九年八月十六日　五一一
一二六二　奈良原繁書翰「大隈重信宛」明治十年一月廿三日　五一三

一二六三　大隈重信上申書　「三條實美宛」　明治十年十月十二日　五一四
一二六四　大隈重信上申書　「三條實美宛」　明治十一年二月　五一五
一二六五　大隈重信・西郷從道上申書　「三條實美宛」　明治十一年八月　五一八
一二六六　ハウス書翰　「平井希昌宛」　明治十二年二月九日　五二〇
一二六七　伊藤博文書翰　「大隈重信宛」　明治十二年三月七日　五二二
【參考】ヘンネッシー書翰　「グラッドストーン宛」　明治十二年八月廿四日　五二三
一二六八　佐野常民書翰　「大隈重信宛」　明治十三年八月十日　五二五
一二六九　佐野常民書翰　「大隈重信宛」　明治十三年十一月廿一日　五二六
一二七〇　藤邨紫朗書翰　「大隈重信宛」　明治十四年四月七日　五二七
一二七一　五代友厚書翰　「大隈重信宛」　明治十四年四月九日　五二九
【參考】三條實美書翰　「岩倉具視宛」　明治十四年五月廿一日　五三〇
一二七二　佐野常民書翰　「大隈重信宛」　明治十四年十月十二日　五三一
一二七三　福澤諭吉書翰　「大隈重信宛」　明治十五年十二月廿六日　五三二
一二七四　犬養毅書翰　「大隈重信宛」　明治十九年七月十四日　五三三
一二七五　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治十九年十一月一日　五三四
一二七六　福澤諭吉書翰　「大隈重信宛」　明治廿一年三月十六日　五三六
一二七七　矢野文雄書翰　「大隈重信宛」　明治廿一年三月十六日　五三七
一二七八　辻新次書翰　「大隈重信宛」　明治廿一年十月廿九日　五三九
一二七九　福澤諭吉書翰　「中上川彦次郎宛」　明治廿二年八月一日　五四〇
一二八〇　大隈重信書翰　「黒田清隆宛」　明治廿二年八月廿五日　五四一
一二八一　大山巖書翰　「西郷從道宛」　明治廿二年十月十三日　五四一
一二八二　金玉均書翰　「大隈重信宛」　明治廿二年十二月卅一日　五四二
一二八三　德富猪一郎書翰　「大隈重信宛」　明治廿七年十月四日　五四三
一二八四　大隈重信立憲改進黨員に與ふる書　明治廿七年十月十日　五四五
一二八五　加藤高明書翰　「大隈重信宛」　明治廿八年九月廿六日　五四七
一二八六　德富猪一郎書翰　「大隈重信宛」　明治廿八年十二月十六日　五五〇

目次

一二八七　德富猪一郎書翰「大隈重信宛」明治廿八年十二月廿二日　二十二　五五一

目次終り

大隈重信關係文書　第六

自明治二十九年
至同四十五年

明治二十九年

一〇六一　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治廿九年一月三日

恭賀新禧

閣下幷伯爵夫人御初御全家御多祥御越歲之事ト奉恭賀候降テ小生夫妻無恙加齡仕候間乍憚御休神可被下候爾來數週間御無音ニ打過不本意此事ニ御座候荆妻本邦出發之際モ種々御懇命ヲ辱フシ結構ナル頂戴物被仰付候上伯爵夫人ニハ態々茅屋ヘ御枉車被下候由重々ノ御厚情奉謹謝候御蔭ニテ同人モ海上無恙去ル十一月廿七日佛國馬港ヘ安着小生ハ同地ニテ出會之上去ル十二月一日一同無事任地ヘ到着仕候其後健康ニテ目下迄モ尙ホ衣服其他ノ支度ニ取掛居候田舍者カ都會ヘ出タルヤト一般諸事不慣ニテ

大困却ヲ極メ候御憫察可被下候

本邦ハ目下議會招集中政界多端ノ事ト存候過日伊藤首相ト御會合ノ事新聞幷通信ニヨリ承知早晩其結果世上ニ相現ハレヘキコトヽ暗ニ刮目致候處其後現内閣ト自由黨トノ連合談半官報ニ依テ發表セラルヽヨリ一驚ヲ喫シ居ル内又々首相隱退ノ希望ヲ報スルアリ其後ノ動靜ニ就テも未タ承知セス次回ノ郵便ニハ續報ヲ持來ルナラント相待居候事ニ御座候新聞ノ所報ハ大體表面ノ「ニ止マリ裏面ノ事情ヲ盡サヽルヲ以テ一件ノ顚末更ニ要領ヲ得ス只々種々變化ノ速ナルニ驚入ル計ニ御座候伊藤ノ辭職心ハ眞實ト又ハ自由黨トノ連合談ヨリ起リタル内部ノ不折合ヲ撲滅セントテ例ノ十八番ヲ出サレタルコトカ甚タ疑ハシク存居候事ニ御座候

本邦ノ外交危局モ先キニ曲リナリニ一段落相付タルモノト相見ヱ近頃本省ヨリ電訓ニ接スルコト打絶ヱ且ツ當國ノ公論モ最早東洋ノ事ニ飽キタルモノト見ヱ加フルニ他ノ問題續起ノ爲メ今日ニ在リテハ東洋ノ事ヲ一時全ク忘レタルモノヽ如シ隨テ此方ゟ報告スヘキ種子モナク彼是ニテ近來大ニ閑散ヲ覺エ稍々無聊ニ相暮居候但シ今ヨリ三四十日ノ後ハ當國交際季節初マリ可申ニ付然ル上も三四ケ月内社會上ノ事繁多ニ可有之候

先ハ新年ノ賀詞旁荆妻ニ對スル御懇情ノ御禮ヲ兼テ如此候乍末伯爵夫人へ宜敷御鳳聲被下置度荆妻ゟモ同樣申出候時下御自重爲邦是祈書餘重信ニ讓リ匆々頓首

二十九年一月三日　倫敦

大隈伯爵閣下　侍史

（英國駐劄特命全權公使）加藤高明

一〇六二　菊亭修季書翰「大隈重信宛」明治廿九年五月十六日

謹啓時下益御清康御起居之事と奉欣賀候陳ゝ先般函館より不取敢以鄙墨申上候如ク　閣下之懇篤なる御書面平田平出之兩氏へ被下候よも係ハラ

ス于今何等之返答も無之察するニ到底不調之事と被存候爾來歸札後可相成ハ工風仕兼々御懇諭も拜承仕候ニ付當秋迄ハ不煩　尊慮樣致度与百方苦奔仕候得共何分今日迄種々遣り繰を以テ凌キ來リ候後ト云ヒ思ワ敷金融相付不申殆ント絶望仕候去迚農場ハ鐵道布設之中心トナリ漸ク發達ノ時運ニ向ヒ人皆之ヲ羨望スルノ秋ニ當リ我農場ノミ萎縮候樣ようてハ多年ノ宿志一朝水泡ニ屬し自家損害ト信用ヲ傷フノミナラス數多ノ移住民ヲシテ非常ノ不都合ニ立至ラシムルハ必然ニ付一方ニ對シテハ大ニ勇氣ヲ示シ着々其歩ヲ進メされハ相成ラス又負債ノ方モ利子を差入延期を依頼スルトカ夫々方法不相付ゐハ萬一破綻候樣ようてハ眞ニ名譽ヲ地ニ落シ可申旁以テ此際是非共六千圓ノ金圓無之ゐハ當坐ノ凌キ不相付候處前陳之次第ニゐ到底當地ようて金策無覺束誠ニ寢食ヲ忘レ苦慮罷在候此上奉懇願候モ眞ニ恐縮千萬之至ニ候得共何卒事情深ク御憐察被成下成ル可クハ來ル六月中旬迄ニ金六千圓丈ケ一時御心配ニ預リ候事ハ相叶間敷哉只管歎願仕度實ニ多年辛苦ヲ嘗メ漸ク今日ノ好況を來し候場合ニ際し却ゐ進退維谷マルノ悲堺ニ沈淪候ハ無比ノ殘念ニ御坐候親戚三條鷹司諫早等相應ノ資產家モ有之候得共在京中拜陳候通リニテ助勢ノ程モ甚タ無覺束ニ付偏ニ閣下ノ高庇ヲ仰キ死活ヲ決シ候外途無ク誠ニ御迷惑至極ト恐縮之至ニ不堪候得共前陳之次第深ク御憐察被成下何トカ御配慮ヲ蒙リ候ハヽ再生之恩忘却不仕候小生平素心ニ誓フ處ハ北陬ノ寒鄕ニ入候上ハ萬苦ヲ嘗メ始メテ一生ノ安樂ヲ得ンヿハ曾て覺悟致シ居候ニ付一身ニ來ルノ辛慘困苦ハ素ヨリ敢テ辭セス不撓不屈ノ精神ニ御坐候得共如何セン金錢ノ事ハ譏譽褒貶ノ岐ルヽ處殊ニ北海道ノ天地ハ烏合ノ人士多ク之レ等ノ感觸一層甚敷候間最モ苦悶不能措處ニ御坐候抑雨龍ノ計劃ハ當初ヨリ　閣下ノ示諭ヲ仰キ候ヨリ率先遂ニ今日之盛況ヲ來シ候譯ニテ自家今回ノ困厄をさへ切拔候上ハ將來ノ大成ハ甚タ遠カラスト被存候之レ皆ナ　閣下ノ賜ものなるよ尙且金錢上之御配意迄相掛候ハ眞ニ心苦敷次第ニ御坐候得

共前陳ニ成行ニ付吳々御憐察ニ上何分ニ御勘考ヲ希ヒ示諭を辱ふるを得ハ實ニ本懷ニ至ニ御坐候心緒麻ニ如ク文亂言鄙ニシテ禮ヲ失スルヿアラン幸ヒ御海容ノ程偏ニ奉懇願候草々頓首

追伸本文及滯京中ニモ縷述仕候事情ニ付到底此末小生より諫早氏へ賴談候共詮無キ事ハ申上ル迄モ無之候得共　閣下ニ思召ヲ以テ萬一ニモ今一應同氏へ御說得被成下候場合モ御坐候ハンカ御承知ニ通金錢上ノ苦痛ハ頗ル無經驗ニ故カ兎角急速ニハ不相運ヨリ往々時機ヲ誤リ候事不尠候間其邊ハ御含ノ上自然御談被下候樣あるい神速相決シ候樣御注意ニ預リ度且ツ諫早氏へ御相談被下候ノ御都合ニ候ハヽ何卒先前御配意願候同氏ノ保證ニあ鍋島侯ヨリ三萬圓借用候方ニ乍此上御心配奉希上度一回急ヲ凌あん爲めノ六千圓ノ分御相談承諾ヲ得候上ハ最早他日ノ大策ハ不被應哉と顧念仕候之レ等ノ義餘リ差越申上恐縮ノ至リニ候得共遠路往復ノ日子モ要シ候ニ付心付ノ儘不顧失敬御含迄奉希置候不可惡御了承願上候實ニ差迫リ候事情吳々も御憐察奉希上候時下折角御自愛是祈乍憚令夫人御始へ宜敷御傳言奉願上候草々再拜

廿九年五月十六日

大隈重信殿　閣下

（侯爵）菊亭修季

一〇六三　犬養毅書翰「大隈重信宛」明治廿九年五月廿六日

伊藤辭表ヲ出シタルニ付前例ニ由リ前任總理ヲ御召ニ相成筈ニ處松方旅行ニ付山縣ヲ御召ニ相成後任ノ事ニ付御下問被爲在候處山縣ハ迚ヲ微力能ハサル旨を御答申上且ツ伊藤ガタトイ病氣ヨテも死する迄ハ勉めて此難局ヲ處理セサル可らざる旨を御答申上候末猶黑田ト十分協議可仕旨申上候て直ニ黑田を訪問し爾後黑田を訪ふこと三回ヨして遂ヨ兩人同伴に

て大磯ニ行キ伊藤を勸めて再ひ東京ゟ來らしめんとの計畫ヲ定メたり〔但し伊藤病氣〔腸チブスゟ變するの虞ありとて醫師ハ心配致居候よし〕の爲めなる乎或ハ他ゟ事故ある乎今日迄兩人同伴大磯ゟ行きしを聞カズ尤も兩三日の中にハ必ずイツレなり分明ナルベシ〕

伊藤ゟして辭職ヲ思ひ止らざる時ハ黑田をして其任ニ當らしめんと山縣ハ盡力中のよし若し黑田其任ニ當ルトキハ黑田ヲ以て大隈伯ヲ誘引スベシ但シ松方ハ行掛上直ゟ入閣も出來まじイヅレ少々後れて入閣する樣ニなるべし

右ハ西鄕ニ親密ナル（柏田盛文）者昨日同伯より聞得タル所ゟして信スベキ價値ある者也而して西鄕自身ハ伊藤の辭スルヿニナレバ是又退キソーナ語氣なりしと申事（但辭表スルヤ否と問ひたる尤も伊集院等ヲ始めとし黑田門下ノ人ハ黑ゟ未定と答へタル由）田ニ對シテ決シテ總理トナル勿レト勸告致居候趣ゟて彼等ノ見ル所ゟてハ黑田ハ容易ゟ山縣ナドの勸ゟ應せざるべしとの事

右ノ次第ニ付井上伯歸京後ノ第一運動ハ必す右ノ如キ姑息案ノ下ニ於て閣下ゟ御入閣を勸め候事ゟ可相成哉と想像被致候得共今日の場合ゟてハ少クトモ松方ヲ生捕り來らざれは對議會策の上ゟおゐて頗ル不便と愚考致候ノミナラズ少し持重スレバ先方ハ瓦解ト被存候

此場合ゟおゐて直ニ瓦解せざるとも今日の勢ヲ以て進めバ松方樺山宗門のものを始めとし諸派の勢ヲ集めて儼然タル一大黨を作ルヿ容易ゟ可相成と存候

目下同志諸派ノモノヽ最モ懸念スル所ハ閣下ガ自家ノ技倆ヲ恃テ單獨ノ進退ヲ爲スヿニナラズヤとの一點ニ御座候

廿六日　　毅　敬具

大隈伯閣下

一〇六四　菊亭修季書翰「大隈重信宛」明治廿九年六月八日

謹啓時下清暑之候益御清康御歸京相成候趣奉欣賀候御出先ニ於ゐハ人皆高說を拜聽をん事を冀望セシ旨時々新聞紙上よて拜見仕候長途之御旅中御疲も不被爲入哉御左右相伺ヒ度却說五月十六日付を以テ不顧恐縮懇願仕候義御歸京後早々御迫り申上候樣よて不本意千萬ニ候得共前便も申上候事情ニゐ此際之擧動頗ル將來ニ影響を及し可申と誠ニ寢食を忘レ苦慮不能措場合ニ御座候間乍此上御憐察を蒙り御配神ノ程偏ニ懇願仕候幸ヒ御庇護ニ賴リ焦眉之急相凌キ候ハヽ名譽と信用を保持し多年の宿志を果ス盖シ遠キニあらさるをしと被存候目下雨龍ノ景況ハ御蔭ニテ益々發達致シ當年中ニハ墾成六百町ニハ至リ可申見込ニ御坐候旁以テ一方ニハ地主ノ體面小作移住ノ奬勵村道及排水其他ノ必用ニ金圓ヲ要シ一方ハ負債ニ對ひる利子ノ仕拂を果さゝるゝゝ甚タ面目ヲ失シ可申事となり苦悶之極尊慮ヲ煩シ候次第恐縮之至ニ不堪候希クハ前陳之事情深ク御憐察此上之御配慮と願意成就ノ明諭ニ接スルヲ得も欣喜雀躍之至ニ御座候此内御令室樣御始へ宜敷御鶴聲奉願上度長途之御旅行御障も不被爲入哉御左右相伺度候草々頓首

追伸曾テ懇書を辱をし平田平出兩氏へ依賴ノ件も目今需ニ應し兼候趣漸ク三日付ノ書面ニテ返答ヲ得候之レ又御含迄ニ申上置候再拜

六月八日

大隈重信殿

菊亭修季

一〇六五　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治廿九年六月十日

拜啓向暑之候閣下愈御多祥御座可被成奉恭賀候次ニ小生瓦全勤務罷在候間乍慮外御休神被下度候扨先頃も久敷振ニテ御鄕里へ御歸省之由新聞紙ニ因リ承知數拾年振ノ御歸鄕ナル由ニ就テも種々懷舊御愉快之事モ有之

タルコトヽ遙察仕候尤モ此頃ヒ既ニ御歸京之事ト奉存候

本年ハ自由黨之助力ニ依リ諸種ノ政府案無恙議會ヲ通過シ歲計豫算上俄ニ幾多ノ增加ヲ呈シ候趣戰勝後多少國務ノ擴張ヲ要シ候ハ素ヨリ衆人ノ期望シタル所ナレトモ此ノ如ク俄ニ大膨張ヲ爲シ候コトハ又意外千萬ニ有之尤モ年來我邦ノ進運ハ意外ニ都合克大抵ノ事ハ成功ノ實蹟モ有之コトユヘ此度ノ諸計畫モ著敷蹉跌ナク何トカ相纏リ可申トハ被存候得共中ニハ隨分落付ノ惡シキ方案モ相見エ到底盡ク滿足ノ結果ヲ看ルコトハ覺束ナキニアラスヤト懸念致候事ニ御座候就中軍備ノ擴張ハ海陸ノ輕重ヲ顚倒シ實ニ心外千萬陸軍當局者ニ在リテハ素ゟ其擴張ニ望ムコト自然ノコトニ有之候得共國家前途ノ方針ヲ定メ夫ニ從テ軍備ノ方法ヲ立ツルハ內閣ノ責任タルハ申迄モ無之然ルニ一モ此邊ニ就キ斟酌ヲ加ヘタル形跡ナク一ニ陸軍當局者ノ云フ所ニ默從シ我國ノ前途ニ不必要ナル大陸軍ヲ設備スルニ至リタルハ眞ニ歎息之至陸軍當局者ニ於テモ其提出案通リ實行ヲ看ルニ至リタルニ就テハ或ハ意外ノ感ナキニアラサルヘシ之ニ反シ海軍當局者ノ小心不能ナル如何ニモ僅々タル艦船新造ニ甘ンジ而カモ議會通過後迅速ノ著手ヲ爲サスシテ今日尙ホ實際注文ヲ爲スニ至ラス聞ク所ニ依レハ謂レモナキ國交際上ノ斟酌ヲ加ヘ僅々タル艦船ヲ歐米ノ數國ニ分割シテ注文セントスル趣向ナルヤニ有之誠ニ批評ノ外ナル不埒ニ御座候將又其僅少ナル造船計畫ノ完成ヲ七年ノ後ニ期シタルハ何タル緩慢ソヤ今日ノ定例ニ依レハ甲鐵戰鬪艦ハ三年以內巡洋艦ハ一等艦ニテモ二年以內ニ於テ落成慥カナリ然ルニ我海軍ハ造船ニ不必要ナル長月日ヲ掛クル趣向ナルハ殘念千萬ナルコトニ候聞ク所ニ依レハ海軍擴張ニ第二期計畫ナルモノ有之由若シ之レアラハ何故ニ第一期ト同時ニ之ヲ實行セサリシニヤ一方ニハ英蘭銀行ニ莫大ノ金ヲ空敷遊ハセ置キナカラ我國運ノ進捗ニ緊要缺クヘカラサル海軍整備ノ完成ヲ十年ノ後ニ期セントス實ニ言語道斷ノ事ト存候

板垣(退助)伯入閣ニ由若シ同氏ニシテ内務從來ノ積弊タルビユーロクラシーヲ打破ル英斷アラハ誠ニ賀スヘキコトナレトモ同人ノ技倆ト入閣前後ノ行掛ニテハ到底目醒シキ働キ出來申間敷前途甚タ覺束ナキモノニ候陸奥(宗光)ハ遂ニ辭職ニ由全ク病氣重症ニ赴ク爲メナルヘク氣ニ毒ナル事ニ御座候西園寺(公望)ハ兼任ノ由ナルニ付何レ其内專任ノ外務大臣ヲ別ニ撰定スル趣向ナルヘク一説ニハ西公使(德二郎、露國駐劄公使)ヲ呼返ヘシテ之ニ充ツル考アリトモ相聞エ候處同人ハ露西亞通ナル上可ナリコンモンセンスヲ有スル人ナル樣承候得共中央政府ニ立チテ仕事シタルコトナク又露西亞以外ナル外國ノ事ハ知ラサルヘク適否如何可有之哉兎角白キヲ白キト云ヒ黑キヲ黑キト云ヒ得ル勇氣アル人ヲ外務ノ當局ニ得タキコトヽ存候

當國目下交際季節ノ眞最中ニテ夫妻トモ日夜多忙ヲ極メ奔走致居候然ルニ事務ハ近頃至テ閑散ニテ何等處辨ヲ要スルコトモ無之退屈千萬ニ候交際モ外交官職務ノ一部分ナレトモ御承知通リ此方ハ至テ不得手ナル性質ニテ心中甚タ迷惑ニ存居候段御憫察可被下候

先ハ御起居伺旁如此候乍末伯爵夫人ヘ宜敷御傳言被成下度荆妻ゟモ閣下幷伯爵夫人ヘ敬意ヲ表シ度旨申出候時下御自重專一奉存候敬具

六月十日　倫敦　高　明

大隈老伯　侍史

一〇六六　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治廿九年九月廿三日

拜啓時下御多祥奉恭賀候陳者昨廿二日外務大臣御拜命ニ趣今夕貴電接到欣喜不能措外交上一大面目ヲ開クヘクト爲國家深ク奉賀候戰勝ニ因リ我國ノ名聲ヲ發揚シタルコト一方ナラサルニ當局者ノ處置宜敷ヲ得サルコト一再ニシテ止マサルノ結果既ニ折角占取シ得タル名聲ノ幾分ヲ毀損シタルノ觀有之遺憾至極ニ存居候處今閣下ニ於テ其局ニ當ラレタル以上ハ

是ヨリ外政ノ振作ヲ看ルコト必定ニ有之大ニ人意ヲ強メ候小生等モ驥尾ニ付シ努力致度候間時々方針御開示之上御訓諭相成度奉希望候從前ノ當局者ニ對シ小生等カ最モ直接ニ不足ヲ感ジタルハ通信ノ不完全ナルニ在リ事物ノ成行ヲ示サス方針ヲ開示セサルハ勿論此方ノ報告又ハ問合ニ對シテモ殆ント答ヘタルコトナシ言ヲ換ヘテ之ヲ云ヘハ全ク在外ノ使臣ヲ無視セリ而シテ在東京ノ外國使臣ニ偏重シ各國ト交渉事件アルニ際シテモ主トシテ之ヲ仲立トシ我代理者ヲ利用スルコトヲ爲サス從テ何故ニ之ヲ海外ニ派遣シ置クヤヲ疑ヒタル場合一再ニシテ止ラス尚此義ニ關シテハ不日公信ヲ以テ將來ニ對スル小生ノ意見申上候事モ可有之其節卑見ニシテ採ルヘキモノアラハ御採用相成度奉希望候

○朝鮮ニ於ケル露國ノ專横以來我ハ只偏之ヲ恐レ戰々兢々ノ有樣アリ而シテ英國カ露ノ專横ヲ制セントスル傾キナキヲ以テ俄ニ之ヲ疎ンシ又其ニ語ルニ足ラスト速斷シ山縣侯露國滯在中英政府ヨリ朝鮮ノ將來ニ對シ我政府ヘ提議ヲ試ミタルニ際シテモ詰問的ノ先決問題ヲ掲テ本論ニ入ルコトヲ避ケタル如キ甚タ遺憾ナリシ成程英國ハ近來外交ノ困難多端ニシテ朝鮮問題ノ如キ左マテ利害痛痒ノ度合深カラサルモノニ就テも俄ニ動カズト雖モ若シ露國カ愈ヨ朝鮮ノ疆土ヲ侵略セントスル實跡ヲ示スノ場合ニ於テハ英モ全ク默止セサルヘシ且ツ條約改正事件ニ就テも他ニ先ンジテ之ニ同意ヲ表シ續テ日清事件終局ニ際シテ大陸ノ三大國ヨリ頻リニ勸誘ヲ受ケナカラ之ニ應セスシテ中立ヲ守リタル如キ我國ニ對シ尠カラサル好意ト認メ然ルヘク爾後今日ニ至ルマテ英人ハ一般ニ我國ニ對シ友誼ヲ表シ居ル場合ナルニ加ヘ我ト英トハ將來東洋ノ政略ニ關シ衝突スル恐レ尠ナクシテ利害ヲ同フスルモノ多キヲ以テ假令同盟ナトヽ迄深入スルハ英國ノ國是ニ於テ許サヽル處ナルモ其以下ニ於テ出來ル丈交誼ヲ厚フシ他日ノ變ニ備フルノ可ナルハ卑見ニ於テハ一點ノ疑ナシ然ルニ近頃我政府ノ傾向ハ全ク之ト反對ナリ閣下ハ必定英國ニ親ムノ方針ヲ執ラル

ヽコトナラント愚察致居候處貴意果シテ如何其内御内示被下度候
海軍ノ擴張ハ我國ニ取リ眞ニ急要ノ事ナリ然ルニ陸軍ヲ過大ニ增加シタ
ルニ拘ハラス海軍擴張ノ緩慢ナルハ實ニ不審之事ナリ風説ニハ或外國ノ
感情ヲ氣遣ヒ態ト控目ニセシトノ事只々驚入ルト云フノ外ナシ而カモ其
僅ニ議決シタル軍艦ヲ價安ク品好クシテ而カモ製造期限ノ最モ短カクシ
テ且ツ間違ナキ英國ニノミ注文スルコトヲ爲サスシテ獨逸佛蘭西亞米利
加等ニ分配シ品惡ク價高ク而モ時ノ長ク掛カルヲ忍ハントスル如キ卑
見ニテハ言語道斷ト云フノ外ナシ高見如何相辨ヘス候得共若シ尙ホ契約
未濟ナラハ更ニ議ヲ改メラレ悉皆英國ヘ注文シテ速成ヲ期セラレ度モノ
ト存候將又英國ヘ注文セントスル分ニ對シテモ海軍當局者ノ處置緩慢至
極ナル爲メ漸ヤク今ヨリ數日前入札ヲ纏ムルヲ得今度ノ郵便ヲ以テ在當
地海軍出張員ヨリ本省ニ申立其沙汰ヲ待テ契約調印ニ至ル筈ナレモ愈ヨ
調印ヲ爲シ得ルハ本年十二月或ハ來年ニ入ルコトアルヘシ豫算ヲ議決シ

テヨリ九ケ月若クハ十ケ月ヲ經サレハ造船着手ヲ爲スヲ得ストハ眞ニ緩
慢ノコトニ候ハスヤ是畢竟豫算ノ議決ヲ待チ夫ヨリ五月ニ入リ掛員ヲ當
地ヘ向ケ出發セシメ六月下旬着英夫ゟ當地出張員間ニ種々評議アリ其結
果本省ヘ數次電信往復ノ爲メ又一ケ月ヲ費ヤシ七月下旬ニ至リ初メテ造
船者ニ大要ノ計畫ヲ示シ六週間ノ期限ヲ以テ入札ヲ徵シ本月十日造船者
ゟノ入札ヲ落手シ夫ゟ又評議ヲ費ヤシ漸ヤク此便ニ間ニ合フコトヽナレ
リ是ヨリ以後ハ來十月中ニ當地ヨリノ郵便海軍本省ニ達シ夫ゟ少ナクモ
一ケ月餘ハ審査評議ニ費シ早クモ十二月ニ入ラサレハ決定命令ノ電報當
地ヘ達セサル見込ナリ然ルニ軍艦何隻ヲ作ルヘキヤハ豫メ相定リ居ルコ
トナランニヨリ昨年中本年豫算ノ調査出來ト同時ニ當地海軍出張員ニ命
シ造船者ゟ入札ヲ徵スルノ手續ヲ爲セシナラハ晩クモ本年五六月頃ニハ
契約ヲ整フルコトヲ得今頃ハ既ニ着手中ナルヘシ入札ヲ徵シタリトテ必
ス安直ノ者ゟ落札セシムルコトモナク又全ク注文セサルモ我政府ノ勝手

ナルハ入札命令書ニ明記アルコトユヘ豫算決定前タリトモ豫備ノ手續ヲ爲スコトニ就キ毫モ故障ナシ然ルニ其處置之ニ出テス悠然タルハ實ニ殘念至極ナリ謂ユル第二期ノ造船計畫ナルモノニシテ果シテ實行セラルヽ義ナレヒ其節ハ今回ノ如キ不手際ナキ樣致度切望之餘リ實見ノ模樣御參考ニ供シ候餘リ冗長ニ渉リ候ニ付今回ハ是ニテ擱筆書餘追々申上候事ニ可致時下御自重爲邦是祈伯爵夫人ヘモ小生ノ祝意ヲ表セラレ度荆妻ゟモ同斷申出候敬具

九月二十三日夜十二時倫敦ニテ

大隈伯閣下　侍史　高明

追テ小生モ最早一任期ノ半ヲ過シ候處妻ハ遙ニ海外ニ來リ尙ホ一年ニモ相成不申今一兩年ハ滯英希望候ノミナラス小生於テモ尙姑ク此地ニ在リ外交上ノ經驗ヲ得度希望ニ候間幸ニ不肖御見捨不相成候ハヽ當分依然此地ニ留任相叶候樣御高配被成下度偏ニ奉懇願候

種々ノ事申上前後錯雜致候間御推讀奉願候不備

（廿九年十一月廿四日接受）

一〇六七　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治廿九年十月一日

拜啓時下御多祥奉恭賀候次ニ小生瓦全勤務致居候間乍餘事御省神被下度候

議會ノ召集モ追々相近付キ豫算ノ計畫整理等ニ付一方ナラス御苦辛之義ト奉察候餘事ハ扨置外務省ノ來年度豫算モ前大臣在任中ノ計畫ニテハ本年度ニ比シ五六拾萬圓ノ增額ヲ要スル筈ナリシ由閣下御就任ニ付テハ幾分カ其計畫ニ更正ヲ加ヘラルヽコトモ可有之ト存候處傳聞スル所ニ依レヒ右增加金額中メキシコ、ブラジル、シヤムロニ公使館ヲ新設シ辨理公使ヲ置キ布哇モ現在ノ公館ヲ進メテ公使館トシ辨理公使ヲ置クノ計畫アリシ

由小生ノ考ニテハメキシコヤブラジルニ公使館ヲ置クハ殆ント無用ノコト、存候條約國ユヘ何カ代表者ヲ置クノ必要アリトスルモ領事館ニテ十分足レルコトニ可有之布哇モ亦今日迄數年來領事館ニテ濟ミ來リ實際格別ノ支障アリタルコトヲ聞カサレハ是又其資格ヲ進ムルノ要之レナカルヘク唯シヤムロハ何カ公館ヲ置クコト必要ナランカナレトモ是又領事ニテ十分ニ可有之決テ辨理公使ヲ置クノ必要ハ有之間敷ト被存候右ノ如ク必要モナキ國々ニ小サキ公使館ヲ置キ限リアル豫算ノ上ニ繰廻ハシノ困難ヲ見ルヨリハ從來設置シ來リタル歐米ノ各公使館殊ニ英佛露獨米ノ五公使館ニ今一層ノ力ヲ入レ經費ヲ增加シテ其働ヲ自由ナラシムルコト遙ニ上策ト被存候然ルニ前任大臣在任中ノ外務省ハ右ノ方針ニ出テス現ニ當公使館ノ如キ其土地柄ノ邊僻家屋ノ不體裁ナルコト言語ニ絶シ不都合千萬ナルニ付昨年來頻リニ家賃增額他ヘ移轉ノコトヲ申立テタル處其申立ヲ至當ナリト認メナカラ他ニ公使館新設其他ニテ經費ノ增加夥シキ爲メ來年度豫算ニテハ之ヲ請求スルコト難行屆ニ付其次年度ニ延ハスコトニ決シタル旨過日斷然ト訓示有之如何ニモ心外千萬ナカラ最早期日モ相迫リ候今日ユヘ押シテ再請スルモ到底其効有之間敷ト乍殘念差控居候次第ニ御座候我帝國ノ公使館ハ何レモ左迄立派ト云フニハアラサレトモ大陸諸國及米國ニアルモノ先ツ以テ可ナリノ體裁ヲ具ヘ左シテ體裁ヲ欠カサルニ獨リ倫敦ハ我國トノ關係上最モ必要ナル國柄タルニ拘ハラス其必要ト逆比例ニ我公使館見苦シク如何ニモ難堪次第ナルハ唯タ小生ノ一家言ナラス歐洲諸國ニ在ル我公使館ヲ彼是比較實見シタルコトアルモノハ何レモ首肯スル處ト存候右ノ如ク極メテ必要ナル公使館ハ不體裁ノ儘ニ据ヘ置キナカラ一向必要モナキ南米ノ片田舍ニ公使館ヲ新設セントスルナト誠ニ沒道理ノ處置ト存候併シ前文ニモ申述候通リ最早來年度ノ豫算ニハ間ニ合フ間敷止ムヲ得ザルコトニ候間三十一年ノ豫算ニハ是非トモ相上リ候樣御注意相願度偏ニ奉冀望候夫ニ就ケテモ無用ナル公使館新設

置ノコトハ之ヲ見合セラレ其力ヲ必要ナル場所ニ盡サレ度希望ノ卑見御
參考迄ニ申上候

外國ノ眼中ニ於テ我國ノ輕重ヲ爲スハ海軍ノ强弱ニ存シ陸軍ノ如キハ如何ニ精鋭强大ナルモ比較的我國ノ重ミヲ爲スニ足ラス又陸軍ニシテ如何ニ强大ナルモ海軍ノ力弱ケレハ國外ニ其力ヲ伸スコト能ハス就テハ我戰後ノ經營中兵備ノ擴張上海軍ヲ主トシ陸軍ハ遙ニ其下位ニ置キ可然ハ昨年中閣下ヘ申上ケタルコトカト存候又右卑見申上候迄モナク閣下ニ於テモ素ヨリ御懷抱ノコトヽ存候處前内閣ハ此看易キ道理ヲ知ラス又之ヲ知ルモ陸軍ノ强請ヲ抑制スルコト能ハサリシカ何レニモセヨ海陸軍ノ輕重ヲ顚倒シ島國ニ在テ決テ必要ナキ平時十五萬ノ陸兵ヲ備フル計畫ヲ許スノ側ラ海軍ハ甚タ之ヲ輕視シ而モ其輕少ナル造船ヲ他國ノ容喙ニ氣遣ヒタルカ第一期第二期ニ分チ此間誠ニ氣長キ年數ニ割付ケタルハ眞ニ國ヲ誤ルノ處置ト相考候就テも今日ニ於テモ尙ホ出來ルコトナレハ陸軍ノ增加ヲ減削シ（此減削ハ師團數ヲ減スルモ可ナラン又ハ小隊中隊等單位ノ兵員ヲ減スルモ可ナラン而シテ後者ハ陸軍人ノ氣受上或ハ前者ニ勝ランカ）其減シ得タル經費ヲ海軍ニ充テ大ニ之カ擴張ヲ圖ラレ度爲國切望ニ堪ヘス敢テ建議仕候而シテ英國造船ノ實例ニ因レハ最大甲鋭戰鬪艦ハ二年半以内巡洋艦ノ如キハ一年乃至一年半ニテ竣功スルコトナレハ六年七年ト云フ如キ長キ期間ヲ設クルニ及ハス極メテ速成ヲ可トス現ニ清國ヨリ收入シタル償金ハ英蘭銀行ニ遊ヒ居レリ又來年以降每年貳百六七拾萬磅ハ清國ヨリ收入スヘキヲ以テ決テ徒ラニ長期造船ノ計畫ヲ爲スニ及ハサルコトヽ相考候而シテ今一事此序ニ申上度ハ戰鬪艦ノ大サニ就テナリ今度注文ニ相成ルヘキ一艘ノ甲鋭艦ハ其排水壹萬五千噸内外ニシテ謂ユル第二期ノ計畫ニ屬スル戰鬪艦モ亦同噸數ノ筈ナリト聞ク然ルニ壹萬五千噸ト云ヘハ世界中ノ軍艦ノ最大ニ位スルモノニシテ英伊兩國ノ海軍ヲ除ケハ他ニ其比類ヲ見ス而シテ其英國ノ如キモ近來稍ヤ噸數ヲ減スルノ得策

タルヲ悟リタルカ本年ノ着手ニ係ル數隻ノ戰鬪艦ハ壹萬貳千噸内外ヲ出テス而カモ英國ハ世界ノ各方面ニ利害ノ關係ヲ有スルヲ以テ軍艦ノ條件中第一ニ要スルモノハ遠洋航海ヲ爲シ得ル爲メ石炭食料ヲ澤山ニ積入レ得ルコト是ナリ從テ其需要ヲ充タサン爲メ已ムヲ得ス噸數ヲ增加スルコトナルニ我日本ノ海軍ハ將來ハ去サ知ラス目下及今後數年ノ處ニテハ決テ遠洋萬里ヲ航海スルノ必要ナク日本海黃海及臺灣近海ヲ馳驅スルノ力アレハ足レリ英國ニ壹萬五千噸ノ軍艦アレハトテ我海軍カ其使用先ヲモ考ヘス盲目的ニ英國ノ眞似ヲ爲スニハ及ハサルコトナリ夫モ我財力ニ餘リアリテ英國ノ如ク數拾隻ノ戰鬪艦ニ備ヘントスルコトナレハ中ニハ世界中最大ヲ以テ誇ルニ足ルヘキ大艦ヲ作ルモ可ナランナレトモ今日ノ我財政ハ之ヲ許サス僅ニ五七艘ノ戰鬪艦ヲ作リ以テ甘セントスルトキナレハ聊ニテモ無益ナル造船費ヲ省キ一隻ニテモ多クノ船ヲ作ルコト最モ得策タルヘシ小生カ從來内外軍人ヨリ聞ク所ニ依レハ軍艦ノ戰鬪力ハ兵器ノ如何ニ在テ噸數ノ多少ニ因ラス卽チ壹萬噸ノモノニテモ壹萬五千噸ノモノニテモ戰力ニ於テ格別ノ相違ナク然ルニ噸數ヲ多クスルハ遠航ニ堪ユル爲メ多分ノ石炭ト食料トヲ積入ルヽ場所ヲ作ラン爲メ已ムヲ得ス爰ニ至ルナリト且ツ造船代價ハ主トシテ噸數ニ基クモノナレハ壹萬噸ノ船ヲ壹萬五千噸ノ船ト比較スレハ其代價ハ三分ノ二トマテハ下ラサルモ之ニ近キ減少ヲ見ルコト通常ナリトノ事ナリ果テ然ラハ限リアル海軍造船費利用ノ上ニ於テ最モ注意スヘキコトヽ存候現ニ當地出張ノ海軍士官及技監等ハ壹萬五千噸ト云フカ如キ大艦ヲ作ルノ無用ニシテ壹萬噸若クハ壹萬貳千噸ニ止ムルノ得策ナル旨ヲ本年ノ初ニ於テ懇切ニ海軍本省ニ建議シタルニ拘ラス本省ハ之ヲ用ヒスシテ頑然壹萬五千噸ノ大艦ヲ作ルノ計畫ヲ爲シ來年度ニ於テモ亦之ヲ襲ハントスル模樣ナリト是レ大ニ注意スヘキコトヽ存候間小生カ從來聞得タル所ヲ以テ閣下御熟考ノ資料ニ供スルコト如此候

先ハ是ニテ擱筆書餘重テ可申上候時下御自重是祈乍末伯爵夫人へ宜敷御
鳳聲被下度妻ヨリモ兩閣下へ敬意ヲ表シ度旨申出候頓首

十月一日夜倫敦ニテ

高　明

大隈伯閣下　侍曹

一〇六八　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治廿九年十月九日

拝啓愈御多祥奉恭賀候早稲田ニ御閑居之時ト違ヒ自然御出掛ヲ要スルコトモ多カルヘク御難澁ト奉存候御身體別段御障モ無之候哉不堪掛念候平素ノ御攝養肝要ナルヘクト遙ニ相祈居候降テ小生至極健康罷在候間乍他事御休神可被下候

前便ニ陸軍費削減ノコト申上候處其後又熟考スルニ師團ノ數ヲ減シ又ハ單位ノ兵員ヲ減スルコトハ既成ノ今日當局者ニ於テモ苦情百出センカトモ存候果テ然ラハ三年ノ現役ヲ二年ニ減シテハ如何如此クスレハ師團數ハ減セサルモ總體ノ現役兵三分ノ二ニ減スヘシ而シテ豫備後備ノ年限ヲ一二年宛增シ各五年トシテ一人ノ在役總計十二年トセハ戰時五十萬ノ兵員ヲ得タシト云ヘル陸軍當局者ノ目的ハ達シ得ラルヘシ陸軍費ノ減少ハ勿論壯丁ヲ空シク無生產ノ地位ニ置クコトヲ減シ直接間接國家ノ利益尠カラサルコトハ申迄モ無之加フルニ日本陸軍人ノ尊崇置カサル獨逸モ既ニ二年制ナリ其他墺國ノ如キ亦然リ今日ノ處三年制ヲ固執スルハ佛蘭西計リト存候頗ル御考ヘモノト被存候間思付候儘此如追加トシテ申上候

本邦大藏省ニ我內國公債ヲ倫敦市場ニ賣出シテ金融ノ便ヲ謀ラントスル希望アリ近頃ニ到リ頗ル熱心ノ度ヲ高メ前內閣在任中小生ニ訓令アリ大ニ其賣出ヲ計畫スヘシトノコトナリ小生ハ公使トシテ右等ノ「ニ直接盡力スルノ便宜ヲ有セス幸ニ正金銀行支店ハ昨年來種々本件ニ苦心盡力中ナルヲ以テ之ニ向ヒ一層ノ盡力方ヲ內談シ置ケリ然ルニ我公債ノ銀價公

債ナル一事ハ唯一ノ防害トナリ之ニ向ヒ大ナル需要ヲ呼起サス將來ニ於テモ同一ノ原因ニヨリ希望ヲ達スルコト頗ル困難ナルヘシ右小生ノ意見ハ去八月初旬公信ヲ以テ前任大臣（前外務大臣、西園寺公望）ヘ申立置タリ然ルニ近着時事新報其他各新聞紙ヲ看ルニ本件ニ關スル記事澤山ニ相見エ何レモ倫敦ノ市場ニテ大ニ我内國債ノ賣レル見込アルコトヲ唱道シ甚シキハ數年ナラスシテ我内國債ハ盡ク外國人ノ手ニ歸スルナルヘシナト、放論スルモノアリ唯抱腹絶倒ト云フノ外ナシ尤モ是等ノ記事ハ啻ニ新聞記者ノ空想ヨリ出テタルノミニアラス或ハ大藏省日本銀行邊ニテモ過大ナル希望ヲ有スルモノアリ自ラ新聞紙上ニ射映スル場合モ可有之カト存候是等ノ論者カ基礎トスル處ハ我政府カ莫大ノ償金ヲ英蘭銀行ノ庫中ニ積置クノ事ハ大ニ我國ノ信用ヲ增シ從テ我公債ノ需要ヲ起スト云フニアルカ如シ成程我國ハ戰勝ニ由テ大ニ其名ヲ紹介セラレ就中外債ノ力ニ借ラスシテ大戰ヲ爲シ遂ケタル手際ハ頗ル外人ヲ驚カシ從テ我國力ニ未曾有ノ信用ヲ置カシメタルニ相違ナク又巨額ノ償金ヲ倫敦ニ積置ク（我ニアリテハ回收ノ法ニ苦ム爲メナルニ拘ハラス）一事ハ一層我財政ニ對スル信用ヲ增サシムルモノナルコトハ論ナケレトモ前文ニ述ヘタル如ク我内國債ノ盛ニ當地ニ賣レサルハ全ク其銀貨ヲ代表スルモノナルニ因リ信用ノ如何ニ拘ハラサルナリ若シ假リニ信用鞏固ナル英國政府カ銀貨公債ヲ發行スルコトアリトスルモ當地ニテハ之ヲ顧ミルモノ少ナカルヘシ抑モ我大藏省カ此ノ如ク熱心ニ我公債ヲ外國ニ賣ラントスルモノハ其趣意何レニアルヤ小生ニ於テハ之ヲ解スルコト能ハス公信ニテ得タル理由書（大藏省ニテ起草セルモノニハ）國際動產（國際動產トハ如何ナルモノナルヤ明瞭ナラス）ノ賣買ヲ外國ニ盛ナラシメ内外ノ金融ヲ疏通圓滑ナラシムト云フ如キ極メテ漠然タルコト認メアリ其意外資輸入ニアルカ（一）抑モ亦日本ノ銀行又ハ商人ヲシテ外國ニ於テ我内國債ヲ抵當トシテ外國銀行ヨリ借金ヲ爲スノ便ヲ得セシメントスルニアルカ（二）或ハ又大藏省預金局ニ堆積シテ始末ニ困難ナリトノ評判アル軍事公債等ヲ内

國ニ於テ處理スルノ途ナキヨリ外國人ニ賣付ケ重荷ヲ卸サントノ目的ニ出ツルモノナルカ(三)若シ前記第一ノ目的ナラハ我整理公債ヲ賣ルト云フ如キ間接迂遠ノ法ヲ採ラス宜シク堂々ト金價外國公債ヲ募ルヘシ此法ニ出テハ今日我國ノ信用堅固ナル際四朱半ノ利息ニテ何程ニテモ希望ノ金額ヲ得ンコト決テ難事ナラサルヘシ或ハ賣出價格ニテ加減スレハ呼ヒハ四朱ニテモ募リ得ラルヘシ然レトモ現ニ莫大ノ金員ヲ空敷英蘭銀行ニ遊セ置クノ今日之ヲ用ヒスシテ特ニ外國債ヲ募ルノ愚ヲ爲スモノナカルヘシ然ラハ第二ノ目的ナランカ此便利ヲ得ハ我海外貿易商等ニ幾分ノ利益ヲ與フルコトハ之レアルヘケレトモ既ニ我公債ヲ有スル程ノ資力アル者ハ必ス此法ニ因ラサルモ他ニモ相當ノ方法ナキニアラサルベシ又一私人ノコトハ政府ニ於テ太ク心配スルノ必要モナク若クハ之レアリトスルモ其効薄ク寧ロ當該者ノ工夫ニ一任スルノ勝レルニ若カサルヘシ最後ニ第三ノ目的卽チ大藏省預金局カ飲込過キ居ル公債ヲ吐出スノ良途ヲ看出サ

ントスルニアルカ表面ノ理由書頗ル立派ナルニ拘ハラス(實行ノ困難ナルハ別問題トシ)眞正大藏省內幕ノ事情ハ果テ之レナルヘキカト推察セラル果テ當レルヤ否若シ當リ居ラハ是コソ差當リ最モ困難ナル問題ナルヘシ從テ救濟法ヲ見出スコト甚肝要ナレトモ我公債ノ多額ヲ外國人ニ持タシメンコトハ到底見込ナキコト前段縷述ノ如シ此見込ナク若クハ尠ナキコトニ望ヲ掛ケンヨリハ他ニ其策ヲ講スルノ勝レルニ若カス

前段ニ述フル處ハ本件ニ關スル倫敦目下ノ景況ト之ニ關スル小生ノ卑見ナリ簡單ニ云ヘハ曩ニ西園寺(公望)外務大臣カ渡邊(國武)大臣ノ依賴ニ應シ小生ヘ訓令シタルコトハ小生ニ於テ實効ヲ奏スルノ見込ナシト云フニアリ然レトモ訓令ノ次第モアリ且ツ少額ナカラモ外國人ニ持タシムルコトヲ得ハ我ノ資本ヲ增ス譯ユヘ現ニ正金銀行支店長ヲ督勵シテ賣却ノ實行ヲ勉メシメツヽアリ倫敦取引所ノ請求ニ係ル我公債ニ關スル取調書モ過日到着シタルニ付正金銀行ノ手ヨリ取引所ヘ差出シ置シメタレトモ尙ホ取調中ニ

テ我公債價格ヲ其相場表ニ掲クルノ一事決定ニ至ラス尤モ何レ近日決定ニ至ルヘク而シテ多分ハ之ヲ可トスルニ到ルヘキニ付其上ハ多少其向ノ注意ヲモ惹キ賣買ヲ助クルコトアルヘシ正金銀行ニ於テモ油斷ナク盡力致スヘキ筈ナレトモ遠キ未來ハ去サ知ラス到底近キ未來ニ於テ我大藏省ノ希望ヲ充タサシメンコトハ先以テ無覺束從テ我將來ノ財政ヲ計畫セラルヽニ當リテハ我內國公債ハ多ク外國人ニ賣ルコト能ハサルモノト斷念シ總テノ經理ヲセラルヽコト必要ト存候而シテ若シ僥倖ニモ相應ノ取引アルニ到ルコトアラハ意外ノ儲ケモノトセラレタル方安全ト存候右御參考ニ供シ候間便宜松方伯（正義、內閣總理大臣）ヘモ御傳言相成度奉希望候

書餘他日ニ相讓候伯爵夫人ヘ宜敷御鳳聲被下度時下御自重爲邦是祈頓首

十月九日倫敦ニテ

大隈伯閣下　侍史　高明

一〇六九　土方久元書翰「大隈重信宛」明治廿九年十月二十日

拜啓露國外務（ロバノフ）大臣ヘ勳章被下之義言上仕候處　御承知被遊候依テ其旨賞勳局（恩）總裁ヘ申入置候且又貴官御拜謁之義ヲ樞密院會議ヘ　御親臨前可被仰付との御沙汰ニ御坐候

右兩條得貴意度草々敬具

十月二十日

大隈大臣殿　土方久元（宮內大臣）

一〇七〇　渡邊昇書翰「大隈重信宛」明治廿九年十月廿一日

拜上此度行政整理之御一顧ニも相成可申と廿七八年編製之檢査資料なるもの二冊差上候條御落手可被下候將亦比日御內話申上候之廿六年度行務

成績書、上奏之折九百萬圓之未確定（内六百萬地方土木費補助額）云々申上置候處該費之確定ニ至ラサルハ繼續中ニ付無致方候得共其詳細ハ大藏（松方正義）大臣ゟ爲注意内々差出置候一書有之是を御一讀被下候ハヽ一班之情況も分明と奉存候條併ゟ此段得貴意候草々頓首

十月二十一日

大隈伯閣下

昇（曾野檢査院長）

一〇七一　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治廿九年十月廿二日

拜啓追日寒氣相加候處閣下幷伯夫人愈御清榮御座可被成奉賀候次ニ小生夫妻平安罷在候間乍憚御休神可被下候

本日本邦ゟノ郵便到着九月二十三日迄ノ新聞ニ接シ外務大臣ニ親任セラレタル迄ノ處承知仕候折柄御齒痛トカニテ宮中ヘモ御出頭相叶ハサリシ由關心之至ニ候但シ當座ノ事ニテ其後疾ニ御全快ト奉察候得共全國ノ重望ヲ負ハセラルヽ大切ノ御身體折角御自重之程偏ニ奉祈候新内閣ニハ長州人一向加ハラサル容子其不平被思遣候御如才ナキ事ナカラ前途御用心專一ト奉存候經費節減ノ一手段トシテ陸軍擴張成功年限延長ノ方案有之候由果テ遂行セラレタルヤ否陸軍ニ關スル卑見ハ過日來數回申上タル通リ現在ノ計畫ハ過大ニ過クルヲ以テ大英斷ヲ以テ減削スヘシト云フニアレトモ若シ行掛上已ムヲ得サレハ年限延長ニテモ無キニハ相勝ルコト申迄モ無之何卒斷行アランコト窃ニ希望致候

本年ハ本邦各地天災多ク遂ニハ東京府下迄及ホシ候由之カ爲メ國庫ノ補助ヲ要スルコト必定尠カラサルヘク御苦心之事ト奉存候

本日當地ノ新聞ニ北京發電報掲載有之日清新條約ノ批准交換濟ミタルコト幷林董カ露國ヘ轉任ヲ命セラレタルコト相見ヘ候林轉任ノヿ若シ事實ナラハ至極適任ニ可有之且ツ兼テ本人ニ於テ宿望ト相聞エ候コトユヘ定

ノテ欣喜之義ト存候後任ニハ何人ヲ遣サルヘキヤ新條約ノ施行ニ伴フ種々ノ面倒モ可有之且ツ今後數年間ハ償金受授ニ關スル注意モ入用ナルコトユヘ御人撰最モ肝要ト存候若手ノ内ニハ隨分材能アル人モ可有之乎ナレトモ是迄官邊ニ緣故ナキ者ハ兎角辭令ニ習ハス又功名ヲ急キ若クハ世間ノ見物ヨリ褒メタカラル丶爲メ往々蹉跌スルノ例内外ニ之ナキニアラス左レハトテ官途履歴丈ノ謂ユル老成人ニテハ役ニ立タス夫ニ就キ彼ニ就ケ過渡ノ時代適當ノ人材ニ乏敷隨分御困難之事ト奉恭察候時下御自重專一ニ可有之乍憚伯爵夫人ヘ宜敷御鶴聲奉願候頓首

十月二十二日夜倫敦ニテ

大隈老臺　侍史　高明

一〇七二　副島種臣書翰「大隈重信宛」明治廿九年十一月廿八日

拜啓昨日ハ萬機御多端之折柄をも不厭東邦協會へ御臨席且高明之御說話一統へ御聞せ被成下厚意難有存候老生直樣御禮として參上可仕候處昨歸途感冒因ゐ先以書中及陳謝候何卒兩三日中參堂可仕含ニ御座候草々不宣

十一月廿八日　副島種臣　拜

大隈外務大臣閣下

一〇七三　九鬼隆一書翰「大隈重信宛」明治廿九年十一月

秘啓

此節殊ニ御多忙中參上モ御迷惑奉察候間左ニ以書中一應申上置候扨事僅ニ一縣知事ノ進退轉地ニ關シ餘リ長文行山ナル事々敷候ヘ共閣下ハ特ニ奈良縣ノ近況十分御聞込ト奉存候處御内話中甚タ領解シ難キ點有

之候ニ付大略左ニ申上置度候

古澤ガ一兩年來縣治ニ私シ萬口一ニ奈良縣下ノ不幸ヲ歎スルハ疾クニ高耳ニ達シ居候筈ト存候間今更其件々ヲ擧ケテ申上候迄モ無之ト存候ヘ𪜈一ニ川上郷特別稅ヲ以テ私シタル事一ニ長谷鐵道ノ妨害ヲ企立テ私シタル事罪人西村兼文ヲ雇入種々ノ什寶ニ害ヲ與フル事其他同人ノ惡計ハ決ゐ枚擧ニ暇アラス候ヘ𪜈

逐一御尋相成度上ハ現內閣員ハ差措キ別ニ奈良縣住稅所宮中顧問官ナリ大坂住北畠治房ナリ內務省縣治局員ナリ又奈良縣下ニテハ特ニ土倉庄三郎ノ外自由黨員中古澤ニ格別緣故アルモノヽ外ハ公民一般ニ誰人ニ御尋相成候テモ大抵古澤ノ惡計至ラサルヿナキハ御答辯可及ト存候

北畠治房ハ奈良出身ノ人也小生ハ同人ニ懇親ナル者ニモ無之又從來ノ交誼モ無シ然ルニモ關ラス去十月ニ小生大坂巡回中北畠ハ閣下ガ奈良京都ノ博物館新設ヲ　上奏セラレタルヿ又閣下ノ學術技藝等ニ殊功有ラセラルヽヿ抔多々話シ致シ又次テ奈良縣治下ノヿニ及ヒ北畠ハ云ハク古澤ガ奈良縣下ニ損害ヲ與ヘタルヿハ殆ント數ヘ盡クスヘカラス奴輩惡計至ラサルナシ古澤ガ奈良ニ治民ノ任ニ在ル間ハ奈良縣下ハ暗黑ノ世ト見ルヨリ外ハナシ云々ト」此一事ハ丁度小生ガ同縣下ノ專門事業ニテ什寶技術學藝ノヿニ付古澤在任中ハ奈良縣下ノ不幸ナガラ先ツ奈良ハ暗黑ノ世ト見ルゟ外ハナシトシテ終ニ同縣下ノミハ小生ガ盡力着手ヲ中止シ居ルト同情同感ニテ特ニ牧民官ノ不正ナルゟ其間同縣民ノ不幸ハ圖ルヘカラサルモノニ御坐候

御懇意之稅所篤子ハ最初古澤ノ小才巧辯ニ致サレ古澤ヲ信シ古澤ヲ稱揚シ特ニ古澤ヲ博物館長ニ任スルニアラザレハ稅所ノ兼任モ解カレタシト强迫シ小生ニ迫リ土方伯ニ迫リ其强暴至ラサルナキゟ小生ハ古澤ノ非ナルヲ知リツヽ不得已山高ノ兼任ヲ免シ古澤ヲ館長ニ兼任セシメタルヿニ御坐候

然ルニ爾後數ケ月ヲ出テズシテ果シテ大ボロヲ現ハシ不體裁ナガラ兼任ヲ免シタルヿニ御坐候

凡一ケ年半前迄ハ古澤ニアラサレハ迚モ奈良縣民ニ幸福ヲ與フル者ハアラジトマデ魅セラレタリシ税所篤子ガ此數ケ月以來ハ脱然トシテ夢醒メ來ツテ目下東京滯在中ニモ猶唱ヘツヽアル件々ノ大略ヲ左ニ列記仕候（蛇足ハ勿論タルヲ知ル）

税所老人云ハク古澤ノ如キ狐狸同樣ノ魔物ヲ奈良ニ牧民セシメテ政府ハ尚免スルヿヲ爲シ得スンハ税所ハ到底奈良ノ居住ニ堪ヘス去テ麗城下ニ隱遁スルノミナリ云々（老人ノ言ハ小兒ノ如シ然レ𪜈尚其眞率ナルヲ察スルニ足ル）

税老曰ク今度ノ縣會ニテハ無論不信任決議ヲ提出スルナルヘシ云々

又曰ク彼レ古澤ノ惡計至ラサルナキハ萬人ノ共ニ知ル所ナリ殊ニ松方伯ニハ先頃古澤排斥運動ニ上京シタル連中ニ十分ノ添書ヲ持タセ置キタルヲ以テ現政府ハ十分解シ居ル筈也然レ𪜈樺山（資紀・内務大臣）ニハ萬一此上京中序モアレハ一通リハ話シ致ス積リ也云々

又曰ク北畠治房ハ奈良縣下ニ勢力大ナリ同人ガ結合シ居ル古澤排斥團體ハ益々汪盛ニ赴ケリ是レモ大ニ功ヲ奏スヘキナリ

又曰ク古澤ノ如キ者ガ知事タル間ハ奈良ノヿハ迚モ仕方ハナシ只々放下シ置クヨリ外ハナキ也且ハ彼奴殊ノ外才物ニテ姦謀至ラサルナキニ付恐ルヘシ〳〵故ニ税老ハヨラズ〳〵サハラズ善キ樣ニアシラヒ居ル也貴君モ餘リ熱心ニ掃清ヲ勉メサル方可也云々（老人ノ言小兒ノ如シ且曾テ元氣ノ税老モ今ハ氣力ノ衰耗氣之毒ノ外ナキ也）

又云ハク方今古澤排斥ノ聲ハ縣下到處ニ强汪也縣下ノ良民有力ナル志士ハ盡ク彼奴ノ惡ヲ憎マサルモノハナキ也云々

又云ク古澤ノ轉免ヲ來年マデ待ツベシナド云々十方モナキヿ也芋ガ長官タル以上ハ敏巧ナルヿハ出來サルマデモ斯ル正道ノ義ヲ執ルハ頗ル勇敢ナラサルヘカラス速ニパシ〳〵ヤラシメザルヘカラス云々

大凡右等ノ外尚古印ノ悪計妄爲ヲ指摘スルヿハ頗ル詳明也夫ノ數十ケ月前マデハ古印ニアラサレハ奈良ノ幸福ハ降ラサル也トマデ信ジキツタル税老ニシテ今ハ卽如此是以テ古澤行爲ノ一班ヲ推知スルニ足ルト存候

古澤轉地ノヿヲ高島（朝之助）ニ密話致候處同中將ハ云ハク當來議會ノ大勢ダニ定マラハ古澤ハ第一免職ノ已ムヘカラザル人物也今轉地セシメテハ少々免ノ字ガ延引ナルヘシ少時待タシテハ如何云々

樺山（資紀）内務ニ密話致候處同氏ハ大ニ請込委細ヨク領解ス唯今度夫レ迄ニ手ヲツクル談議ハマトマリ居ラザリシニ付今一應談議ヲマトメテ決行可致云々松印首相ニ密談致候處能ク〳〵領解シ去ル然レ𪜈首相ハ依例直チニ決行ノ確答ハナクボンヤリ然タリ

扨高印ノ談一理アルヿニ候ヘ𪜈古澤ハ一日奈良ニ置ケハ一日ノ損有之又彼レ小才巧辯ニ長ケタルモノニ候半ヾ現政府ノ基礎未タ鞏固ナラサル際免官トナリテ醜ヲ自由黨類中ノ下劣ニ投シ施政ノ妨害ヲ爲サシムルモ格別ノ仕事ハ爲シ得サルモ亦好マサルヿ也夫レヨリハ當分黨派其他ニ格別ノ關係加損ヲ及ホサヾル長州カ日向カ卽千田（貞晩）カ小浦（大浦兼武カ）ノ代任ニ遣ラルレハ本人ノ高恩モ無上ノヿニ候也

奈良ハ古印ノ如キ選リニ選リタル唯一ノ醜類サヘ追ハレ候ハヾ代任ハ何人ニテモ強テ望ム所ハナキ也世間並々ノ良心アル人物ニ候ハヾ幸福ニ御坐候

前内閣ノ時自由黨ガ政府ノ一部ヲ占メタル時ハ古澤ハ俄カニ自由黨ニ頗ル精勤シテ奈良ノ田舍ニハ自由黨ニ相應ノ奏功モアリ前板垣（退助）内務ハ大ニ古澤ヲ得トシ居リタルニモ關ラス（併古印ノ人物ノ悪シキヿハ正カニ認メ居ル由明言アリタリ）甚タ縣治ニ不都合ナルヲ認メテ已ムヲ得ス終ニ古印ヲ三重縣ニ遷シ前首相ノ割愛ヲ得テ鮫島武之介ヲ奈良縣知事ニ送ルヿニ内定シ上奏文モ出來テ今ハノ間際ニ至リ意外ノ邊ニ大妨害ヲ生シ（古澤ハ勿論奈良ニ限ルノ仕事要計アルヲ以テ必死トナリテ奈良ニ留マランヿヲ

計營ス）一時止ミトナリ而シテ三重ハ佐賀ゟ轉シ又前首相ハ鮫島ノ知事止ミタルヨリ別ニ昇任ノ已ムヲ得サルヲ以テ辨理公使ノ名ヲ與ヘタル也

古澤ガ近來國民協會ヲ離反シテ一意恰モ自由黨ニ精勤シツヽアル最中自由黨ノ内務サヘ自黨ノ利ヲ捨テ古印ノ奈良ヲ追放スルノ已ムヘカラサルヲ認定決行セントシタルヲ以テ見ルモ古印ノ奈良ニ害アルヿハ推知シ易キ也右樣ゟ次第ニ付何卒高明ヲ以テ現場實況御洞察ゟ上近々ノ閣議ニ於テ依例グラ〳〵優柔ゟ論共起リ候ハヽ大喝一聲以テ何卒古印ヲ奈良ゟ追放セラレ日向カ山口ヘ御向ケ被下度候

政府ノ内意ハ千田カ小浦ヲ熊本ヘ向ケ其代知事ハ安樂（薩藩）（現今熊本縣書記官）ヲ昇任セシメラレ度趣ニ付

何卒古印ヲ右千田カ小浦ノ代ニ遷サレ奈良ハ安樂ニテモ誰レニテモ普通ノ良心アル人物ニ候ハヾ何人ニテモ宜布候也

何卒此時此機會ニ必然他ヘ御遷シ被下度候相願置候也

十一月

【備考】古澤滋、是年十二月廿六日石川縣知事に轉任を命ぜられ、水野寅次郎代つて奈良縣知事となる。九鬼隆一は時に樞密顧問官たり。

一〇七四　加藤高明書翰「大隈重信宛」　明治廿九年十二月四日

拜啓寒氣ゟ節愈御清福奉賀候次ニ小生瓦全罷在候間乍憚御休神可被下候扨ゟ專賣特許商標等ノ義ニ關シ英政府ヲシテ裁判權還付ヲ承諾セシムル樣盡力スヘキ旨御訓令ニ從ヒ當國外務省ト談判ヲ試ミ候次第ハ詳細今便公信ヲ以テ具申候間右ニテ御承知被成下度兎角我意ノ如ク相運ハサルハ一ハ小生ノ微力ニモ基キ可申候得共畢竟青木（周蔵）公使談判ノ不十分ナリシニ起因スル次第ニ有之候全體本件ニ就テハ本年四月日獨新條約調印ノ節ヨリ本省ト同公使トノ間ニ齟齬アリ數次ノ往復モアリタル趣ハ夙クニ傳聞致候處其後消息ヲ聞カス其内去ル十一月十八日ヲ以テ伯林ニ於テ新條約

ノ批准交換相濟ミ候趣當地新聞紙ニテ見受候ニ付裁判權事項モ何トカ折合付キタルコトヽ存居タルニ突然御訓令ニ接シ其末段ヲ取調ヘ候所ニ依レハ獨逸トノ談判ハ不滿足至極ニテ一向要領ヲ得サル儘批准交換相成候事相分一驚ヲ喫シ申候公信ニテ申上候通本件ニ關スル青木ノ辯明ハ奇々妙々ニテ一向取留メ所無之眞ニ道理ノ分ラサルノカ又ハ最初失策ヲ爲シ之ヲ取繕ハントテ不思議ナル辯解ヲ工夫シタルモノカ何レニシテモ隨分不都合ト存候然ルニ本省カ此不都合アルニ拘ハラス批准交換ヲ諾セラレタルハ何レ已ムヲ得サル事情アリタルニ因ルコトヽ存候尤モ青木ハ自分ゟ前任大臣幷ニ閣下ヘ差出シタル電報寫ハ廻シ越候得共之ニ對スル本省ヨリノ來電ハ相示サス候ニ付本省カ此事ニ付果テ如何ナル思想ヲ抱カレタルモノナルカハ不分明ニ付從テ全斑ヲ知ルニ由ナク候得共青木ノ發電ノミニテ同人ノ申分不條理千萬ナルコト丈ハ相分リ今更案外ニ思有之候一體同人ハ獨逸政府ト餘リ心安ク成リ過キ其結果トシテ彼ニ抗シテ道理

ノアル所ヲ十分ニ申張ルコトハ或ハ多少困難ナル場合モ有之哉ニ被察帝國政府カ同人ヲ永ク獨逸ニ置クコトノ得失稍ヤ疑ハシクト相考候昨年中三國干涉ノ結果時ノ首相（伊藤博文）ハ其罪ノ大部分ヲ青木ニ歸シ召喚ノ念ヲ抱カレタルコトモアリタルヤニテ陸奥（宗光）ヨリ窃ニ小生ヘ申越シ青木ト獨逸政府ノ關係等ニ付小生ノ意見ヲ可述樣內意アリタルコトアリ其節小生ハ敢テ全體ニ青木ヲ辯護スルニハアラサレトモ三國干涉ノ罪ヲ同人ニ負ハシムルハ事理ニ適ハサルコトナル旨ヲ以テ强ク論辯シ其結果多少青木ヲ辯護シタル樣ナル姿ニ相成候得共此度ノ失策（或ハ今少シク强キ言葉ヲ用ヰタキ位ナリ）ニ就テハ實ニ驚入ルノ外無之何レ此義ニ就テモ閣下ニ於テ相當御考アルヘキコトヽハ存候得共遺憾ノ情禁スル能ハス遂ニ一言スルニ至リ申候

次ニ葡萄牙ト條約改正ノ事業ハ先年來行掛リノ裁判權問題其途ニ橫ハリ隨分困難ノ由ニ傳聞候處彼モ小國トハ云ヘ苟モ歐洲中ニ獨立スル國トテ他ヨリ見ル程ニ自分ヲ見クヒリ居ラサルハ勿論ニ可有之從テ此節當方ゟ

條約改正ヲ申出ツルニ當リ先年來ノ紛議ヲ再燃セシメ聊カ其面目ヲ回復セントスルモノゝ可有之乎果テ然ラハ彼ヲシテ穩ニ納得セシムルコト大ニ困難ト存候畢竟大事ノ前ノ小事ナルニ就テも姑ク彼ノ意ヲ容レ一時裁判權復活ノ「ヲ許シ穩ニ改正ノ局ヲ結ハレ候方得策ニハ有之間敷乎尤モ彼ニシテ我相當ノ談判ニ應セサレハ現行條約ヲ廢棄スルノ一途ハ有之候得共必要已ムヲ得サル場合ナレハ格別今日之場合之ヲ斷行スルコト全局ノ上ニ於テ其必要ナキノミナラス隨分不穩當ノコトニハ有之間敷乎加フルニ廢棄ノ處分ニ出テラルヽトキハ葡國自身ハ扨置キ他ノ國々(假令ヘハ英國ノ如キ)ヨリ其先例トナランコトヲ恐レ横鎗ヲ入レ多少ノ面倒ヲ惹起スコトモ或ハ出來可致尤モ右等ノ横鎗入リタレハトテ我ニ於テ取合ハサレハ夫迄ト云フ樣ナルモノナレトモ事ノ起リタル當時ニ於テハ兎ニ角今日我國ノ名聲大ニ發揚シ且ツ諸大國トノ條約改正談判モ略ホ結了シ愈ヨ歐米諸國ト平等地位ニ進ミタル際葡國ニ對シ廢棄權ヲ實行シタレハトテ我名聲ニ加フルコトアラサルノミナラス或ハ甚タ大人氣ナキ姿ニ相成ルコトモ可有之尤モ今更暫時ニテモ裁判權復活トアリテハ我國内ノ俗論ハ之ヲ喜ハサルコトモ可有之候得共是等ニ拘ハラス妥協其局ヲ結ハレ候方全局ノ上ニ於テ有利ノコトナルヘキカト相考候間卑見御參考迄ニ申上試候近着ノ新聞紙ニ依レと本年ハ議會ノ召集後レ十二月末ニ可相成哉ニ相見ヘ候處此頃ハ既ニ其期モ近ツキ候ニ付種々ノ用意ニテ御繁忙ナルヘク新聞ニ依レと陸軍豫算削減ノコト行ハレス海軍擴張期限短縮ノコトモ六ケ敷哉ニ相見ヘ果テ實ナラハ遺憾此事ニ候先頃申上候第一期計畫中當國ヘ注文可相成戰鬪艦ニ關スル海軍省ノ決意今日ニ至ルマテ當方ヘ通知ノ運ニ至ラス緩慢ノ處置驚入ルノ外無御座候

先ハ御起居伺旁如此候時下御自重爲邦是祈乍末伯爵夫人ヘ宜敷御鶴聲奉冀上候頓首

十二月四日　英京

大隈伯閣下　侍史　　高明　　五十二

一〇七五　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治廿九年十二月十日

拜啓愈御多祥奉恭賀候陳ゝ過日接到ノ郵便ニテ外交方針ニ關スル御訓令ニ接シ繰返ヘシ拜誦仕候御訓令ニ從ヒ爾後一層微力ヲ盡シ度ト期望致候從來ハ是等ノ方針ヲ示サルヽコト更ニ無之ハ勿論此方ゟ訓令ヲ乞フモ碌々回訓ニ接セサル樣ナル次第ナリシハ先々ゟ折々內申シタル通ニ有之候處閣下御就任後日モナキニ此ノ如ク明瞭ニ御方針ヲ示サレタルハ實ニ敬服ニ堪ヘス大ニ在外使臣ノ指導ト相成可申候御訓令書末項ニ公使館新設ノコト相見ヘ候處右ノ內布哇、墨斯哥、シヤムロ、ブラジルニ公使館ヲ置カルヽノ得失ニ就テも先頃モ內申致候通リ稍ヤ不用ナル事ニハアラサルヤト被存候布哇、墨斯哥ハ今日ノ儘ニテ一向差支ヲ見スシヤムロハ領事館ヲ新設スレハ事足ルヘクブラジルハ領事館サヘモ殆ント無用ニハ有之間敷哉ト相考候將又土耳古ニ公使館ヲ新設セラルヽノ計畫アリトノ一事ニ至リテハ小生ハ大ニ不審ニ堪ヘス候土耳古ハ或ル意味ニ於テ歐洲外交ノ集點ニ有之候得共是ハ今同國ノ國政カ萎靡振ハス且ツ基督教トマホメツト宗ノ衝突ヨリ常ニ歐洲諸大國ノ干涉ヲ免レス從テ歐洲外交官ノ眼ハ常ニ土耳古ノ方面ニ向テ注キ居候得共是レ全ク地方的（ローカル）ノ事情ニ基因シ我日本政府ニハ何等ノ關係モ無之事加フルニ土耳古ノ如キ衰亡ニ垂ンタル國ト和親通商條約ヲ結ヒタリトモ我邦ニ何等ノ利益ヲモ來タサス然ルニ該國トノ關係一日モ忽ニスヘカラス（御訓令書中ノ語ヲ用ユ）トハ抑モ何等ノ理由有之事ニヤ小生ハ甚タ不思議ニ存候且ツ夫レ土耳古ノ外交事項ニシテ吾人ノ注目スヘキハ是カ原因タル歐洲大國ノ動靜離合幷ニ土耳古ノ關係ヨリ影響スル處ノ大諸國間相互ノ關係ニ可有之候處此二項ハ土耳古ニ於テ見ルヨリハ遙ニ其本源タル英ナリ露ナリ佛ナリ墺ナリノ首都

ニテ觀察シタル方其眞相ヲ得ルニ近カルヘク土耳古ニ於テ發スル現象ハ其都ニ駐在スル前記諸大國ノ使臣カ本國政府ノ訓令ニ從ヒ進退スル有樣ニ止マリ右列國相互ノ關係其モノヲ看ルニハ却テ不便ニ可有之否到底爲シ能ハサルコトナリト云フモ敢テ過言ニハ有之間敷ト被存候旁土耳古ト條約ヲ結ヒ我公使館ヲ置カル、トノ一事ハ何ノ爲ナルヤヲ了解セス御訓令書中ニモ土耳古トノ關係ハ一日モ忽ニセサルヘカラス云々トノミアリテ其理由ヲ示サレザルニ因リ御趣意ノアル處ヲ知ルニ由ナク候得共小生等ノ考ニテハ啻ニ無用ナルノミナラス或ハ政治上通商上共ニ何等ノ關係ナキ我邦カ同國ニ公使館ヲ置クコトアラハ歐洲諸國ノ物笑ヲ來タスコトナキニモ限ラサルヘクト掛念致候間卑見腹藏ナク申上御參考ノ資ニ供シ候小生ハ御再考ノ上右ハ御絶念アランコトヲ切ニ希望致候

右ノ如ク比較的必要ナラサル國々ニ公使館ヲ置キ國費ヲ費サンヨリハ從前設立シタル所ノ公使館殊ニ清韓英露米佛等ノ公使館ニ今一層力ヲ入レラレ第一使臣ヲ精撰シ第二費用ヲ增サレ候方ノ遙ニ利益アルヘキ事ト被存候其然ラスシテ力ヲ各所ニ分チ何レニテモ格別ノ成蹟ヲ擧クルヲ得サルノ結果ヲ生スルハ眞ニ無上ノ不得策ト存候尤モ閣下ニ於テハ前記必要ナル公使館ニ力ヲ入レラル、ハ素ヨリ御覺悟ノ事トハ存候處現實ニ顯ハル、現象ハ時トシテ方向ヲ異ニスル傾向アルハ頗ル遺憾ノ至ニ候現ニ當公使館移轉ノ事ノ如キ適切ナル事例ニ可有之其故ハ當公使館ノ家屋カ到底帝國公使館トシテ不適當ナル事ハ十目ノ看ル所本省ニ於テモ其事實ハ之ヲ承認シ居ルニ拘ハラス南米諸國カ布哇ニ小生カ以テ不用ナリトスル公使館新設ノ事アル爲メ費用ヲ要スルヨリ來年度ニ於テ移轉ノ事ヲ實行セラレサルナトハ大ニ輕重ヲ誤リタル事カト被存候尤モ是ハ一例ニ過キス他ニモ或ハ同樣ナル事例可有之乎ト存候何分限リアル力ヲ數多ノ國ニ分タンヨリハ之ヲ比較的數少ナキ國々ニ集注シ十分ノ働ヲ爲サシメラレ候事最モ必要ニ可有之切ニ御熟考ヲ祈リ候

前記ノ次第ハ小生ノ宿論ニ有之默止スルニ忍ヒス尊嚴ヲ冒瀆ノ恐有之候得共無遠慮ニ申上候言辭ノ不敬ハ御容赦被下微意ノアル所御酌取被下度相願候

又同便ニテ授受シタル親展内訓書ニ因レハ海軍擴張期限ヲ六ケ年ニ短縮セラレ候筈ナル由眞ニ宜ヲ得タル御政略ト相考候何卒實行アランコトヲ祈ル然ルニ本件ニ關シテハ曩ニ追々内申致置候通リ海軍省ノ働振言語道斷ノ緩慢ニテ現ニ本年度ノ豫算ニ於テ協賛ヲ經タル戰鬪艦ハ本年度内僅カニ三ケ月ヲ餘スノ今日迄未タ注文ノ運ニ到ラス誠ニ驚入ルノ外無之最初豫算ヲ請求スルトキハ頻リニ金額ノ多キヲ求メナカラ所定年度内ニ之ヲ使用シ得サルハ同省年來ノ慣習ニ有之候處此節ノ不始末ニ至テハ眞ニ歎息ノ至ニ有之候就テモ此後トモ外部ヨリ十分ノ刺戟ヲ與ヘサレハ到底今ノ海軍當局者ヲシテ敏活ノ働ヲ爲サシムル望ミ無之ト存候此義ニ就テハ最前詳細申上タル事アレトモ歎息ノ餘リ再ヒ爰ニ繰返ヘシ御參考ニ供シ候

先ハ夫是申上度如此候時下御自重爲邦是祈頓首

十二月十日倫敦ニテ

加藤高明

大隈老臺　侍史

一〇七六　九鬼隆一書翰「大隈重信宛」明治廿九年十二月十七日

十二月十七日夜

拜啓小生今夜ハ少々風邪之氣味ニテ參上不能不得已秘書記代筆ヲ以テ申上候御一覽後丙丁ヲ希フ

急速秘啓

時勢甚タ切迫ニ赴キタルヲ以テ言辭隨而急迫御推恕奉希候

新聞紙案ハ如何被成候御見込ニ御坐候哉此一問題ハ全ク現内閣死活ノ問

題ト相成申候

政府人ハ自カラ御都合者流ノ集マル處ト相成候ヘハ隨而諸公ハ時勢ノ非ヲ聞クヿ少フシテ時利ノ好運ヲ聞クヿ多シ是レ甚タ政事ノ爲メニ憂フヘキ也

目下政海ノ實況ヲ直言スレハ第一ニ宮内省事件ノ結末政府ガ最後非常ニ不決斷ナリショリ大ニ人心ヲ失ヒ巨大ノ不利ヲ釀シタルヿ、第二ニ廟廊幕内多ク異分子ヲ貯ヘテ時々事々ニ不利ヲ招キツヽアルヿ、第三ニ行政整理ニ多數ノ異種類ヲ入レテ一モ急速ニ事業ノ擧ラサルヿ

凡右等ノ事柄ハ政府ハ非常ニ人心ヲ失ヒ唯一政府ニ味方スル進歩黨スラモ目下全ク半表半裏之間ニ在リ

而シテ今ハ唯新聞紙案ノ行爲如何ニヨツテ進歩黨ハ進退ヲ決スト云フニ内決致シ申候ハ淺間敷之至リ也

政府ハ何故ニ行政手裏ヨリ停禁兩事ヲ全廢スル能ハザルカ

政府ハ宮内省事件ノ不利ヲ發生シタルヲ以テ或ハ初志ヲ變セラレタルナラバ

政府ハ全ク現内閣ノ運命ヲ顧ミサルモノ也

實ニ現内閣ニ追隨シテ味方トナリタリシモノハ進歩黨ナルヘシ

曰ク無所屬曰ク國民協會中ニ就キ長州ハ非也紀州ハ非也大分ハ非也其他ニ非ナルモノ多シ

自由黨ノ東北連中ニ多少ノ紛紜ナキニアラサルヘキモツマリ或ハ辛フジテ纏マルナルヘシ自由黨ノ破裂ハ當ニスベカラス

今ヤ政府ハ進歩黨ノ一意賛成ヲ得レハ渇々劇切ナル間際ニ少許ノ多數ヲ得ルノ望ミモアルヘキガ若進歩黨ニスラモ半歸半背セラレタランニハ萬一解散ノ後總選擧ノ結果トシテ政府ハ自滅セサルヘカラサルニ至ルハ火ヲ睹ルヨリモ明カナリ

タトヒ解散ヲ爲ストモ渇々ニモ此第十議會ヲ經テ次期議會ニマデ現政府

ヲ持續シ而シテ第十一議會ニ於テ不得已解散等ノヿアリトモ最早少シク時期ヲ得基礎ヲ固メタルノ感アル也

當來第十議會ニ於テ若不得已解散ト相成ルニ於テハ必然反對者ノ最多數ヲ得テ政府ノ自殺セサルヘカラサルヿハ今ヨリ小生ガ確言スル處也

諸公ハ現在ノ位地ヲ棄ツルヿハ元ゟ弊屣ヲ棄ルカ如クナルヘシト雖モ唯諸公ハ立テ時艱ヲ救ハントシ天下其風ヲ翹企セリ諸公其抱負ヲ如何センヤ

此一新聞紙案ニシテ政府ハ何故ニ分カリ切ツタル政府ノ運命ヲ賭シテ踏跙逡巡セサルヘカラサルカ

此時機此一事ハ實ニ非常ノ大切ニ係レリ

是非共政府ハ直前勇往一大決斷ヲ以テ行政手裏ゟ停禁兩件ヲ全廢スルヨリ外ハナキノ勢ニ至リタリ

諸公ノ英邁豪宕ニシテ何ガ故ニ此一小事ノ決斷ニ堪ヘ得サルカ

成程新參大臣ノ内ノ一二ガ反對者ノ敎唆ニ乘リ進退ニ賭ケテモ全廢ヲ非トスルモノアルヘシト雖モコレハ決ゟ大勢上ニ於テ意トスルニ足ラス一刀兩斷スヘシ

今ヤ政府ガ反對者ノ術策中ニ陷リツヽ唯一ノ味方者ヲサヘ離反セシメントナシツヽアルヲ得タリ賢コシトシテ反對者流ハコヽヲ先度ト敎唆煽動離間等攻具ヲ揃ヘテ吹皷攻迫至ラサルナシ

實ニ危シ退テ外ヨリ視レハ現内閣ハ誠ニ危急也若小生ノ言ヲ過言トシテ退クルニ於テハ見ルヘシ議會ハ大多數ヲ以テ政府ニ反對シ政府ハ時機ノ非ナルヲ知リツヽモ不得已運命ヲ賭シテ議會ヲ解散シ數ケ月ノ後ハ愈々反對者ヲ增加シテミス〳〵不名譽ノ最後トナル也

議會操縱ノ策ニ於テハ最大富市ゟ築港其他許多ノ利器モアルヘシ去リナカラ若今ニシテ政府唯一ノ策ヲ失シ人心背キ歸信離ルヽニ於テハ政府ハ如何トモ爲スヿナキ也

唯此一新聞紙按ハ實ニ政府運命ノ係ル處トナレリ決然斷然政府ハ全廢ノ進路ヲ定メサルヘカラサルナリ二三異分子ノ進退反對者流ノ攻擊ノ如キハ決ゑ意トスルニ足ラサル也

利ヲ前内閣ノ下ニ喰ヒテ勤メヲ現内閣ニ捧ゲツヽアル半信半疑ノ策士輩ハ毎々反對者流ノ言ヲ聞クヿ多キヲ以テ其心裏ハ正當ナルモ目前ノ策ヲ誤ルヿ多シ現内閣ニ得意ナル人ハ毎ニ時勢ノ非ヲ聞クヿ少フシテ時利ノ好運ヲ聞クヿ多シ故ニ政策ヲ誤マルヿ多シ

此二ツノ者相合シテ誠ニ政府ヲ危フス深ク重ク御注意ヲ切望スル處ニ御坐候也

時勢ノ切迫不得已小生ハ今夜切迫ニ此言ヲ呈セサルヲ得ザル也諸公宜シク時勢ニ鑑ミテ一刀兩斷抱負ノ大ヲ實施セラレンヿヲ希フ

十二月十七日夜

一〇七七　犬養毅書翰「大隈重信宛」明治廿九年十二月二十日

志賀重昂より新聞同盟ノ意向別文ニ通申來候間御參考迄ゟ差出置候

廿日夜

犬養拜

大隈伯閣下

【別紙】

謹啓昨日府下雜誌社の懇親會ニ席上五十餘人出頭し農業雜誌社主津田仙翁の發議ニて滿場一致の上痛激なる議決をなしたり唯今は新聞同盟の委員拙寓ニ集會し頗る激昂ニ議出で全國各社の大抗議をなさんとの評議あり政府ニして停止全廢案を提出せずんば全國の同盟新聞雜誌ハ一齊に反對すべく又進歩黨中ニも少くも十名の代議士の脫黨者あらん小生に在りても記者としては政府反對の議決をなし進歩黨員としては政府と提携するなどニは到底氷炭相容れざる所ニ付固

より去就を決せざるべからずと心痛仕居り候
明日更ニ此事に關し閣議を開く由然らば此所にて大隈伯の去就進退
を賭して最後の決心を以て行爲あらずんば復た如何ともすべからず
と存候此の如き内閣ニ伯の永在せられたりとて別段見込もあるまじ
くと存候故に伊板一派の手を拍ちて咲ふを考ふれば殘懷千萬とは存
候へ共大義名分の存る處明日の閣議に伯の進退を賭して言動あらん
おとを切望仕候

十二月二十日

犬養老臺　侍史　志賀生

小生參堂致シ右義可申上心得之處昨日以來風邪ニて萬安の新聞
記者會三河屋の雜誌記者會ニも出席せず在宅致シ居候ニ付書面
ニて申上候也

一〇七八　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治廿九年十二月廿一日

拜啓愈御多祥奉賀候扨て去ル十一月十三日付ノ御懇書去ル十六日接到難
有拜誦種々御懇命之趣奉謹謝候第一小生當國ニ引續キ駐劄仕度旨兼テ内
願申上候處御聞濟被下候上勤務方ニ付高諭之趣恭シク拜承微力恩眷ニ背
カンコトヲ恐レ候得共精々努力可仕覺悟ニ御座候
内閣ハ追々鞏固ノ實ヲ現ハシ候爲メ反對者流モ漸ヤク其及ハサルコトヲ
悟リ今ハ却テ其眷顧ヲ得ンコトヲ望ムニ到リ候由眞ニ結構ノ事小生等ニ
到ル迄喜ハシク奉存候去ナカラ苟クモ間隙アレハ之ニ乘シ私利ヲ謀ント
スル鼠輩ノコトユヘ申迄モ無之事ナカラ決テ御油斷ナク常ニ御戒愼專一
ト奉存候議會モ明日ハ召集ノ筈何レ多少ノ御困難ハ可有之ナレトモ結局
滿足ノ成蹟ヲ擧ケラレンコト遙ニ希望致候政務調査ナル委員組織老臺ノ
御擔當ニテ着々進行ノ由ナレハ定メテ刮目スヘキ結果可有之ト存候要ス

ルニ今日我邦ノ行政ハ往々規則倒レト相成リ活キタル人間ノ事ヲ死シタル規則ヲ以テ律シ其間殆ントコンモンセンスノ取捨ヲ許サヽル仕組ニ有之爲メニ執務上淹滯ヲ來タスノミナラス往々酌子定規ノ仕事多ク其極時トシテ不可思議ナル事出來致候其一例ヲ申サハ過日三陸地方海濤ノ事アリ當國ノ慈善者ヨリ義捐金ヲ差出シタルモノアリ小生之ヲ取次本省ニ送金シタルニ本省ハ之ヲ内務省ニ送リ關係府縣へ送付ノ𠆢ヲ照會セリ然ルニ内務省ニテハ如何ナル譯カ規則上之ヲ府縣へ直送スルコト行屆カズトカニテ其送付方ヲ東京日々新聞社ニ托シタル奇談有之候全權公使カ外務大臣ニ送リ外務大臣カ内務大臣ニ送リタルモノヲ内務大臣ハ之ヲ其管轄ノ下ニアル府縣知事ニ送ルコトニ差支ヘ新聞社ニ托セサルヘカラストハ抑モ如何ナル規則ニ因ルコトカ誠ニ不思議千萬ニ候若シ眞ニ其樣ナル規則アルコトナレハ一日モ速ニ廢止シテコンモンセンスニ適フ取扱ノ出來得ル樣致度モノト存候右ハ百千中ノ一例ニ過キスシテ類似ノ場合ハ決テ尠ナカラス是レ前文ニ謂ユル規則倒レノ弊ト被存候殊ニ會計上ノ法規ニ右等ノ場合多クト存候處之ヲ概言スレハ我邦ノ會計法規ハ人間ハ盡ク盜ヲ爲スモノナリトノ原則ヲ立テ之ヨリ諸事割出シタルモノヽ如キ觀有之候是レ或ハ右等諸規則制定當時ノ時弊ニ適中シタルモノナルヤモ計ラレズ候得共實行ノ結果ハ其盜ヲ防ク結果ハ十分ニ奏シ得スシテ却テ無用ノ手數ヲ掛ケ其極政府ノ仕事ニ大淹滯ト笑フヘキ奇觀ヲ與ヘタル弊害ノ方多キニハアラスヤト存候小生熟ラ英國ノ有樣ヲ看ルニ人ハ善ナリト云フコト本體ノ規則ニシテ盜ヲ爲スハ取除ケト云フ觀念ニシテ萬事ノ組織出來居ル樣相見ヘ候是レ主トシテ社會道德ノ高尚ナルニ基クコトナルヘシト雖モ一ハ亦社會ノ事複雜ヲ極メ到底死物ノ規則ニテハ支配ノ出來サルヨリ適々不都合ノ事アルモ大體上ノ便宜ヲ專一トシタルモノト被存候我邦ニ於テモ行政ノ面目ヲ一變シ大ニコンモンセンスヲ働カシムルコトニ爲シテハ如何可有之哉加フルニ日本ノ規則モ理屈上ハ立派ナレトモ實際

ニ於テハ用ヲ爲サス其上却テ弊害ヲ生スルノ例ハ彼ノ官省營繕工事等ニ伴フ入札ノ實況ヲ看レハ蓋シ思ヒ半ニ過クルモノ可有之ト存候政務調査ニ御着手之際ユヘ御參考ノ一端ニモ可相成哉ト右卑見申上試候

海軍ノ擴張ハ幾分カ其期限ヲ短縮スルノ御方針ナル由誠ニ結構ノ事ニ候但シ右ニ就テモ最前モ屢ハ申上候如ク海軍當局者ノ仕事如何ニモ緩慢至極ニテ議會ノ協賛ヲ經タル事ニテモ凡ソ一年モ立タサレハ實際ノ仕事ニ着手シ得サル樣ノ事ニテハ或ハ折角ノ期限短縮ヲ實際ニ於テ看ル能ハサル樣ナル奇觀モ可有之ト存候ニ、付隨分御刺擊專一ト奉存候

メキシコ、ブラジル、布哇等ニ公使館新設ノ理由詳細御内示之趣拜承但シ小生ハ尙ホ公使館新設ノ必要ヲ看ズ移住民ノ事丈ナレハ領事館ヲ置カルヽコソ至當ニ可有之而シテメキシコ、布哇ニハ既ニ領事館アルコトユヘ之ニ公使館ノ名ヲ付シタリトテ果テ利益可有之哉頗ル疑ハシク存候得共既ニ御決定豫算ニモ上リ候事ト存候ニ付今ハ相默シ可申候將又土耳古ニ公使館ヲ置クノ可否ニ就テモ前便半公信體ニテ意見申進候通リ小生ハ何卒之ヲ思ヒ止マラレンコトヲ切望致候

土耳古事件ハ近頃又々諸大國ノ大使協同之上改革ヲ土帝ニ迫ラントスル計畫中ナル趣新聞上ニ相見ヘ多少事實モ之レアルコトナル由ニ承知仕候但シ土耳古ノ將來ニ關シ英ハ其獨立ノ持續センコトヲ希望スルヨリ國政ノ改良ヲ期望スルモ露ハ之ニ反シ土國ノ宿病膏肓ニ入リ自然ニ死センコトヲ希圖スルニ相違ナク右ノ如ク兩者ノ内心正反對ナレハ假令ヘ表面ニ於テハ英露協同ノ體ヲ現ハスコトアルモ實際土帝カ其勸告ニ從ハサル場合ニ於テハ露ハ到底實力ヲ以テ强迫スルコトニ同意ヲ表スマシク土耳古帝モ亦其實情ヲ知ルカ故ニ容易ニ彼等ノ勸告ヲ入レス從來ニ於テ既ニ然リ將來モ當分ハ必定同樣ノコトナルヘシト觀察致候其他歐洲外交社會モ先以平穩ノ方ニテ何等ノ異狀ヲ認メ不申候往々奇異ノ擧動ヲ以テ世間ヲ驚カス獨逸帝ノ如キモ近來ハ至極靜ニ被致居候

獨逸軍隊ハ我陸軍士官ヲ付屬セシムルノ件許可ヲ與ヘタルコトニ就テハ獨逸ハ大ニ之ヲ恩ニ衣セ軍艦ノ注文ヲ强迫シテ取リタル上近頃ハ其砲ヲモ我海軍ノ式ニ違ヒクルップ砲ヲ搭載セシムルコトヲ計リ又陸軍ノ軍需品ヲモ獨逸ヨリ買ハシメントスル計畫有之由傳聞致候獨逸ニテ作ル軍艦ニクルップ砲ヲ積ムコトヽスレハ佛國製造ノ軍艦ニハカヂー砲ヲ積入ルヽ義務必然相生シ可申此ノ如キ區々ノ兵器ヲ有スルコトハ我戰艦整理ノ上ニ於テ不便利不尠義ニ可有之從テ何トカ相避ケラレ度ト存候右等ノ意地汚キ計ヲ廻スハ果テ獨逸政府ヨリ出ツルコトカ又ハ中間ノ人ノ拵ヘ事カ相分ラス候得共果テ我陸軍士官ヲ獨逸ノ軍隊ニ付屬セシムル爲メ總テ是等ノ利益ヲ與ヘ是等ノ恥辱ヲ受ケサルヘカラサルコトヽスレハ須ラク兩者ノ利害得失ヲ商量比較セサルヘカラサルコトヽ存候我陸軍カ獨逸ヨリ學フコト既ニ二拾餘年ナレハ大體ノ事ハ既ニ學ヒ得タル筈ナルヘク若シ此上尙ホ學フノ要アリトスルモ獨逸士官ヲ我國ニ雇ヒ又ハ才器アル我國ノ陸軍士官ヲ獨逸ニ送リ日常視察セシムレハ其目的ヲ達スルニ於テ爲シ得ラレサルコトニハ有之間敷必ススシモ我士官ヲ彼ノ軍隊ニ付屬セシメサレハ目的ヲ遂ケ得サル理由ハ無之哉ニ小生ハ相考候我體面ノ爲メ又我實利ノ爲メ陸軍大臣ニ於テハ篤ト考量セラレ可然義ト奉存候高見如何ニ御座候哉昨年ノ三國干涉ニ就テモ關係三國同罪ノ内殊ニ獨逸ハ惡ムヘキノ最タルモノナルニ拘ハラス頻リニ彼ノ歡心ヲ買ハサルヘカラサルコト一ニ陸軍士官ノ一條ニアリトスレハ其關係ハ甚タ大ナルモノト被存遺憾至極ニ候

御書面中外交官中多少更迭ヲ行フ御決心ノ由相見ヘ候處下僚ハ扨置全權公使ニ新任スル樣ナル人外務部内ニハ無之適マ順ノ來リ居ル者アルモ夫等ハ適任ニアラス此人選ニハ多少御困リノ事ト奉拜察候高平栗野ハ條約（小五郎、墨國駐劄公使）（課一郎、伊國駐劄公使）改正ノ事手明キトナレハ他ノ用事アル所ヘ轉任セシメラレ可然乎本野ノ（一郎、露國公使）内話ニ依レハ老臺御就職前小村（壽太郎、外務次官）（和夫）ハ鳩山河上謹一等ヘ勸誘ヲ試ミタリトカ

試ミントシタル事アリトカ承候同人等カ承諾スレハ無上ノ適任ニ可有之候處諾否如何可有之候哉其他淺田徳則（新潟縣知事）牧野伸顯（文部次官）金子堅太郎（農商務次官）等ハ如何可有之哉場所柄ニ依レモ各隨分適任ト被存候歐洲語ノ内一モ解スルコト能ハサル樣ナル老人又ハ辭令ニ慣ハサル壯年有志家ナトハ到底外交官タルニ適セスト存候右乍僭越内々供御參考候先ハ拜復旁夫是申上候時下爲邦御自重相成度乍末伯爵夫人へ可然御傳言奉願候謹具

十二月二十一日倫敦ニテ

加藤高明

大隈伯閣下　侍曹

一〇七九　九鬼隆一書翰「大隈重信宛」明治廿九年十二月廿二日

秘陳大亂筆御判讀

松方（總理大臣）樺山（内務大臣）高島（陸軍大臣）ノ三老ヘ向ケ今日別紙之通申送候間何卒御内々御一閲被下度候

何分戰軍ハ戰ヒ勝テ後事ヲ謀ルノ外無之第十議會丈ハ兎モ角モ少許ノ勝ナリトモ勝ヲ得セシメ申度而して後ハ百事爲スベシ

若此戰よして一敗ニ歸セバ實ニ諸友ハ不面目ノ最後トナルと諸公ガ起テ時艱ヲ救ハントシタルノ英志ハ一敗終ニ寸毫ノ益モナキと事如何ニトモシテ第十一議會迄凌ギッケラレ候もゞ百事爲スベシ

第十一議會ニマデ到達セシメバ假令不得已衝突ノ極解散等ノコアリテモ已ニ諸友ハ何分ノ志ヲ達シ事業ヲ天下ニ見ハシテ後ニ失敗セバタトヒ總選擧と末ニ敗ヲ執ルコアリトモ又何分ノ英志ヲ慰スルニ足ルと又上下ニ對スル面目モアルと

早卒と間紙上ニ盡スノ暇無之何分小生ノ微意ハ如何ニもして此第十議會丈ハ凌ギ付ケラレ候樣ニ致度内志と外他事無之候と

御一覽後直ニ火中ニ願候

十二月念二

大隈伯閣下　秘啓　（福密顧問官）隆一生

一〇八〇　犬養毅書翰「大隈重信宛」明治廿九年

拜啓昨日午前後藤（象二郎）伯ニ面會致候處昨日午後ニ早稲田ニ罷出ルカ若クハ本日ニ罷出候筈ノ趣ニ御坐候間御面會被成候ハヽ自由黨ノ一條十分御ハナシ被下度願上候

松方一條ハ後藤伯參邸ノ上彌之（岩崎）助罷出候半と被存候間極めて漠然ノアンダースタンヂングよて十二分と奉存候此一事ハ大合同成就の上ハ權力我ニ歸シ理論上彼レガ部下を屈伏せしめざる可らすと存居候事ニ御坐候均シク革新黨中ニおゐても立憲上ノ大罪を犯したる一點よおゐてハ決して寛假せざる意見を有するものも御坐候ニ付今後の操縱よおゐて綽々餘裕可有之哉よ被存候要之萬一後來間違を生し候場合よハ小生を以て罪人と爲せバ閣下よハ決して責任を及ぼす憂ハあるまじく被存候今日の場合ハ陳勝吳廣も必要と申事を小生ハ固ク信し居申候

後藤ニ御面會後ハ可成早く一夕彌之助を御招き（晩餐）被下候てハ如何ニ御座候哉若シ御同意被下候ハヽ小生御使ニ可參候

大合同ハ玉石混淆何ンデモ引入レ候積りよて今朝も協議會相開き候事ニ御坐候

右申上度草々不乙

十八日　毅拜

大隈伯閣下

今日會合後病人用よて大磯迄參り月曜よハ歸京仕候ニ付其上よて參堂可仕候

朝(英二)吹ハ今日急ゟ出發大坂ニ參リ十日間程滯在ノ筈ニ御坐候

一〇八一　志賀重昂意見書　明治廿九年

外交ハ策論又ハ哲理ノ如キモノハ他日ノ事トナシ云フベク行フベキ事卽刻卽日ヨリ實行ノ出來得ル事ニテ且ツ廉價ニテ買ヘル事ヲ着々決行スル

「

內ニハ對外硬ヲ主トスレドモ外ニハ勉メテ平和主義ヲ表ハス」

右ノ爲メニハ通商ヲ第一トスル」

通商ヲ第一トスルニハ渡韓條例ノ廢止(新內閣ニハ痛痒ヲモ關セザルガ上ニ內ニハ對外硬ノ如ク見エ而シテ通商ニハ利アリ)ノ如キ昆布輸出稅廢止(國庫ノ收入ニハ極メテ些少ノ關係ノミ)ノ如キコトヲ先ヅスル」

通商ヲ主トスル」ヲ公然トワカル樣ニ(內外ニ)外交官ニ訓示指定スル」

官報幷ニ外務省ノ報告ナドニハ深切ナル通商上ノ事實ヲ揭載發表スル」

俗言ノつまらぬ事マデモ外交ノ機密々々トテ秘シタルガ大概ノ」マデハ發表シ樂天ヲ示スハ世界ニ對シテ日本ノ爲メニナルナリ

食物貿易ハ大ニ奬勵スル」

伊太利公使ハ手腕アル者ヲ派遣スル」

外務省ノ政務官ハ大臣ノ手腕アルヲ以テ之ニ一任シ却テ手腕ハ餘リ無クテモ大體ニ精通スル人物ヲ以テ充ツル」

日本ノ事情ヲ內々ニテ歐米ノ宗敎社會、婦人社會、テムペランス社會ナドヘ訴フル工夫ヲスル」

在留ノ外國人トハ勉メテ出入セシメ之ヲ包容スル」イーストレーキ一輩ニ至ルマデ之ヲ包容セバ大ニ利益アリ

歐米ノ大學ニ在リテ講師又ハ校友(フェロー)トナリ居ル日本人ハ固ヨリ學生ニ至ルマデ種々ノ方法ヲ以テ保護シ連絡ヲ着ケ置ク」

歐文ヲ能クスル者ニテ落魄セル新學士極メテ多シ需用ナキガ故ニ些少ノ

報酬ヲ以テスルモ夥多傭聘若クハ就官セシムルヿヲ得ベシ故ニ大ニ之ヲ網羅スルヿ

大學ノ漢文科卒業ノ新學士ニシテ需用ナキ者少カラズ是レ亦他日ノ資トナスベキ者ナリ

要スルニ所謂新人物トハ高價ニアラズンバ（有形無形共ニ）買フ能ハザル政務官ナドノミニ注目ヲ偏セズ低價ニテ至廉ニ購フベキ新人物ヲ網羅シ他日ノ飛ビ石ヲ敷キツメ置クヿ

朝鮮ノ事ハ全羅慶尙二道（或ハ忠淸道ヲモ）サヘ日本ニ入レバ何事セズトモヨロシト信ズ故ニ最後ノ決心ハ二道ヲ得ル（露英ナドニ割取スル秋ニハ）ノミニ過ギズ之ヲ方針（アルチメート）トナシ置キ相當ノ人物ヲ派遣セバソレニテ事足レリト信ズ

明治三十年

一〇八二　金子堅太郎書翰「大隈重信宛」明治三十年一月八日

拜啓昨日御談話有之候紡績會社職工紛紜之義ニ付ハ本省ニ於テハ一昨年來種々取調致居候且昨年地方官會議之節及農商工高等會議ニも提出致候次第ニ御坐候併シ重大なる事件ニ付知事及高等會議々員之請求ニ依リ歸鄉之上篤与考案を盡し答申致候事ニ相成居候已ニ答申を差出候者も數多有之候地方官會議ニ於テ小生該件之大體ニ付演說致候印刷物有之候間壹部進呈仕候御淸閑之節御一讀奉願候匆々敬具

正月八日

大隈大臣閣下

（農商務次官）堅太郎

一〇八三　高橋健三書翰「大隈重信宛」　明治三十年一月十三日

拜啓陳も大喪使設置候件今以て御治定不被爲在首相も過刻より侍從長官房ニ詰切拜謁を待ち可有之候處宮内次官圖書頭等交々同官房ニ出入し强辯以て宮内省中ニ大喪使設置之儀主張致居候然るに此輩も唯今退出引ッゞキ首相又一先ッ退出今夜十一時を期し宮相と共ニ拜謁被仰付候趣ニ有之其狀態頗る懸念ニ有之候間右御内報迄申上候此際首相ニ對し閣下御一言之御忠告肝要と被存候間此儀を申添候早々頓首

一月十三日

（法制局長官）知常
（内閣書記官長）健三

大隈伯閣下

【備考】英照皇太后崩御あそばさるゝや、大喪使設置に關し、内閣と宮内省と其の意見對立し、健三等松方首相にのみ此の問題を一任すべからずとし、重信の盡力を請ひしなり。然れども事聖斷に決し、十五日宮内省中に大喪使を設置せらる。

一〇八四　村田寂順書翰「大隈重信宛」　明治三十年一月十六日

謹啓

皇太后陛下崩御實ニ叫天慟地恐入候事ニ奉存候右ニ付御葬送ノ儀ハ古典ニ准シ被爲行候事ニ可有之敢テ桑門ノ容喙スベキ儀ニ無之候得共中古以來ノ御舊例ニ依レバ　御柩泉涌寺〔天台眞言禪律四宗兼學〕ニ御埋葬ト同時ニ　御尊號ヲ天台ノ法親王御認ニ相成リ　尊牌ヲ般舟三昧院〔天台淨土禪律四宗兼學〕ニ納メサセラレ諒闇御中陰御法會中御經供養二十五三昧等ヲ修シ御國忌ニハ　禁裏清涼殿或ハ仙洞御所ニ御懺法講等嚴儀ノ法要ヲ行ハセラレタルハ天台宗特有ノ規模ニシテ大旨皇朝天台史略ニ載スルカ如シ窃ニ惟レハ顯世ニハ山海有形ノ珍味ヲ須テスルモ幽界ノ尊靈ニ奠ルハ無形ナル一乘醍醐ノ妙

味三密瑜伽ノ資糧ヲ以テ得脱ノ冥福ヲ薦ムルニ如クハナシ況ヤ信敎ノ自由ハ憲法ノ明文ニ掲テ君民ノ權利ヲ保護シ尊卑ノ意志ヲ束縛セサル　聖明ノ今日ニ在テハ　御在世ニ信崇シ好ミ給ヒタル宗敎ニ依リテ以テ御祭葬ナサセラルヽハ益ス御追遠ノ御孝道ヲ全フセラルヽノ御美德ト奉恐察候然シ乍ラ皇室典範ニ違テ愈々革メラレ難キモノアラバ萬止ムヲ得ズト雖モ　歷朝ノ御崇信ニ係リ數百年ノ古典タル本宗ノ本務ヲ以テ罔極ノ　聖恩ニ報ヒ奉ルヲ得サルニ忍ビズ衲等同志翁合般舟三昧院ニ於テ〔禁裏御黑戸尊牌殿ハ明治九年京都府知事ノ説諭ニ由テ嘉樂學校ニ引上ケラレタルニヨリ法要ナ修スベキ道場無キニ付這回再建シタル妙法院宸殿ヲ以テ假ニ般舟三昧院ト爲シ〕御中陰ノ　御法會ヲ奉修度候間責テハ泉涌寺現例ノ如ク　御內儀ヨリ相當ノ御供養相成候樣殊特ノ御賢量奉仰願候也

明治三十年一月十六日

延曆寺兼妙法院門跡
天台座主大僧正村田寂順印

一〇八五　矢野文雄書翰「大隈重信宛」　明治三十年一月十七日

拜啓

御清穆奉賀候偖過日御內話申上候小生之件ハ可相成ハ御發表ハ三週間計リ後ニ奉願度候（御大喪御葬儀濟ミノ後ノ意味ニ御坐候）御埋葬期も多分來月十日迄ニハ御濟ト想像致候ニ付其上ニテ御發表奉願候尤も御同僚樣方ノ御打合セハ其以前よても差支ハ無御坐候過日宮內之大臣次官ニモ內話致候處皆々も無異議相勸メ吳レ申候幾クも無ク御凶事相起リ小生ニモ此度ノ御儀式濟迄ハ働キ吳レ候ハヽ如何哉トノ相談御坐候ニ付夫迄ハ充分

京都般舟三昧院住職
權僧正松景儁空代
比叡山等覺院住職
僧都不破諦善印

相働キ可申旨申述置申候宮中ゟ御用ゟ勤納メニ働キ置キ候事ハ良心ニモ快ク相感シ申候ニ付右樣仕置候間宜敷御含ゟ程奉願候

此度ゟ御凶事ニ付てハ小生ゟ受持居候山陵ゟ事尤も緊要ゟ場合ト相成リ十二日後ハ諸願取調ゟ爲メ寸暇無之昨夜迄粗ホ大體御定メニ相成リ候故本日ハ參邸拜顏ゟ上明早朝ハ實地檢定ゟ爲メ京都ニ出發ゟ心得ニ有之候處遂ニ夜分迄用務相懸リ明朝ハ最早出發ゟ事ニ相成申候ニ付略儀ニテ恐入候得共不取敢呈書此段奉願置候尤も御葬式濟ミ候得ハ何時御發表被下候も直ニ歸京出來候樣宮中ゟ用務ハ可仕置候大臣次官共承知濟ゟ事ニ致置申候

何分山陵ゟ位地工事ハ御葬儀ゟ遲速ニ關係致候ニ付取急明早朝出發仕候書餘ハ拜謁ゟ節ニ付し申候草々頓首

一月十七日夜　（諸陵頭）文雄

閣下　下執事

一〇八六　岩倉具定書翰「大隈重信宛」明治三十年二月十六日

拜啓然者過刻參內拜謁御願ゟ事言上仕候處明後十八日午前十時三十分ニ拜謁被仰附候旨御沙汰ニ候間同日時御參相成度此段申進候匆々敬具

二月十六日　（侍從職幹事）具定

伯大隈外務大臣殿

追ゟ今日御演舌速記錄御手許へ差上置候

【備考】是日重信外務大臣として第十議會に臨み外交方針を演說す、具定その速記錄を叡覽に供せり。

一〇八七　北畠治房書翰「大隈重信宛」明治三十年二月十七日

爾後久濶餘寒未磷御道履如何陳ゝ今日藤田傳三郎來リ談近時幣制更革之事ニ渉リ曰此程松方（正義）ノ囑ニヨリ井上伯（馨）ヲシテ伊藤侯（博文）ニ來京ヲ乞ヘルニ侯ハサケテ言ヲ左右ニヨセテ應ゼザルノ末終ニ吾神戸ノ抱邸ニ寄寓サレタルヨリ松方伯ヨリ僕ニ幣制改革上ニ付是非伊藤ノ意見ヲ聞度ニヨリ是非歸京サル、樣盡力勸告アリタシト囑ニヨリ段々相勸候所七週間内ニ歸京スベシト仍テ此事ヲ報シタルニ速ニ東歸ヲ急クトノ再報ニヨリ又々相勸メタルニ伊侯ハ風邪ヲ口實トシツ、四五日猶豫ヲ乞フト神戸ヨリ松伯ニ電報シタリト此事一昨日ノ由之又伊藤カ金本位ト爲スヿニ就テハ國家百年後ノ定見ナクテハ難叶外金ノ輸入否金ノ外國ニ汲收サル、恐アリ現政府カ此邊ニ定見アリヤ否ノ一點肝要ナリト云フ由又此論サキニ政府ニ起ルヲ聞ヤ山縣聞キ耳ヲ立テシ次第ヲ云々セリ右ニ依レハ松伯ノ意見未定ニシテ伊藤ノ歸京ヲ俟ツテ初メテ決定スルモノ、如シ然ルニ本日東信ニヨレハ來ル廿日頃井上伯薩長協合ノ爲メニ早稲田ニ往訪ストコレ或ハ前ノ所謂幣政改革意見ノ爲ノヿタルヲ斯ク云々スルヤモ知レズトハ存候へ共或ハ鐵面皮ニモ井伯カ貴邸ヘ行ヤモ圖ラレズ果シテ長薩和合談トノ事ニ候ハ、是レ大ニ勘辨モノ乎ト存候ノミナラス松伯今日斯ク手ヲ替ヘ人ヲ換ヘ國事を行候ニ倚リテ決セントスルノ事情大ニ注意ヲ要スル儀ト思料候間不取敢此段申上候也敬具

卅年二月十七日夜

大隈尊臺　　有穀

一〇八八　佐々友房書翰「大隈重信宛」明治三十年二月十九日

過日來再々拜趨高話拜聽忝し御蔭ニゐ啓發する所多々有之候生も愈明廿日出發仕候間いつゝ歸朝之上更ニ拜謁之期を相樂居申候却說伺度候事ハ曾根（荒助）公使ハ歸朝之說有之小生之佛國着比迄ハ彼地ニ居申候哉否胸算上多

少之關係有之候へハ右事情御内示被下候様奉冀候先ハ御禮旁右伺迄草々
頓首

二月十九日

大隈重信殿　閣下　　佐々友房

尚申御添書之儀ハ三橋秘書官へ本朝人を遣候間多分受取候モノト被
存候此段も併セテ得貴意候也再拜

一〇八九　金子堅太郎書翰「大隈重信宛」明治三十年二月廿四日

拝啓先日御下附之書類等篤与披讀仕候末今般金貨制御實施相成候後我實
業界ニ於テ計畫セラるき事項ハ多々可有之候へとも差當リ政府ニ於テ金貨
制實施ト共ニ經營セラるき事項之概要別帋ニ認メ奉供清覧候間何卒御一讀
被下度奉願候

一明後二十六日午後一時よリ農商工高等會議被開候間目下政務御多端之
際ニも可有御坐候へとも何卒御臨場之上金貨制之義ニ付議員一同ニ御
垂示奉希望候何も小生明日參上尚親しく御願可申上候へとも不取敢以
書中御願申上候匆々敬具

二月廿四日

大隈外務大臣閣下　　（農商務次官）堅太郎

一〇九〇　小久保喜七書翰「大隈重信宛」明治三十年二月廿七日

拝啓未得拝顔候得共得貴意候陳は自分儀閣下の明治廿貳年之條約改正よ
際しても非常之反對を試み御負傷之時之如きは之れゝ敎唆者なりとの嫌
疑よて九ケ月餘の入監をおしゐる位かれども其後尾崎（行雄）氏等初め友人諸氏
よリ閣下之意見風采を承リ心竊ニ欽慕いたし候得共久しく表面上政海

より出でざるより今日より至る迄警咳より接せず然るより近日來閣下の衆議院より
ての御行動を見眞より立憲大臣の資格より相應するを知り一び御面會を得親
しく貴見を拜聽いさし度意旨益相迫まり先日高橋(健三)書記官長と面會の節序
もあれば閣下より紹介を乞ひ度旨申上置き候樣の始末何れ其中議會も閉會
し御閑暇より相成り候ハヽ參殿御高敎を蒙るの考より御座候得共眞情豫め以
紙中申上候瀆るより尊嚴を犯す段幾位よも御容赦被下度誠恐誠惶

廿七日

小石川表町百九番
小久保喜七

大隈大臣閣下
執事御中

一〇九一　岩崎彌之助書翰「大隈重信宛」明治三十年三月二日

先日上申仕置候印度人救恤の件民間にても漸々賛成出金の端相開ケ居候
間此際内閣諸公の御出金奉願上度松方伯へも相談賛成ヲ得居候間何卒諸
公御寄合の節至急御取纒メ奉祈上候出來候事なれバ御手許分も幾何の御
出金相成候得バ好都合と奉存候右御願迄恐々拜啓

三月二日

彌之助

大隈伯爵
閣下

一〇九二　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治三十年三月五日

拜啓陳者一月廿七日付ノ御懇書頃日接到難有拜見仕候時下益々御多祥奉
賀上候
布哇其他公使館新設ノコニ關スル御趣意詳細御内示被下敬承仕候將又土

耳古ニ公使館ヲ置ク事ハ政治上ノ目的ニアラスシテ專ラ通商保護ノ爲メナル御積ナル由御内示相蒙稍ヤ安心仕候但シ通商ノ爲メトアラハ領事館コソ適當ナルヘク夫モ愚見ニテハ今日ニ於テハ尚ホ設立ノ必要無之哉ニ被思候得共領事館ナレも强テ異見モ無之公使館トアレハ假令ヘ眞正ノ目的ハ通商ノ奬勵ニアルモ其性質上政治上ノ目的アルモノト他ヨリ觀察被致可申或ハ隨分不思議ナリトノ感想ヲ他國ニ與ヘ候事之ナキヲ保セスト存候間尚ホ御賢考相成度同一事ニ付屢ハ尊嚴ヲ瀆シ恐惶之至ニ候得共微衷禁スル能ハス重テ此義申上候不惡御了承被下度候

内閣ノ動靜ニ關シ御苦心之次第御洩シ被下御衷情不堪恐察候何卒此議會閉會後ニハ一大果斷ニ出テラレ度不堪仰望例ノ屬僚跋扈云々モ畢竟内閣之運命ニ關シ疑フヘキモノアルヨリ身上ノ將來ヲ慮リ二心ヲ抱クモノニ可有之若シ不都合ノ擧動アルモノニ對シテハ假借スル所ナク相當ノ處分ヲ施サレ候ハヽ他ハ忽チ震慄唯命是レ從フ柔順ノ徒ト化シ去リ可申何分御英斷專一ト奉存候

御大喪一件ニ關スル新聞紙上ノ記事ニ依レも眞ニ大仕掛ノ樣ニ被見受候國母陛下ノ崩御アリタル事ナレハ朝廷ハ勿論一般民間ニ於テモ相當ノ敬禮ヲ表スヘキハ申迄モ無之コナカラ遠方ヨリ眺ムレハ中ニハ稍々極端ニ奔リタル慊之ナキニモアラサル樣被存帝室ニ對スル眞正ノ恭敬ヲ表スルノ道ニ外レ稍ヤ「アーチフヒシアル」ニ過クルノ感有之候

在佛公使御召還ノ由恰モ葡國條約モ首尾克調印相濟ミタル際適當ノ時機ト被存候後任者ニ就テも既ニ御内定相成居ル哉モ不被計候得共栗野ヲ巴里ヘ御移シ伊國ヘハ他ノ人ヲ御遣シ相成候テハ如何可有之哉朝鮮支那ヘハ何人ヲ御遣シ可相成哉此人撰ニハ隨分御苦心之事ト奉存候陸軍省ノ福島安正ナトハ外國ノ事情言語ニモ通シ風采モ好キ人ナルカ外務省ヘ御採用ノ「ニハ相叶ハサルヤ未タ奏任官ノ地位ニ居候人ユヘ一躍全權公使ト云フニモ如何ヤト被思候得共陸軍省ニテモ將官ニナル望ハ餘リ多カラサ

ルヤニ承候果テ然ラハ本人ニ於テモ或ハ轉任ヲ悅フコトナキニモ限ラサルヘク右ハ全ク思付ノ儘ニテ如何ニモ唐突ナル樣ナレトモ御參考ノ一端ニモト申上試候

當國女皇陛下卽位六拾年ノ長キニ涉リ本年六月十九日ハ六拾年滿了ノ日ユヘ其頃盛ナル祝典有之由ニ御座候右件ニ就テも先般來數度公信ヲ以テ申上尙ホ今便モ公信差出候ニ付右ニテ御承知相成度其內當國政府ヨリ大祝典參會ニ關シ誘引メキタル照會可有之容子ニ有之然ル上ハ歐洲各國ハ勿論或ハ亞細亞諸國ヨリモ特使ヲ送リ參列致サセ候事可有之全體小生ノ考ハ公信ニテ曩ニ申上置候通リ我國ヨリハ態々使節御派遣ニモ及ヒ申間敷說ニ有之候處公然トナキモ既ニ誘引ヲ爲スコトアル以上ハ或ハ默止スルコト能ハサル場合モ可有之乎此上ハ一ニ政府ノ御詮議ニ相任セ候而テ若シ特使御派遣ニ決スルコトナレハ何卒其人ハ皇族中ノ御方ニ相願度昨年山縣大將露西亞ヘ行カレタルニハ表面ノ目的以外ニ內外種々ノ事情アリ同人ニ其撰當リタル由ナルカ既ニ常置ノ全權使行居ル處ヘ又々臣下ノ人ヲ特使トシテ送ラル、コトハ甚タ不都合ニ有之自然常置ノ使臣ヲ無視スル譯ニテ其使臣タルモノハ困難至極ノ地位ニ陷キリ可申既ニ昨年西公使モ山縣侯ノ派遣ニ就キ大異議アリタル由ナレトモ當時內國ノ事情ハ其異議ヲ容ル、ニ餘地ナクツマリ內輪ノ恥ヲ外部ヘ曝スト云始末ニ至リタルモノト被存候今更申迄モ無之樣ナレトモ本年若シ英國ヘ特使ヲ遣サル、コトアラハ是非トモ皇族ノ御方御撰定相成候樣致度若シ然ラサレハ小生ハ進退ヲ決スルノ外策無之ト存候間如何ニモ取越苦勞ナカラ此序ヲ以テ右申上置度候而シテ皇族ノ內ニテハ有栖川宮殿下コソ御適任ト存候何ントナレハ同宮ニハ先年當國ニ御留學アリ其事情ト言語ニモ通セラレ候上海軍ノ將官タレハ何レノ點ヨリ看ルモ眞ニ御適任ト被存候右ハ僭越至極ナカラ閣下ノ御含迄ニ申上候將又先年小松宮殿下御來英ノ節ニハ當國政府ノ待遇向甚不行屆ニテ御不滿ニアラセラレタルヤニ傳承仕候處此度

若シ皇族方御出ニモ相成ラハ小生於テハ無論相當ノ待遇ヲ受ケサセラルヽコトニ盡力可致候得共元來當國人ハ儀式事ニハ無頓着ノ方ユヘ果テ御滿足アル程ノヿ出來可申哉否隨分無覺束且ツ皇族御出ニ成ラハ小生夫婦主人ト相成リ當國ノ人士ヲ招キ多少際立チタル饗宴ニテモ開カサルヘカラサル筈ノ處現今ノ公使館ニテハ到底之ヲ許サス他ヘ持出スヨリ外無之處右ニテハ又面白カラサル處モ有之今ヨリ前陳ノ二事ニハ焦慮致候

德富猪一郎モ大陸ゟ歸來間合モ無之處頃日來再應ノ貴電ニテ歸朝ヲ促カサレ候ニ付テハ初志ヲ變シ來月初旬ニ出發歸路ニ付キ候由ニ御座候種々ノ計畫モ有之由ゟ處俄ニ歸朝ノヿト相成隨分殘念ノ樣相見受候

乍末伯爵夫人閣下ヘ宜敷御致聲相煩度荆妻ゟも敬意を表シ度ト申出候隨時ノ御攝養ヲ祈リ爰ニ擱筆仕候頓首

三月五日　　高明

大隈伯閣下　侍史

一〇九三　矢野文雄書翰「大隈重信宛」明治三十年三月七日

謹啓

御清康奉賀候議會ニ關シ特ニ御多務ト奉存候偖小生儀今日ノ夕ニ歸東ゟ途ニ上リ明八日夜ハ着京可仕筈ニ付右奉申上置候兼てハ去る五日ニ歸東ゟ心組ニ候ヒシ處諸陵ゟ整理意外ニ手間取レ兩三日遲延仕候併シ明夜(八日夜)迄ニハ無相違歸京可仕存居申候草々頓首

三月七日　　西京ニテ　文雄

閣下　下執事

一〇九四　大木喬任書翰「大隈重信宛」明治三十年三月十六日

餘寒未退候處御安全奉拜賀候過日ゟ是非御伺可申上心得ニ御座候得共先般來鄙恙今以快方ニ至らす乍存御無禮申上候御海恕被下度奉願候

さて一事御相談申上度候義ハ高木秀臣御承知之通リ司法省辭職以來同等以下之向キハ

錦鷄間祗候被　仰付居候人多々有之ニ同人ニハ其義無之素リ同人自分ゟ是迄何とも申出られす小子ニも一向心付不申罷在候處近來名譽云々始而申出られ誠ニ尤之次第ト相考へ昨年之末方ニ宮內大臣まて內々申通候處右ハ全ク內閣ゟ之申出ニよる事之よしニ付小子ニも病氣快方ニ至リ候ハヽ參上御相談汶も可申上心得ニ罷在候處今以前文之次第ニ而日々延引仕候

然ルニ小子ニも今日ゟ沼津別莊罷越シ是迄ニ參上可申上筈之處暫時之風氣ニも相感シ入湯も不仕罷在去迚是非轉地必要之よし醫師も相すゝめられ急ニ罷越候事ニ相成候ゆへ乍失敬書面ヲ以而先御含み被下迄申上候何卒內閣ニ御相談被成下度高木ニも先日ゟ參上御願被申上候樣申シをき候得ば必す御伺可被申上ト存候得共小子ゟも御願仕候小子來月半比ニハ歸京可仕候得は必す御伺可仕候萬縷ハ拜眉可申上候先此段爲可得貴意如此御坐候頓首拜

三月十六日

伯大隈重信殿

（膽寄間敷候）大木喬任

一〇九五　本野一郎書翰案「露國外務大臣代理宛」明治三十年三月十七日・四月三十日

山縣陸軍大將ト「ロバノフ」公爵トノ間ニ於テ莫斯哥覺書署名ノ際朝鮮國軍隊ノ組織ニ關スル問題ノ議定ハ兩國代表者間ニ於ケル他日ノ商議ニ讓ラレタリ而シテ朝鮮國王陛下ノ王宮ニ還幸ノ件ニ關スル千八百九十六年八

月十七日附露西亞帝國政府ノ提議ニ對スル回答トシテ帝國政府ハ同年八月廿八日付ヲ以テ朝鮮軍隊組織ノ問題ハ劈頭ニ兩政府協議ヲ遂ケ決定シタキ希望ヲ露西亞帝國政府ヘ申入タリ

然ルニ朝鮮國王陛下ハ今般王宮ヘ還幸アラセラレタルニヨリ帝國政府ハ協議ヲ以テ本問題ヲ議定センニハ此ノ時期ヲ以テ適切ナリト思料ス

因リテ日本國代表公使ハ露西亞帝國政府ニ於テ此際前記ノ問題ニ關シ商議ヲ開始セラルヽノ意向アリヤ否ヤ帝國外務大臣代理閣下ニ照會スルノ榮ヲ有ス

千八百九十七年三月五日十七日　本野（署名）

○

朝鮮國軍隊組織ノ問題ニ關シ千八百九十七年三月五日十七日附露西亞帝國外務大臣代理閣下ニ宛テタル照會ノ續キトシテ日本國代理公使ハ本問題ニ

228107

關スル本月十二日廿四日附ムーラヴイエフ伯閣下ノ回答ヲ即時帝國政府ニ送致シタルニ帝國政府ヨリ左ノ件ヲ露西亞帝國政府ニ通報スヘキ旨訓令ニ接シタルヿヲ同閣下ヘ通牒スルノ榮ヲ有ス

日本帝國政府ハ朝鮮國軍隊組織ノ問題ニ大ニ重キヲ措クヲ以テ露西亞及ヒ日本兩國政府ノ協議ヲ以テ本問題ヲ決定シ以テ朝鮮ノ事件ニ關シ既ニ兩國政府間ニ存在スル所ノ相互ノ合意ヲ繼續センヿ大ニ希望スル所ナリトス尤モ男爵「ド・ローゼン」ノ東京ニ到着スル迄本問題ニ關スル商議ヲ延引セラルヽヿニ就テハ帝國政府ハ更ニ異議ナシ

千八百九十七年三月十九日三十一日　本野（署名）

○

帝國政府ハ在京城帝國公使ヨリ朝鮮國王陛下同國陸軍大臣及在京城露國公使間面議ノ結果トシテ五ケ年間露國士官百六十名朝鮮政府ニ雇入ルヽ

ノ取極ノ將サニ締結セラレントスル旨ノ報告ヲ得タリ
帝國政府ハ此ノ如キ取極ハ莫斯哥覺書及ヒ朝鮮國陸軍組織ニ關シテ近時往復シタル文書ニ基キ露西亞及日本兩政府ノ間ニ於テ前以テ協議ヲ要スルモノナリト思料ス
因リテ日本國代理公使ハ其ノ政府ノ命ニヨリ外務大臣閣下ニ右報道ハ確實ナルヤ否ヤヲ推問シ若シ確實ナルニ於テハ右計畫ノ取極ハ少ナクモ既ニ合意アリタルカ如ク朝鮮ノ陸軍組織ニ關スル全般ノ問題カ帝國政府ト在日本露國公使トノ間ニ議定セラルヽ迄ハ之ヲ延期スヘキ樣同閣下ヨリ在京城露國公使ニ必要ナル訓令ヲ與ヘラレンヿヲ同閣下ニ希望スルノ榮ヲ有ス

千八百九十七年四月三十日　聖都比特堡ニ於テ

一〇九六　黑田清隆書翰「大隈重信宛」明治三十年三月十八日

肅啓御安康被爲入奉賀候偖てハ貴衆兩院大多數ニて重大要件悉く通過し此之内より非常之御斡旋盡力之程奉恐察候此之際御多忙之折ヲ不顧西男身上之儀ニ付貴慮煩し旁重疊恐縮之至ニ不堪先ツ取敢壽萬謝申上候夫外拜青之上ニ讓候此旨匆々敬具

三十年三月十八日前八時

（樞密院議長）清隆　拜

大隈外相閣下

一〇九七　九鬼隆一書翰「大隈重信宛」明治三十年三月廿九日

秘啓ゆよ〳〵御奮發相成候ゟ爲國家誠ニ慶幸之至奉存候
扨該省へも何れ民間ゟ多少俊秀を拔キ御採用被成候事と存候次官一人丈も何卒該省々務ニ熟練致居候與田義人（堅太郎）を御登用相成候樣致度金子ハ無論

交迭不被成候ても迚も該省ニ改良も見込無之事實ハむしろ大臣ニ更迭ハ
次官ニ交迭至急ヲ要スノ事情ニ御座候ひき金子一人ニ處ハ何卒速ニ御代
ヘ被成度同人ハ非ノ字ニゐ澤山と奉存候ヘ共情實上全く非ニ字ニ六ケ布
候ハヾむしろ牧野（伸顯）ノ代任ニ候半ヾ文部ハ學者ノ集合體ニゐ金子ノ虚喝を
容ルヽノ餘地無之農商工徒ノ間ニ小虚ヲ弄ブノ比ニ無之候間不得已候ハ
ヾ文部ヘ御移シ被成度候
金子ハ昨日辭表ヲ差出候處先ツ榎本（武揚）子ニゐ差抑ヘ居候趣ニ御座候商工局（安藤太郎）
長モ昨日辭表ヲ榎本ノ手迄差出置候由過夜御内話承リ候通商局長ノ候補
者ハ寧ろ他ニ御選拔相成候て何卒同局ヘ御まハし相成度同人ハ最必迫と
奉存候
右ノ外製鐵（山内堤雲）所長官其外多々交迭も必要と奉存候ヘ共先以ゐ前件事申上度
匆々如此御座候
三月念九夜

伯大隈大臣閣下

隆一拜

一〇九八　岩崎彌之助書翰「大隈重信宛」明治三十年三月卅一日

昨朝參上御内話申上候大石（正巳）氏ニ一條昨夜同人ニ面會懇談ニ末終ニ政府ニ
御都合次第何役ニても御引請申上候事ニ相成候間此段御内報申上候右ハ
總理へも申述へ置候間御序ニ節御協議被成遣候樣奉願上候私見ニてハ矢
張内閣書記官長ニ御使用相成候得バ必ス御便利且本人ニも適當歟と奉存
候兎ニ角宜敷樣御願上候○此ニ餘計なる事ニハ御座候得ども農務局長藤
田四郎ハ現在ニ職又ハ他ニ局ニても矢張農商務省ニ御使用相成候事御都
合可宜と愚考仕候間御含迄申上候委細ハ其内參上可申上候匆々

三月三十一日　彌之助

大隈伯閣下

一〇九九　蜂須賀茂韶書翰「大隈重信宛」明治三十年四月二日

拝啓御清安奉賀候昨朝拝顔之節御話可致ト存忘却致候ニ付書中ヲ以申上候承ルニ金子（堅太郎）農商務次官既ニ辭表差出候由依テ此際他ニ轉職之御評議ニ候ヘハ申上候譯ニハ無之候得共若シ諭旨免官之事ニ候ヘハ同氏ハ憲法取調御用ヲ始貴族院創立之際其他今日迄勉勵奉務致候事故授爵之恩典ヲ蒙リ候樣相願度小生貴族院奉務之頃ヨリ協力奉職致候人故默止シ難ク御内談申上候幸ニ御同意被下候ニ於テハ尊臺ヨリ宮内省ヘ御内談之御手續希望之至ニ候右ハ御無理ナル御願ナル哉モ不被計候得共申上試候素ヨリ採否ハ御高慮ニ任セ申候草々頓首

四月二日

（文部大臣）茂韶

大隈外務大臣殿

一一〇〇　谷干城書翰「大隈重信宛」明治三十年四月二日

時節柄特更御多忙御察申候昨日内相ニ面謁ヲ要シ候歸途御伺申上候處許多之御來客本日九時より參上之旨御約束申置候處過日來風邪ニ被侵居候處本日殊ニ氣分不宜候間參上之儀御斷申候罷出候も別儀ニ無之今般農商務省御兼任之由ニ付彼之礦毒ニ付必ス御良策も可有之右等御伺申度考ニ外ナラス何分ニも貧民と富商トの爭ヒニ付兎角貧民之味方少く富商之荷擔者多く夫レ故今日ニも立至り候事故今後と雖モ決ス油斷不相成と深く案申候幸ニ老兄御兼任之事故大英斷希望ハたし候本日之毎日新聞ニ老兄之御說とて礦山之利と田地荒廢之害と比較論記載有之田中正造之四萬町歩と申ハ過大ニ失シ候得共凡ソ一萬五千町歩より二萬町歩ハ荒地可有之と申事故一刀兩斷之外有之間敷之ヲ斷行スルニ付ゐも工夫其他礦山ニ從

事ゐたし居候者ゑ暴動等も亦不計宜敷御料理希望ニ不堪候被害地ゑ人民ニ於ゐハ積年の損害ニ加へ昨年ゑ大洪水ニゐ一増ゑ礦毒ヲ重子候故家ニ擔石ゑ米ナク耕種ゑ時期來ルモ施種ス可キノ地なく延引ゐたし候中ニハ如何ゑ不良事ヲ生シ候も難計困難ゑ餘野夫等へも金策申入候者も有之候得共野夫從來只質素と節儉ゑ二ツニゐ漸く家政ヲ維持ゐたし居候事故金ヲ以助ケ遣候事ハ不相調候故斷リ置申候一方ハ金ニ飽き候者一方ハ赤貧如洗徒ニ候ハヾ其競爭も亦困難ト云ベシ此ゑ事情深く御洞察御明斷ヲ願申候却説人才登用云々尤現今ゑ急務ナリ世論ヲ不顧是亦御斷行祈申候（四郎）柴モ今度ハ採用希望ゐたし候先ハ右得貴意度如此御坐候匆々頓首

四月二日

大隈伯閣下

（貴族院議員）干城

一一〇一　高橋健三書翰「大隈重信宛」　明治三十年四月六日

拜啓先刻御示命ゑ旨ニ基キ總理官邸へ參候處恰も御受診中ゑて殊ニ熱度三十九度程ニ昂り他人と面談不宜模樣ニ付明朝を期シ再訪ゑ上御示命ゑ旨相傳候筈ニ付左樣御了知可被下候急緊ゑ場合如何ゑも遺憾ニ不堪候得共無據次第ニ御坐候早々頓首

四月六日

大隈伯閣下

（内閣書記官長）健三

一一〇二　德富猪一郎書翰「大隈重信宛」　明治三十年四月廿四日

謹呈東京も春色暢酣の時節定めて御清康と奉遙賀候小生儀も過日申上候以來非常の速力ニて恢復し昨二十三日は一個月振リニ始めて一時間はかり馬車ニて散歩仕り候此の儀ナレは豫定の日取ニて歸朝出來候事確かと

奉存候

希土の開戰ニ付てハ定めて事情御詳悉の事と奉存候六國協商の無勢力ナルは勿論英國外交の掛引如何ニも手緩くソルスベリ侯の如きも泰平の外交家としては申分ナキも風雲龍蛇出沒の機ニ際しては如何ニも凡庸の觀ヲ免かれ不申徒らニ强大ナル海軍と無限の財源ヲ擁シ金持喧嘩せすの一言ニ縛せられ稀有の機會ヲ逸し牛ニ挽かれて善光寺ニ參るの看あるは心外千萬ニ奉存候併し英國の輿論が漸く露國ニ對して平かならざるの傾向ヲ生したるは看過す可らざる現象と奉存候

バルカンの事情ニ付てハ實地見聞の次第不尠歸朝の上は開陳して閣下の垂示ヲ相煩度と奉存候

定めてタイムスより派遣したるチロルと申す者ニ御面會被遊候事と奉存候タイムスも極東ニ問題ニハ餘程注意致し且つ日本外交ニ就てハ(兩三年來の)嚴正なる批評ヲナスニ係らす寧ろ同情ヲ傾けつゝあるものゝ如し事局は追々日英協戮の機會ニ進行スルモノゝ如く被思候

布哇紛紜新聞ニて承知仕リ候何ハ兎もあれ米國との關係ハ圓滑ニなし度きものと奉存候それニ就てハ公使其人ノ撰擇大切ニ奉存候金子堅太郎の如き色々申分もあるニ相違ナキも西洋人ニハ案外受の宜キ男ナレは或ハ閣下御訓令の下ニ働かは米國公使としてハ寧ろ彼此レヨリ善きかと奉存候右ハ僭越ナレモ御參考迄ニ奉煩尊慮候

乍筆末伯爵夫人樣ニも謹ンテ奉煩鶴聲候匆々不一

四月廿四日　　徳富生

大隈伯閣下

一一〇三　有栖川宮威仁親王書翰「大隈重信宛」明治三十年五月三日

前略今般七種々盡力相成總ゆ好都合ニ相運所謝候扨本日伊藤侯爵へ自分

隨行被仰付候儀ハ全ク我帝國ノ位置ヲ重スルノ外眼中他事無之伊藤ハ
當時閑散之身分ニ付召連候ヘハ大ニ一行ノ重ミとも相成候ニ付本日　陛
下ニ　御相談申上候處御許可相成候尤も東京出發前既ニ此考ヲ起シタル
モ　陛下ノ御許可ナキ前ニ發言致兼タル次第ニ有之候右ハ餘リ突然之事
故貴官ニ於ても理由分明ナラサルヤモ難計ニ付走筆一應申述置度爲夫草々
不悉

五月三日夜　　威仁

外務大臣閣下

一一〇四　大隈重信書翰「黑田清隆宛」明治三十年五月四日

拜啓陳者露國士官聘傭ノ件ニ關シ在京城加藤辨理公使ヨリ別紙寫之通電
報有之候ニ付差遣候間御査收有之度候敬具

五月四日　　大隈外務大臣

黑田内閣總理大臣臨時代理殿

【別紙】

明治三十年五月三日午后二時五分發十一時着

大隈外務大臣　　加藤（增雄）辨理公使

第五十六號

士官傭聘拒絶ノ件ニ付テハ國王内閣トモ決心頗ル難（固）シ然ルニ露公使
ハ引續キ頻リニ國王ニ迫リ殆ント躍起ノ運動ヲ爲シ居ルヲ以テ國王
ハ一ニ内閣ノ不同意ヲ口實トシ峻拒セラルヽモ情形甚タ困難ナリト
内々人ヲ以テ御沙汰アリタリ本官ハ彼ノ決心ヲ固ムル爲メ威嚇ハ恐
ルヽニ足ラス萬一ノコトアラハ日本之ヲ引受クヘシトノ擔保ヲ與ヘ

置キタリ三拾六號貴電露政府ヘノ交渉ハ目下如何ノ運ナルヤ内々承知致シタシ至急返電ヲ請フ

明治三十年五月三日午后四時發四日午前四時三十分着

大隈外務大臣　　加藤辨理公使

第五拾八號

只今聞ク所ニ依レハ何分露國派ノ運動激烈止ヲ得ズ一七名丈ケ聘傭ノ事ニ決シタリトノ「ニ付尚之ニ對シ必至運動中ナリ

一一〇五　加藤高明書翰「大隈重信宛」明治三十年五月五日

拜啓其後も種々ノ事ニ取紛レ久敷御無音ニ打過候處閣下並令夫人トモ愈御多祥被爲入候御事ト奉恭賀候降テ小生共不相變瓦全勤務罷在候間乍慮外御休神可被下候

扨此度ハ當國女皇陛下ノ卽位六十年祝典擧行ニ付我帝室ゟハ有栖川宮殿下（威仁親王）ヲ派遣セラレ候由前日申上候通リ若シ特使御派遣ノ「ニ相成候ハヽ同宮ヲト希望致居候義ニ付眞ニ喜ハ敷奉存候御來着ノ上ハ精々努力御使命ヲ完フセラルヽニ付應分ノ御奉公致度ト窃ニ希圖罷在候然ルニ　殿下御隨行員々數ノ件ニ就テも御決定ノ次第小生ノ期望ト齟齬シ頗ル多人數ト相成候ハ　殿下ノ御體面上否帝國ノ體面上頗ル遺憾ノ「ト存候得共今日ニ到テハ致方無之義ニ付此上ハ出來得ル丈其便宜ヲ謀ルノ外無之尚ホ此義ニ關スル小生ノ意見ハ今便公信ヲ以テ詳細申進候間右ニ就キ御承知相成度尤モ今日ニ於テ之ヲ云フモ何ノ詮ナキ「ニハ有之候得共帝國政府後日ノ御參考ニモ可相成ト考ヘ公信相認メ候譯ニ有之候事ノ爰ニ到リタルハ畢竟隨行希望の人多ク種々ノ事情釣合等ヨリ已ムコトヲ得ス多人數ニ到リタルコトヽ存候夫ハ扨置キ最モ小生ノ驚キ且ツ痛歎ニ堪

ヘサルハ今朝接受ノ貴電ニテ承知シタル伊藤博文氏カ宮殿下隨行ノ一員トシテ來英スル一事ニ有之候兼テ斯カル事モ出來センカト萬一ノコトヲ豫想シテ當初何人カ遣サル、義ナレモ親王家ナラサルヘカラス云々ノ卑見申進置候處當時隨分大早計トモ考ヘタル萬一ノ豫想實際ト相成リタルハ(體裁ハ違ヘトモ)如何ニモ不思儀ト申ス外無之尤モ昨年露國ヘ二名ノ特使ヲ派遣セラレタル不都合ニ顧ミラレタル義ニモ可有之又幾分カハ小生ノ建議ヲモ酌酌セラレタルコト、相見ヘ此度ハ特立ノ資格ナク殿下ニ隨行ノ「ト相決セラレタルハ昨年ノ例ニ比シテ體面上大ニ相異ナリ候得共又此御決定ニ關スル不都合尠シトセス其故ハ既ニ當初御發表ノ隨行員ニテサヘ英國政府ニテモ過多ナリトノ感覺十分之レアル處ヘ又之ヲ增シ而モ其人ハ通常ノ官吏ニアラスシテ外國人ノ眼ニ映スル所ニテモ日本稀有ノ一大人物ト認メラル、所ノ人ナレモ其待遇方ニ就キ英國政府モ稍ヤ當惑スルコト可有之左レハトテ宮ノ隨行トアル以上ハ他ノ隨行員ト著敷相違アル待受モ相成間敷彼是隨分困却スルコトナラント被察候小生ニ於テモ亦其人ノ勳功爵位ハ兎ニ角表面隨行ノ一員トアル以上ハ彼レ(英政府)ヲシテ之ニ對シ殊遇ヲ與ヘシムル樣ノ周旋モ難行屆尤モ萬一英政府ニ於テ右等ノ筋合ニ拘ハラス實際ノ人物ヲ標準トシテ相當ノ待遇法ヲ講スルコトモアラハ僥倖此上モナキ義ニ候得共何分大混雜ノ際ト云ヒ元來儀式事ニハ冷淡此上モナキ英人ノ「ト云ヒ且ツ事理ニ於テモ爲シカタキ場合多ク旁多分ハ右等都合克キ工夫モ相付ケ得間敷ト大ニ苦慮致候加之ノミナラス伊藤其人ノ實價及性質等ニ就キ國內ノ批評論難ハ姑ク之ヲ置キ兎ニ角閣下等ト同シク我帝國現時ノ一大目標タルニハ相違之レナク然ルニ渡來ノ方法其宜ニ適ハサルヨリ其地位ト名譽ニ相當スル待遇ヲ受クルコトヲ得サルハ本人ノ爲メ否帝國ノ爲メ無此上遺憾ノ次第ニ有之其事ノ爰ニ到リタルハ果シテ如何ナル原因ニ出テタルコトカ多分ハ本邦現時ノ一大通弊タル謂ユル事情ノ結果ト存セラレ痛歎千萬ニ候然レトモ既ニ發表ノ

今日今更取消モ難相叶コト、推察致候ニ付伊藤侯ニ對シテハ氣之毒ナカラ小生ハ職務上ニ於テハ他ノ人々ト一般候ヲモ通常ノ隨行員ト見做スノ外無之從テ同侯ニ同伴スル隨行員アリトモ英政府ト待受準備内協議モ濟ミタル今日又候別段ノ準備ヲ請求スルハ帝國ノ體面ヲ傷ケスシテハ爲シカタキコトナルニ依リ右ノ廉々豫メ本人ヲシテ了解セシメラレ度而シテ本人着英ノ上萬一ノ苦情ヲ豫防セン爲メ右ノ次第本日電信ヲ以テ申上候夫ト同時ニ伊藤侯ニシテ若シ他ノ時機ヲ撰ミ來英セラルヽニ於テハ其地位ト名望ニ相當スル待遇ヲ受クルコト極メテ容易ナルヘキニ時機其撰擇ヲ過マリ宮ノ隨行ト云フ以上ハ其事隨分覺束ナカルヘク本人幷帝國ノ爲メ遺憾千萬ナル旨ヲ申添置候本人ノ希望カ政府ノ御都合ナルカハ知ラサレトモ抑モ何故ニ斯ノ如キ不思議ナルコト出來スルヤ到底小生等ノ了解スル能ハサル所ニ御座候政治的意味ヲ有スル帝王ノ旅行ナレハ格別純粹ノ儀式事タル今回ノ如キ場合ニ近日迄ハ總理大臣ノ地位ヲ履ミ尚ホ其禮遇ヲ受クル大政事家カ假令ヘ高貴ナリトモ一皇族ニ隨テ旅行スルコトハ他國ニハ比類ナキコト、存候將又事體ノ宜キヲ得タルコト、モ相考ヘラス西園寺氏ノ一私人トシテ漫遊シ居ルコソ却テ奥ユカシク相見ヘ候ナレ前文ニ渡英ノ資格ニ拘ハラス人物如何ヲ標準トシテ之ニ相當ノ待遇ヲ與フルコトハ事理ニ於テ出來カタキ場合多カルヘシト例セハ宮中ノ儀式事ニ當リ衆賓ノ席次ヲ定メラルヽコトアル節支那ゟ來ル張蔭桓ハ清帝ヲ代表スル特派大使ユヘ之ニ相當スル待遇ヲ受クルハ勿論ナレトモ伊藤侯ハ我陛下ヲ代表セラルヽ親王殿下ノ隨員タルニ過キサルコトユヘ其勳功爵位名望人物トモニ張ナト、ハ比較スヘカラサル人ナルニ拘ハラス彼等ト席次ヲ爭フコトノ出來サルハ勿論遙ニ末席ニ甘セサルヘカラサルノ類ニ有之候

將又伊藤侯ハ政治上ノ用務ヲ帶ヒ來ラルヽナトノ事ハ萬々無之筈ト相心得候處萬一ニモ當國ソールスベリー侯ナト、政治談ヲ爲サントセラルヽ、

コトナキヲ保セズ夫モ私話ノ性質ヲ以テ小生ニ關係ナク一己人同士ノ意見ヲ闘ハセラルヽコトハ勝手次第ナレトモ聊カニテモ帝國政府ヲ代表セラルヽ如キ意味アラハ此手紙御覽次第右ノ場合ニ關スル小生ノ心得方御電訓相成度若シ其御訓令ナキニ於テハ萬一右等ノ場合ニ遭遇スルコトアラハ小生ハ斷然之レニ干係スルコトヲ相辭シ可申候間右豫メ御承認相成度候其理由ハ小生ハ閣下ノ命令ヲコソ奉スヘケレ其他ハ何人ノ命令差圖ヲモ受クヘカラサルモノナルニ因ルコト申上候迄モ無之義ト存候他ニ種々申上度件モ有之候得共郵便〆切時間ニ相迫リ候ニ付他ハ凡テ後便ニ相讓候時下御自重爲邦不堪千祈萬禱候頓首

五月五日倫敦ニテ　高明

大隈伯閣下　御侍曹

本日銀塊廿八片以下ニ相降候本邦金貨本位ノ前途如何頗ル不堪掛念候

一一〇六　角田眞平書翰「大隈重信宛」明治三十年五月九日

拜啓島田(三郎)、肥塚(龍)兩氏先日來拜趨之由ニテ兩氏ノ來談ニ由リ始末承知仕候愚見左ニ此處沈重ノ態度ヲ取リ候事ハ勿論ナカラ近時ノ傾運ヲ轉シ候ニハ少ナクモ本年ノ議會前局ニ當リ大ニ抱負ヲ實行セントシテ反對派多數ニ候ハヽ之ヲ開散シテ總選擧ヲ爲シ氣勢ヲ張リ候ヿ必用ト被存候希クハ陋劣ノ手段丈ハ之ヲ避ケ此數日間ニ機一轉或ハ御手ニ政局ヲ握リ第一ニ全國人ノ沈ミ居候困弊ノ淵ゟ救出シ候方案ヲ立テ斷乎タル方針ヲ以テ決行セバ同情ヲ國民ニ得響ノ物ニ應スルガ如キ民心ヲ引キ候順ニ至リ可申候何人モ難事トスル𪜈寧快腕ヲ試ミ可申候時機ナルベク我黨ノミニテ引受候ヿ固ヨリ乍ラ其他トノ交渉ノ結果今ゟキチント獨之ヲ取極メ候通リニモ參ルマジクニ付是ハ別段書カズシテ實地問題ニ屬シ可申与存候只必用候

ナルハ此際ニ立候以上ハ全ク眼先キヲ變ヘ候ヿ肝要ニシテ島、肥兩氏ハ或ハ沈重一點ニ注意候哉モ難計乍去小生ハ一歩ヲ進メ直ニ機ヲ見テ引受ケ或ハ法律ニ代ルベキ勅令ヲ以テ又ハ大ナル借財ヲ他國ゟナシ急場ヲ救出シ事業ヲ發達セシメンヿヲ書策シ新面目ヲ開キ局ニ當ル人ノ代レルト同時ニ事態一變スル樣被致度与存候病中走筆不如意候匆々頓首々々

五月九日夜

大隈伯殿

角田

一一〇七　金子堅太郎書翰「大隈重信宛」明治三十年五月二十日

謹啓昨夜高島（鞆之助）大臣ニ御面會仕候今般小生任官致候義ニ付先決問題として一條件御願申上候事情詳細陳述仕置候然ルニ先月辭職仕候節非常之御高配を辱シ今度も亦懇切ニ御說示之次第も有之候間閣下之御厚意ニ對シテモ無異儀御受可仕義ニも御坐候へとも任官以前ニ於テ右條件相運ヒ不申候時ニも甚恐縮ニも御坐候へとも任官之義御受難仕候間何卒小生之心中之痛苦御憐察之上昨日御願申上候通任官之義御取消被下度偏ニ奉願上候實ハ拜顏之上御願可申上之處每々參上御妨与存シ態与差控へ乍失敬以書面御願申上候匆々敬具

五月二十日

大隈大臣閣下

堅太郎

一一〇八　佐々友房書翰「大隈重信宛」明治三十年五月二十日

巴黎より寸書謹白仕候先以生出發前ハ不一方御誘導を蒙り感佩不啻存候生も海陸無事去十一日當地ゟ到着いさし候乍餘事御休神可被下候却說承候へハ今回農商務省も御兼攝ニ相成候由奉敬賀候就ゟハ茲ニ至急鄙見開

陳仕度義ハ他ニあらず九十年之萬國博覽會ニテ我邦戰勝後之一舉一動ハ大ニ一國之威信ニ關渉仕候譯合ニ有之既ニ帝國議會ニ於テも八十餘萬圓之補助も決定仕候由ニ付此際十分之好結果を得候樣爲國家切望之至ニ存候小生當地へ參り日尙淺候へ共邦人よして佛國商工業之事ニ通曉いさし居候人物ハ左之兩名ト確認仕候

富山縣士族　林　忠正　　里昂二等領事　山田忠澄

林氏ハ明治十一年來滯在れゐし日本美術ニ關スル一切之賣買ヲ爲シ巨大ナル開店を爲し非常ナル勢力ト信用を博居候既ニ萬國博覽會ニ關スル意見書ハ曾根（荒助）公使の手を經て金子（堅太郎）次官へ送付有之候由ニ付一應御披見有之度要スルニ其人物經歷タル一般商人ト違ひ可驚之手腕を有し居候而して毫も權勢ニ屈せず眞正之獨立家ニ候へも生之冀望ハ如此人物を十分今回之博覽會ニ御採用相成候ハヽ爲國家慶賀之事と存候山田氏も同樣明治十一年來滯在れゐし居里昂ニ於テ十分之信用有之候へも今回之事ニ兼攝被命候樣切望仕候戰勝後之帝國ガ萬國環視之中ニ立テ「シカゴ」博覽會之貳舞を爲すが如き有之ハ議會が折角奮發せし補助金も水泡ニ歸する之恐あり最早事務官御採擇之折ト被存候間右鄙見開陳仕候將タ特ニ申上度事ハ大至急御着手無之ハ當國政府並各國共十分準備中ニ付又々遲延之恐有之候是又御參考迄申上候

特ニ右事務官を統轄して一貫之方針を執り終始相替らざる人物ニあらざれハ又々シカゴ之覆轍ニ陷るを免れず其事務官長ニハ定めて御明識有之事ト存候へ共鄙見ニよれハ前田正名氏ハ其人あらんと存候何卒御一考奉仰候右ハ餘り差出ガマシキ事ニ候へ共氣付候儘不顧失禮申上候取舍ハ唯閣下之所擇ノマヽナリ再拜頓首

明治卅年五月廿日於巴理府　　佐々友房

伯爵大隈重信殿閣下

二伸生ハ明夕より伯林へ赴き來月中旬より倫敦へ參り候豫定ニ有之候

前陳山田氏ハ領事としてハ誠ニ最良之人物ト見認申候十數年該地ニ居候ゐ良家之娘ト結婚ゐ候へハ該地人之受ケ大ニよろしく紳商等ト十分之結托出來居申候一度賜暇歸朝之折十分御寛接被成候ハヽ獨リ本人之爲而已あらずと存候

林氏ハ中々自ラ求メテ人ニ從フ人物ニあらず餘程禮ヲ以テ收攬する ニ非されゐ自家之財產名望も十分ニ候へも是又本人所用之爲メ歸朝之折能々御待遇相成候へハ盡瘁もるゐらん近來小生ハ稀ニ觀る人物ナリ內地抔ニハ一寸見當不申候

一一〇九　伊東巳代治書翰「大隈重信宛」明治三十年五月廿一日

謹啓先宵之種々有益ゐる御高話を拜聽し意外之長坐いたし歸宅後心付深く恐縮仕候扨其節被仰聞候御配神之事ハ委曲明便を以て伊藤侯へ通報可仕候尙大石氏よりも閣下國家之爲ニ御心勞之趣逐一拜承仕候事ニ御坐候御發軔前一應趨庭仕度と存候へとも御多用之御中却ゐ御妨歟と愚考仕候ゑ付態与差控候餘事御歸京之後拜光の上萬可申罄候草々頓首

五月念一日　　巳代治再拜

大隈伯爵閣下

【備考】重信、博文をして、英國皇帝卽位六十年祝典參列の後、威仁親王の隨行を免じ、歐洲諸國を巡遊して、國際親善に勗めしめんと欲し、之を奏請するに先だち、是月十七日巳代治を招きて、其旨を告げ、豫め之を博文に通報せしむ、二十四日及び六月八日附巳代治書翰を參照すべし。

【參考】伊東巳代治書翰「伊藤博文宛」明治三十年五月廿四日

謹啓拜別後愈御勇健被爲渡奉遙賀候爰許御家族方皆々樣御機嫌能被

爲入候ニ付吳々モ御休意被遊度候扨今度ノ御遠征ニ付宮内省卽チ土方伯等政府部内ノ所謂伊藤派ト稱セラレ候人々自由黨ノ如キハ表面御健康上ニハ至極御結構等申居候モノヽ内實餘程寂寞ヲ感シ頗ル落膽ノ色相見候故御發軔後淳々申慰メ彼等モ大ニ相覺リ候事ニ御座候世間一般ノ感觸ハ如何ト相探候ニ閣下ガ一隨員トシテ赴キ殿下ノ御供ヲ勞トセラレサル事ハ尤モ多トスル所ニ有之且閣下ノ御壯健ト其御元氣ニ推服致シ敵味方ノ別ナク流石伊藤侯也ト申囃シ餘程好都合ニ被考候獨リ此間ニ在テ不快ノ色アルハ谷子ノ一派ニシテ彼等ハ今度ノ侯ノ遠征ハ捲土重來ノ前提等申居候由ニテ既ニ日本新聞ニ殿下ハ異日入テ大統領ヲ招カセラレ候御方ナリト見込候ハ早クモ殿下ノ寵眷ヲ荷ハント心構ヘ扨コソ今度ノ御供ヲ願ヒタラントノ意味ヲ以テ比スルニ呂不韋ヲ以テシ不敬ナル文字ヲ相載候コトモ想察スルニ餘リアリ實ニ彼輩ノ陰險惡ムニ堪ヘタリ

過日大石正巳久々ニテ來訪イタシ緩談多時ニ相渡候末一夕大隈伯ト寛々面話致吳候樣申居候ニ付小生ハ敢テ異議ナキ趣相答置候所大石ヨリ夫々相運ヒ候モノト見ヘ去ル十七日夕餐ヲ差上度候ニ付來駕アレトノ通知ニ接シ候故其日時伯ヲ官邸ニ訪候所前以他客ヲ謝シタルガ如クニテ他人入ラスニテ六時頃ヨリ十一時迄長時間何吳レトナク打寛ギシ談話ヲ相闘シ候其節伯曰ク

伊藤侯ノ此度ノ行ハ實ニ滿足ニ堪ヘス英國ハアノ通リノ國柄ニテ宗教上ノ關係アリテノ事ナルヘキモ兎角我皇族ヲ待遇スルニ於テ不滿ノコトアルヲ免カレズ今度ハ餘人トモ違ヒ隨員中侯ノ加ハリアルヲ知ラバ彼等ニ於テモ多少斟酌アルヘキハ勿論ニテ侯ノ勢望ニ對シテモ其接遇ヲ異ニセサルヲ得サルヘクシテ殿下ノ御爲帝國ノ爲ニ更ニ重キヲ爲スハ勿論ナルヲ以テ余ハ欣喜ニ勝ヘズ加之侯ノ見聞ヲ博クセラルヽニ於テモ健康ノ上ニ於テモ侯ノ巡行ハ殊功

アルベシト思ハル又侯ノ何等官職帶有セラレザルハ彼土大政治家ト交際スルニ於テモ躬責任ノ衝ニ立ツノ人ヨリハ談論ヲ自由ニスルノ便モアルヘシ余ハ公然外交官等ニ云フ能ハサル事柄ニ付テモ陰然侯ノ援助ニ依賴セントト欲スルモノ尠カラズ就テハ侯ガ英國ヨリシテ大陸ヲ巡遊セラルヽニ於テハ鍋島桂二郎ニ電信コードヲ携シメテ侯ニ悅ハセン積リ也

侯ハ單純ナル一隨員ナリト云フトモ戰勝國ノ前首相トシテノ威名中外ニ喧傳セラルヽ身ナレバ旅中餘程ノ入費アルヘキハ勿論ニシテ且相當ノ散財ハシテ貰ヒ度ニ付還御次第特ニ御手元ヨリ五六萬金ヲ侯ニ下ケラレン事ヲ御願申上ル積リナリ是ハ必ス御聽許アルベシト恐察ス（伯ノ深切面ニ顯レケレバ小生ハ御厚意深謝伊藤侯ハ私財ヲ盡シテモ寸分他援ヲ假ラレザル考ナレバ滯在中モ可成儉素セラルヽ樣被申居候ニ付閣下ノ言ノ如キ來賜ニテモ有之候ハヾ定テ意外ニ候半ト挨拶致置キタリ）伯又曰ク伊藤侯ト余トノ間ニ於テ外交上ノ事ニ關シ公使又ハ書記官等ヲ經由セスシテ往復スルノ要モアラント想像ス此ノ如ク他人ニ明カシ難キ機密ノ往復ハ足下ニ御倚賴スヘケレハ足下ヨリ侯ニ通知アリタシ余ハ足下ガ多年機密ノ局ニ當リ侯ノ信用極メテ厚キヲ知レバ余モ亦足下ニ十二分ノ信用ヲ置キ此事ヲ豫メ御依賴シ置ク也（小生ハ委細畏マリ候此場合ニ於テハ小生ノ意見如何ニ拘ラズ器械的ニ通信ノ勞ヲ取リ可申ト應諾シ伯モ大ニ滿足ノ色アリ）就テハ余ヨリ屢々訪問モシタシト雖モ御存ノ身體ナレバ用アレバ書面ナリ電話ナリヲ以テ御苦勞懸クルコトモアルヘシ

其レヨリ伯ハ行政各部ノ有樣ニ付得意話モアリ失望談モアリテ後チ松方伯ノ容體ニ及ビ伯ハ松方モ案外長引大ニ困却セリ餘程腦ニ差響キヲ起シタルモノト見ヘ少シク込ミ入リタル談話ヲ試ミル時ハ乍チ

惡シクナル樣子ニ付尚當分ハ靜養ヲ要スヘシナド語リ居ラレ候也（右十七日ノ事）其後廿一日ニ至リ大石又來訪シテ左ノ如ク語レリ曰ク

過日ノ閣議ノ時大隈伯ヨリ伊藤侯今度ノ行ハ我外交上ニ間接大補アルヘキハ勿論ニシテ余ハ頗ル侯ノ援助ニ依賴アル所アリ假令何等官職ヲ帶有セサルモ日本第一流ノ政治家トシテ又戰勝國大宰相トシテ先方ニテモ相當ノ敬禮ヲ盡スハ云フ迄モナク侯又之ニ相當スルノ答禮ヲ爲サヾルヲ得ス余ハ日本ノ爲ニ侯ガ可成交際ヲ立派ニシテ更ニ國ノ威望ヲ發揚センコトヲ望ム就テハ侯多少ノ貯畜アルヘシトハ雖モ歐洲第一等國ノ間ニ立チテ十分交際センニハ中々財囊ノ能ク堪ユル所ニアラズ仍テ余ハ御手許ヨリ特ニ五六萬金ノ御下賜ヲ願ハント欲ス諸公ノ意見如何ト切リ出シタルニ一同开ハ御尤至極ナリトテ立トコロニ一決シタレバ大隈伯ハ只管還御ヲ待チ奉リタルモ都下麻疹病尚減勢ニ至ラサル爲メ本月中ハ西京ニ御駐輦被遊筈ニテ其内ニハ侯ハ倫敦ニ安着セラルヘキ日取トナレバ伯ハ自ラ西京ニ赴キ勅許次第其筋ヨリ賜金ノ打電ヲ取計フ筈ナリ伯ノ西京行ハ右賜金一條ハ專要ノ用向ナレバ是等ノ事ヲ足下（大石ノコト）ヨリ伊東男ヘ至急内々報ジ置呉レタシト申聞ケラレタリ又岩崎モ伊藤侯御出發前ニ於ケル隈伯トノ融和ノ傾向ヲ認メテ大ニ相喜ビ過日醫師ヲ同伴シテ松方伯ヲ富岡ニ見舞タル時モ岩崎ハ松方ニ對シテ國家何事カアレハ必ス伊藤侯ノ力ヲ假ラサルヲ得ス仍テ元老間ハ十分ノ調和ヲ圖リ申スモ伊藤侯ニハ細大敎ヲ乞フノ覺悟コソ必要ナラント述タルニ松方モ實ニ尤モナリトテ首肯シタリトテ其後岩崎モ大ニ安心ノ體ニ見受ケラル（右廿一日ノ事）

斯ク大隈伯ハ廿二日終列車ニテ京都ヘ相赴候ニ付必ス前言ノ如ク共ニ取運候事ト存候

去ル十九日ニ於ケル大隈伯ノ談話ニ依レハ松方伯ノ容體ハ未ダ捗々

敷無之モノト被存候處松方伯ハ昨夜(廿三日)一ト先歸京尚醫戒ニ依ル
接客ヲ謝絶シテ引籠中ニテ一兩日中又々那須野ヘ轉地療養ノ趣ニ付
無論全治ト申譯ニハ無之親敷國務ヲ執ル迄ニハ此先多少ノ日子ヲ費
サヾルヲ得ストノ評判ニ御座候併シ伯ヲ見舞ヒ談話シタル人ノ話ノ
趣ニテハ醫師ハ大事ヲ取リ候ヘトモ格別ニモ思ハレズ且策士ノ跋扈
ヲ憤慨シタル如キハ中々ノ元氣ニ見受ケタリトノ事ニ御座候板垣伯
モ先頃關西ニ遊説ヲ試ミ京坂ノ氣受甚ダ宜敷昨今ハ東北巡遊中ニテ
是レモ好都合ノ樣子所謂南船北馬老健可驚侯爵夫人ハ一週間程前大
磯ヘ御歸リ被遊候何レ其内御機嫌可相伺候ヘトモ皆々樣御健全幸ニ
御放神被遊度候朝(知泉)比奈儀四月初旬出立致度由申來候故卽チ御恩許モ
相願候次第ニ御座候處其後閣下ノ御歐行ヲ承候ハヾ必ス倫敦巴里邊
ニテ御待受申上候半ト存候ヘトモ此上長滯留相許シ候ハヾ又々入費
ニ差響候ト懸念不少候ニ付御手許ニテ御用モ有之候ハヾ其儀ハ格別
ニ候ヘトモ差シタル御用モ無之候ハヾ一日モ速ニ歸朝致候樣嚴敷被
仰聞度候尤モ本人ヘモ別書ヲ以テ委細申遣候儀ニ御座候
松本(君平)望月(小太郎)兩人ヘモ御出發ノ前夜本人等誤解無之爲メ別紙ノ通リ申聞
ケ本人ニ於テモ慥ニ誓約致候儀故萬一ニモ心得違有之間敷ト存候得
共御含迄別紙箇條ハ差上置候間若シ萬一本人ニ於テ小生ヨリ明白申
聞置候事柄ニ相戻リ候樣ノ儀願出候ハヾ別紙本人ヘ御示被遊一切御
取合無之樣奉願上候此事御出發ノ際達尊聽置度ト存候得共如彼御混
雜中ナリシヲ以テ態ト差控候儀ニ御座候米國關稅ニ對スル實業界ノ
不滿ノ聲甚タ高ク東京商業會議所ハ意見ヲ披瀝シテ反省ヲ求ムルノ
手段ヲ取レリ今度サミユル商會ニ賣渡公債利付百二磅商賣ニ過クト
ノ非難モ有之株式ハ兎角不振ノ狀況ヲ呈シ現内閣ニ對スル財政手腕
ノ希望ハ全ク泡沫ニ歸シタラント被思候東京日日新聞ハ御出發當日
以來引續每便郵送爲致置候間御清暇ヲ以テ御一讀奉願度候先ハ御起

居奉伺旁要用耳奉申上候頓首々

五月廿四日午後

認於永田街

巳代治再拜

春畝侯爵閣下

乍恐別封朝比奈松本宛本人ヘ御渡相願度萬一朝比奈仍遠隔ノ地ニ居リ候ハヾ公使館ヨリ轉送取計吳候樣御一聲奉願上候

松本望月兩氏ヘ申談シタル要旨

侯爵ノ隨員トシテハ木戸侯ト時岡屬トヲ附ケラレタレバ別ニ隨員ノ要ナシ其上長田氏公私ノ從者トシテ引具セラレタル以上ハ猶更兄等ノ隨行ヲ允スヘキ餘地ナシト雖モ折角ノ懇望ニ付途ヲ同クスルコトハ許諾セラルヽモ左ノ箇條ハ堅ク遵守セラルヘシ

一、兄等ヲ一行員トスルコト能ハズ

二、故ニ旅館ヲ同クシ及一行員ノ如ク他人ニ紹介スル能ハズ兄等亦一行員ノ如ク裝ヒ及他人ヲシテ爾カ誤ラシムルコトナキヲ戒ムベシ

三、旅中金錢等ノ欠乏ヲ感スルモ一切侯爵ニ哀請スル如キコトアルベカラズ

右ノ通リ兩氏トモ敢テ違ハサルヲ誓ヒタリ金子ハ井上伯御心配ノ外小生ヨリ金千圓附與シ其餘ハ總テ各々自辨タルヘキコト又旅中侯爵ノ御用アラバ細大トナク任意的ニ命ヲ奉シ之カ爲ニ金錢上其他ノ煩累ヲ侯爵ニ及サヾルコト

【參考】伊東巳代治書翰「伊藤博文宛」明治三十年六月八日

謹啓嗣後益々御勇健奉恭祝候次ニ當方何等異條無之乍憚御休意被遊度候扨第一信ハ五月廿四日發米國經由便ニ相付シ候故定テ疾ク尊覽ヲ經候事ト相信候大隈伯ノ京都行ノ事ハ既ニ前便申上候通リノ事情ニ有之候處京都ノ首尾ハ至極宜敷事丈ケハ過日大石（正巳）來訪ノ節モ承及

候然ル處尚伯ヨリ直接相話置度候ニ付昨夜來訪致吳候樣申來候ニ付伯ヲ訪ヒ候例ノ如ク他客ヲ謝シ伯ハ左ノ如ク被相述候曰ク

過日モ一寸申置タル如ク都門麻疹流行ノ爲メ兩陛下ハ今以テ京都ニ御駐輦被遊ル丶ニ付空シク還御ヲ待奉ランニハ英國ノ祝典モ相濟候事トナリ時機ヲ失ハン恐レモアレバ自分米國關稅布哇問題其他拓殖務省ノ將來鑛毒事件等ニ付親シク上奏ヲモ致度ト夫レ是レヲ相兼ネ京都ニ赴キタル事ニテ第一ノ緊急要件ナル伊藤侯ノ事ニ關シ「伊藤トハ本人出發前ニ於テモ種々熟話致置タル事モ有之今回ノ御供ハ又ト得難キ好機會ニ付キ序ヲ以テ歐洲大陸ヲ一巡セハ可ナランカト申聞候所伊藤ハ今度ハ全ク殿下ノ一隨員ナレバ自儘ヲ以テ隨員タルノ範圍以外ノ動作ハ難致トノ事ニ付然ラバ勅命ヲ拜シテ巡回スルコト丶ナラハ如何ト申試ミタルニ伊藤ハ勅命ナレバ如何ナル御用向ニテモ謹ミテ御受申上ケントテ君國ノ爲ニ十分ノ盡力スベキ樣快ク相引受候色相見ヘ候ニ付幸ニ御聽許ヲ忝クセバ國家ノ爲ニモ本人ノ爲ニモ無此上仕合ニ奉存候抑々今回伊藤ノ隨員ニ相加ハリ候事ハ注意ヲ喚起セシムルニ足リ候事ニテ乍恐殿下ノ御威光ニモ多クノ關係ヲ有シ候ハ今更申上候迄モ無之隨テ伊藤ガ大陸ヲ巡視致候時ハ三十年日本ノ政治舞臺ニ立テ殊ニ戰勝國ノ大宰相ニテ光譽ヲ荷フテ彼國有數ノ外交家ト交際シテ相談スル事ト相成現在及將來ノ外交上ニ大裨補ヲ相與ヘ候譯ニテ而カモ伊藤ハ身其局ニ居ラザレバ當局者ノ云フ能ハザル所ヲ聞クノ自由ト便宜ヲ有シ候事ハ是レ亦伊藤ノ身柄ニ取リテ恰當スル所ナレハ苟モ東洋ニ利害ノ關係アル露獨佛等ト意向ヲ鬪ハスニ於テ彼我ノ利益枚擧ニ遑アラサルモノアラン是レハ獨リ外交ノミナラズ國家全體ノ利益ナリ假令今日實行スルコトナキモ異日柄ヲ把ルノ時ニ於テ丶丶丶丶丶丶(此ノ一句ハ閣下ガ他日再ヒ其局ニ當ラレ候時ニ於テ著大ノ功アラントノ意味ニ了解セラル)所謂維新ノ元老モ追

々世ヲ去リ今ハ伊藤其他ノ數輩ニ過ギズ殊ニ外交ニ精通スルノ人ハ伊藤ヲ措キテ殆ド他ニ其人ナシ仍テ英國ノ祝典相濟ミ次第殿下ノ隨行ヲ被免伊藤單獨ニ大陸ヲ巡回致候利益ハ右ニモ申上候通リニテ伊藤ノ健康上ニモ伊藤ノ煩累ヲ避クル爲ニモ暫ラク大陸ニ客居シテ彼ノ偉人ト肘ヲ執リテ時勢ヲ論スルハ最モ望ム所ニシテ亦此機逸スベカラズト存候旨縷々聖德ヲ煩シ奉リタルニ天顏殊ニ麗敷在シマシテ最モ御安心ノ體ニテ其儀然ルベシトノ御沙汰ヲ仰蒙リタレバ余ハ「然ラバ玆ニ一ノ御聽許ヲ得度キハ費用ノ點ニ御座候御承知ノ通戰勝國ノ前大宰相トシテ國家ノ體面ニ相障ラサル程ノ交際致候ニハ相當ノ費用モ要シ候ハ勿論ニシテ伊藤ノ私財果シテ能ク之ニ堪ユベシトモ覺ヘ候ハズ就テハ特ニ御手許ノ御下賜ヲ得テ十分廣ク彼國外交家トモ交際セシメ度差向若干ノ御下賜ヲ得其他ハ又々追テ御下賜ノ事ニ仕度」ト申タルニ陛下ハ「尤ノ次第一々聽屆ケタリ早速宮內大臣ニ命シ置クヘケレバ諸事同大臣ト打合スヘシ而シテ何程ノ額ヲ直ニ要スルカ」トノ御尋ニ付六萬圓ト申上ゲタルニ御聽許アリテ餘ハ隨時電報ヲ以テ申出ベシト沙汰セヨ」ト實ニ難有御恩命ヲ拜シ直ニ宮內大臣（土方久元）ト余トヨリ此趣ヲ打電シ置キタリ尙足下（小生ヲ指ス）ヨリ伊藤侯ヘ通シ貰度ハ滯在長引候時ハ迚モ六萬圓ヤ七萬圓ニテ足ル譯ニ無之候ヘバ隨時遠慮無ク必要額ヲ御申越アリタシ又各公使館ヘモ伊藤侯ヨリノ電信ハ總テコードヲ用ヒテ不都合ナク取扱ヒ且侯ヨリ何事カ注文モアラバ及丈ケノ御便宜ヲ可取計旨申達シ且鍋島桂二郎ヘモ改メテ侯ニ隨行スベシト命令シ置キタリ（過日ハ桂二郎ヘコードヲ携ヘシメ伊藤侯ノ隨行員トスト大隈伯申サレ候モ右ノ話ニ依レバコードハ公使館備付ノモノヲ利用シ桂二郎ハ眞ノ隨行員トナリタルモノナラン）又一昨日山尾（庸三）來リ木戸モ殿下ノ隨行ヲ被免更ニ伊藤侯ノ一行ニ加ヘラレタシ尤モ貯蓄アレバ金錢ノ世話ハ相懸ケ不申トノ事故其儀モ然ルベシ

ト賛成シ置キタリ云々

右ノ外大隈伯ハ閣下多年ノ御勳功ヲ激賞シテ止マサリシ如キハ多少小生ニ對スル世辭ノ積リナルヘシト被思候又米國關税布哇問題ハ大隈伯ハ下手强硬ヲ相試ミ候ヨリ對方ノ感情不面白例ノ合米派ニ口實ヲ假シ排日ノ氣焰ヲ高メ候素ヨリ米國ニ合意ノ意思ナシトスルモ日本ヲ抑ユル丈ケノ狹氣ハ多カルベシ此事ハ小生何ノ意見ヲモ吐露不仕日々新聞紙上ニテ當局者ノ注意ヲ相促シ候位ノ積リニ御座候斯テ次回郵船ノ開帆前又々拜青ヲ可得トテ昨夜ハ辭別仕候

今度ノ一條ニ付テハ大石ハ當初ヨリ餘程盡力致シ候モノト相見ヘ大隈モ諸事大石ニ聽ク所アリシト被存候元來大石ガ將來ノ事ニ關シ私カニ配慮致居候事ハ閣下御出發前ヨリ御承知ノ次第ニテ過日大石來訪ノ節モ伊藤大隈ノ並立ハ敢テ難事ニアラザルヘク又松方モ大藏專任ニ安ンスベク岩崎（彌之助）モ此事ニ付テハ頗ル肝膽ヲ碎キ居レリナド語リ出候ヨリ推考スルモ岩崎大石ハ内密幇助ヲ努メツヽアルガ如シ尤モ小生ノ口端ヨリハ合同ノ合字モ申出サズ候得共彼等ガ望ヲ屬シ居候事ノ如キハ勿論ニ御座候大隈モ前段ニ相認候オリ昨夜ノ談話中一寸小生ニ相匂ハセ候事ニテ近今政界ノ氣運ハ自ラ此邊ニ相向ヒ居候現ニ進歩黨中ニテモ倦厭ヲ云フモノ少ナカラズ御用新聞モ近來頗ル亂調子ニテ之ヲ統一スル威壓力モナキモノト被存候薩人ハ朋黨ヲ作リテ藩壁ヲ高クシ候ヨリ之ニ對スル感情甚ダ不面目樺山ノ勢力日々益々落莫一時樺山ニ阿附シタル進歩黨達モ其促伴ノ宜ヲ得サリシヲ悔ヒ居候

大石ヨリ小生ヘノ密話ニ依レバ合同ハ犬養（毅）モ賛成ノ由是ハ大石ヨリノ關係ニ無之シテ岩崎ノ勢力然ラシムルモノト被存候初メ稍意外ノ感アリシモ岩崎ト犬養ノ近狀ヲ穿チ來ラバ深ク異ムヲ要セサル事ニ候亦大石ハ高橋健三神（知常）鞭ノ二人ニハ困リ切リ候是ハ到底追究セサル

ベカラザルモ時機ヲ撰バザレバ不可ト申居候モ犬養モ伊藤侯ノ歸朝ハ九月カ十月カ眞サカ違ヘバ其前ニ打電スル事モアランナレバ其前ニ於テハ萬事内密ヲ旨トスル爲メ高橋輩モ其時ニハ打捨置クニ如カストノ意見ノ由ニテ高橋神鞭モ昨今快々不樂ノ有樣ニ候政府ノ近狀ハ表ニ相見ハレ候ヨリハ内實ニ餘程ノ弱味相顯ハレ居候ヘバ此際ハ務メテ外部ヨリノ下手攻撃ハ見合セ候方針ヲ相執リ居候別シテ拜別ノ際船中ニテ特ニ御注意ノ事ハ堅ク服膺罷在候間御安意可被下候新聞ノ調子モ極メテモデルニ進行致居候

今夕岩崎ヨリ面會致度尤モ大石モ同席ノ儀申參居候ニ付受諾致置候岩崎ハ過日松方那須ヨリ歸京ノ後面會致シ候樣子ニテ其節モ岩崎モ此儘ニテハ迚モ難關ヲ通過シ難シト合同ノ意持チ懸ケ松方モ大ニ尤モナリト同意ヲ表シ候由大石ヨリ聞及候松方ハ歸京後天機伺トシテ京都ニ赴クベシトノ噂有之候モ豫算其他重要事務澁滯シアレバ直チニ復職シテ黑田（清隆）伯ノ假攝ヲ被辭候計トノ說モ有之兎ニ角不日全快喜ビ旁松方ヲ一訪可致心得ニ御座候黑田伯先頃檢査院事件等ノ爲内閣ヲ代表シテ京都ニ相赴候處安川（繁成）等ノ退官ハ忽チ實行被致候得共渡（昇）邊ハ晏如タルヨリ御用新聞ハ黑田伯ハ老衰トカ老耄トカノ爲メ執奏ヲ誤リタリトテ攻撃シ松方ハ痛ク心配致シ候由過日龍居頼之ガ黑田伯ヲ訪ヒタル時モ伯モ内閣ノ爲ナラバ黑田ハ老衰デモ老耄デモ苦シクナイト苦笑シ居ラレタルモ其内自ラ不快ノ色見エシトノ事ニ候定テ衷心立腹被致居候事ト被察候

進歩黨ハ外面無事ニ似テ内部ノ破裂ハ何時タルヲ知ルベカラズ例ノ獵官ニ失敗シタル一派ノ不平ハ中々甚敷自由黨之ニ對シテ外面沈靜ナルモ内部ハ稍々生氣ヲ回復シタルカ如シ尤モ八九月頃迄ハ中島（信行）松（正久）田（中島ハ肺部ニ患アリテ昨今養生中）位ノ寺島外務卿ト一般ノ人物ニテ相濟マシ候樣子板垣ノ巡遊シタル地方ハ頗ル好況ニテ總理復任ノ

要求成ラザレバ或ハ八九月頃ニハ又々燃エ立チ候事ナラン然ルニ板垣ト本部トノ關係少シク圓滑ヲ欠キ双方ヨリ苦情ヲ持チ込マレ小生ハ調停ニ微力ヲ盡シ居候板垣ト小生トノ間ハ不相變往來ヲ續ケ居至極宜布候伯モ御承知ノ貧窮ニテ昨今別シテ困難ヲ感ジ居候義モ有之候ニ付或ハ御留守中多少ノ援助ハ免レ難カラント存ジ是ハ豫メ御許諾置可被下候大石ハ合同論ノ末ニ板垣モ是非引入レサルヘカラスト申居候得共小生ハ唯今一笑ニ附シテ敢テ可否ヲ言ハズ惣ジテ合同説ニ餘リ深入不致候是ハ後ニ至リ(各下等ノ累ヲ憚リ候爲メノ用心ニ有之候)

松方ハ既ニ岩崎等ノ説ニ服シ居リ候得共其前ハ飽迄責任ヲ盡サヾルベカラストノ意ニテ及ブ丈ケハ當職ニ盡瘁セン覺悟ヲ相示シ候ト同時ニ大隈モ高島(鞆之助)モ兼任ヲ解カス(拓殖務ノ後任談ハ一時喧傳セラレタルモ中止)現在ノ儘ニテ此マヽ進行キ候事ト相成候此邊ノ關係ヨリ松方ノ歸京ヲ促シ又京都行キヲ躊躇スル事ト相成候モノニヤト被存候他ハ次便ヲ期シ不取敢右ノミ奉申上候頓首々々

巳代治

再拜

春畝侯爵閣下

追白小倉信近ハ今度臺灣嘉義縣知事ニ任命ノ事ニ内定シ最早一兩日中ニ發表來ル十八日頃赴任ノ途ニ相上候義ニ御座候先日此ノ件ニ付内談ノ相熟シ候後本人來訪ニテ高島子ヨリ云々ノ勸誘相受候ニ付如何可致歟尤モ伊藤侯ニ對シテハ御歸朝後高島子ヨリ十分御辯解被下候筈ト申聞候ニ付ソハ至極結構ナラント一應ノ挨拶致シ相別レ候事ニ御座候板垣ヘハ其前何カ憤慨談モ致シ候由ニテ舌根未ダ乾カザルニ國家ノ爲ナドニ假托シテ臺灣行トハ呆然ノ外ナシト同伯ハ申居ラレ候阿部(浩)ヘモ同樣勸誘有之候得共同人ハ返答モ不

致其儘打捨置候趣ニ御座候同人ノ選擧區ヘハ過日板垣モ一巡シ其
輩固ヲ稱シ居ラレ候事ニ御座候此書信封緘ノ際別封大磯ヨリ千代
ノ手許迄相屆候ニ付差上候御兩人ハ閣下御出發後卽チ先月中下旬
ノ間一回出京セラレ四五日間千代方ニ滯留ノ上直ニ歸磯被致候今
度千代ヘノ來信ニ依レハ近日少々御不快ノ事ニ候得共格別ノ御容
體ニモ有之間敷ニ付乍憚御休意可被下候千代モ近日御見舞旁一應
同地ヘ參向可仕筈ニ御座候此段申添候

一一一〇　村田寂順書翰「大隈重信宛」明治三十年五月廿三日

御内々歎願口代

一比叡山延暦寺ゟ前年非常之御懇配ヲ以テ滋賀院復舊門跡寺ト被成下寺
祿ヲ宮内省ゟ下賜セラレタルヲ以テ山内保續之資本トナシ全ク御恩庇
ニヨリ取續罷在候大恩勸進ノ途ヲ御披キ被下候爲メ伽藍修繕一通リ出
來難有仕合奉存候ゟ兼ゟ一同感泣拜謝仕居候其上ニ歎願之儀恐入候ヘ
とも上地官林復舊之儀別紙之通地方官ヲ經テ差出候間可相成ゟ無代價
ニテ相願度若シ無代價ハ御六ケ敷御座候ヘハ應分之地稅ヲ上納仕候ゟ
も宜敷候間御下附之儀奉願上候此願書ハ控ニテ表面ハ御兩省ヘ地方廳
ゟ出願可仕候

一僧侶ノ身トシテ行政官之事ニ容喙仕候儀深ク奉憚入候得共前日モ愚書
ヲ以内願仕候通元滋賀縣知事籠手田氏（安定）ハ尊大臣公ニ亞キ比叡山ノ恩
人ニテ不相憚奉内願候籠手田氏も追々老衰自然當時勢ニ不適當之事も
可有之候へとも何分是迄之三縣とも其實十ニ八九分ハ其成蹟ヲ稱讃シ
テ相惜ミ罷在候此度なとも政黨及讒人之爲ニ不信認ヲ被申立終ニ非職
と相成候ニ付本人ハ勿論多家内ニテ將來生計之方向相立チ不申日夜憂
惱罷在候老朽トハ申候へともマダ五十餘歳ニテ只今ゟ隱居候年配ニテ
無之候ニ付今一度奉職も相叶候ヘハ御庇ヲ以テ宮内省又ハ何レノ府縣

ニテモ奉職被仰付候ヘハ乍不及政府之御爲メ飽迄盡忠仕度候安定ノ御維新際ヨリ勤王之功績アルコト故大久保公　大隈公ニハ委敷御了知被下置候事ヒ　尊閣下ヘ密々内願仕呉度旨内談も有之甚氣の毒ニ奉存候ゆへ奉内願候別紙履歴書ハ昨年冬宮内大臣ゟ被尋候事有之タルモノナレトモ此中話之序ニ私ニ被爲見候ニ付寫置候モノニ御座候ニ付奉入御内覽候ニ付時機何レヘナリトモ再勤相成候樣御仁計ヲ奉願上候

但尊君ニハ全ク御見捨ハ不被下置候事ヲ本人もヨク〳〵了知被仕居候

一舊臘東上之節内願仕候妙法院ノ再建宸殿(卽チ般舟院假御尊牌殿)ヘ　三陛下御休憩ヲ奉願上候へとも　皇太后陛下崩御ニ付不相叶御示之　尊牌還復ノ上孝明天皇御三十年祭及　英照皇太后尊儀御中陰御法事も五十日間寸志ニ相勤メ　皇族方ハ不殘其外女官方一同諸宗管長及各本山不殘參拜本懷至極ニ奉存候○今度宸殿再建及御法事等ニテ二萬五千圓計負債出來申候ヨリテ宮内省ゟ宸殿再建ニ對シ三五千圓御下賜之儀及般舟院　御尊牌五十三基御保護料御下賜之儀歎願仕居候處寺院ノ再建等ニ對シ宮内省ゟ御下賜金ハ自今停止セラレ候旨此比ニ至リ土方大臣ゟ承リ甚失望仕候

右ニ付方向ヲ轉シ左之主意ニテ此節歎願仕居候

明治十三年七月十六日

聖上　泉涌寺ノ御歸途妙法院ヘ御休憩ヲ奉願候處(其節ハ三條公及當宮内大臣ゟ上奏ニテ親臨相叶候)被聞食御休憩ニ付午餐御酒飯獻上供奉御一同へも都ゟ獻上(四千圓計ノ入用寸志)其節妙法院ノ寶物

王羲之書(代價數千圓)

金造眞珠軍配扇(豐太閤ヘ朝鮮王ヨリ獻上　幾千圓ト定メガタシ)

卽今京都博物館ニテ千鳥ノ香爐ト双ヘ陳列ノ御物ニ有之候

外ニ五點獻納

右も舊臘御話申上候通叡山ノ爲ニ岩倉公へ内願中ニ付御報酬ハ一錢も拜戴不仕候處グラント氏ノ日本へ返金ニテ叡山へ公債證書五萬圓下賜などもウゴキタル末終ニ立チ消ヘト相成殘念ニ奉存候右付責テハ右之御褒賞ヲ名トセラレテナリトモ妙法院へ御下賜之儀此節願中ニ有之候間何トカ御賢慮之上可然御願上候

一般舟院尊牌御保護料之儀ハ中山二位局殿へ別紙ノ内願書ヲ差出候處御内儀ニテ相談之上香川皇后宮大夫ノ手迄ハ相下リ居候筈ニ有之候泉涌寺ヘハ明治九年ヨリ年々金壹千二百圓ツヽ下賜セラレ候上ニ寂順事泉涌寺ノ改革係リ被命候節千二百圓ニテハ本坊寺中ノ保續六ケ敷ニ付岩倉殿へ歎願シテ六百圓ヲ增して年々千八百圓ツヽ下賜セラルヽ事と相成候

一般舟院事ハ何も御保護料ハ無之候ニ付卽今ハ妙法院ノ寸志ニテ寺門限リ御法事等ヲ相勤候へとも元ト泉涌寺ハ御陵墓守リノ御寺ニ有之般舟院も尊牌御安置ノ御黑戸ニテ全ク　天子ノ御法事ヲ司ドル御寺ニ有之候處宮内省ヨリ般舟院へ右等ノ尊牌ヲ御合併ニ可相成旨御談シ有之候ヲ時ノ住職ガ御靈殿狹隘ノ旨申立タルニヨリテ却テ泉涌寺へ御合併ニ相成候モノニ有之候卽今爲其ニ妙法院宸殿ヲ再建シテ之ヲ般舟院ト假定シテ五十三基ノ　尊牌ヲ御祭申上候事候へ共タトヘ表面ハ御佛祭ニアラサルモ此尊牌ニ對シ責テハ年々金千圓以上ハ宮内省ヨリ下賜リテハ決シテ他ノ類例ナドニハ相成リ不申事ニ御座候又無憚申上候ヘハ其位之事ヲ不被遊候ヘも實ニ　天皇御追孝之大御心ニモ不被爲叶事と奉恐察候付御名義ハ如何樣ニテモ宜敷御座候へ共此儀ハ深ク御賢考被下置卽今御六ケ敷御座候ヘハ追ヘ時宜御計ヒ被爲行節ニ必ス御配慮被下置度内々奉拜願候

右も明朝御伺候へとも御多用御客來等も可有之ト相心得深更亂文相認メ候何レ自坊拜招ヲ奉願上候間御親敷御聞取被下度御願上候頓首

五月廿三日夜深更相認む

御座右　　寂順九拜

拜陳

一一一　神鞭知常書翰「大隈重信宛」　明治三十年五月廿五日

拜啓不順之氣候遠路御辛勞奉恭察候陳ハ愈本日都築(琴六)文部次官ノ辭令モ相渡サレ檢査院四名ノ辭令モ渡(昇)邊院長ヘ被送候趣ニ御坐候斯ノ明々白々地ニ曲直分リ切リタル事件ニシテ如此結果ヲ見候ニ付テハ法制局參事官內閣書記官連中迄も只歎聲ヲ洩シ居候世上如何ノ感ヲ起シ可申哉爲邦家慨慷ノ至ニ御坐候別紙意見書寫或ハ御入用之儀も可有之哉ト存シ拜送仕候假相伯(黑田清隆)モ御持參相成候故或ハ御用立之儀も有之タルナラント存居候處ドウヤラ御無用ナリシ樣子ニ相察セラレ申候且夫レノミナラス本日ハ內閣ニ於ゆ別紙ニ添へ閣員御花押アリシヲ一々御抹却相成タル趣高橋(健三)ヨリ承知致是亦何ノ意タルヲ解シ能ハス呆然罷在候

爲邦家折角御自玉奉祈候肅具

五月廿五日　　神(法制局長官)鞭(花押)拜

大隈伯閣下

【備考】會計檢査院長渡邊昇、是年三月八日臨時軍事費檢査成績を上奏するに當り、正規の手續を執らざりしを以て、部長安川繁成等四名其の違法を難じて止まず、昇其の處置を違法ならずとし、檢査官總會議を開き、安川等を以て病氣其の職に堪へずとして、退官處分に決し、內閣之を執奏し、是日免官せらる。

一一一二　大隈重信書翰「黑田清隆宛」　明治三十年五月廿六日

在朝鮮露國臨時代理公使「ウエーバー」氏ノ去就ニ關シテハ去月初旬在朝鮮

加藤辨理公使ヨリ電報ニテ「ウエーバー」氏ハ毫モ墨西哥ヘ赴任ノ意ナク可成ハ其儘當地ニ居据ハラン「ヲ欲シ若シ行ハレサレハ辭職ノ上當國宮内府ノ顧問トナラントノ決心ヲ爲シ閔泳煥ハ國王ノ内意ヲ受ケ英國ニ至ルノ前先ツ露國ニ至リテ之ヲ露帝ニ乞ヒ同行ノ「ウエーバー」夫人モ共ニ之ヲ周旋セントスルモノ、如シ右ハ將來ニ甚タ面白カラサル結果ヲ日露間ニ生スヘシト思考スルヲ以テ露國ヲシテ成ルヘク其初志ヲ變セシメサル樣相當ノ手段ヲ以テ其筋ヘ勸告スル「ヲ求メ來リ候ニ付其旨早速在露本野臨時代理公使ニ電報シ假令ヒ如何ナル資格ヲ以テスルモ「ウエーバー」氏カ朝鮮國ニ駐在スルコトハ甚タ好マシカラザル義ニ付好機會ヲ見計ヒ帝國政府ノ意思ヲ夫トナク露國政府ヘ通スベク又帝國政府ヨリハ現ニ辨理公使ヲ派遣致居候得ハ將來彼我兩國ニ關連スル事項ヲ協商スルコトアル場合ニモ都合宜カルベキニ付此際露國政府ニ於テモ同等ノ公使ヲ京城ニ派駐セラレンコトヲ希望スル旨同國政府ヘ勸誘スル樣致内訓置キタルニ之ニ

對シ同代理公使ニ於テハ右ノ次第ヲ内密ニ露國外務次官及亞細亞局長ヘ申入レタル由ニテ同次官幷ニ局長ノ答ニ資格ノ如何ニ拘ハラス「ウエーバー」ガ京城ニ其儘留マルコトハ多分有之間敷又辨理公使任命ノ件ハ多分同國皇帝ヘ奏聞セラルヽナルヘシト申居候旨同代理公使ヨリ回電有之候ニ依リ其旨加藤辨理公使ヘ通報致置候處本月七日同公使ヨリ再電有之「ウエーバー」ハ「リゼンドル」ヲ排斥シ之ニ代リテ宮内顧問タランコトヲ欲シ昨六日來急ニ烈シク運動ヲ始メ卽今ノ形勢ニテハ國王モ勢止ヲ得ス之ニ同意セラルヽナラン又露國政府モ事實ヲ究メズシテ同意スルヤモ計ラレズ實際國王初メ政府全體ハ痛ク「ウエーバー」ヲ嫌厭シ同人ノ此末京城ノ地ニ止マルコトニ付テハ頗ル懸念シ居レルニ付何トカ露政府ニ此事情ヲ通スルノ道ナキヤトテ切迫ノ事情ヲ本日外部大臣ヨリ内報シ來レリトノ旨通報致來候ニ付其旨更ニ本野代理公使ヘ轉電シ尙此際右ニ關シ帝國政府ノ希望ヲ達スル樣十分斡旋致スヘキ旨電訓ヲ發シ置キ尙之ト同時ニ加藤辨理

公使ヘ向テモ該計畫ノ成功セザル樣十分盡力可致旨電達致置候然ル處其後本野代理公使ヨリ再ヒ電報ニテ亞細亞局長ノ意見ニテハ在日本露國臨時代理公使（「スペヤー」氏）ハ決シテ「ウエーバー」氏ガ如何ナル資格ニテモ朝鮮ニ留リ居ルヿヲ承知セザルベシト申居候旨回報致來候ニ付加藤辨理公使ヘモ其旨通報致置候

右「ウェーバー」氏留任運動ノ義ニ付加藤辨理公使ヨリノ報告寫相添此段申進候也

明治三十年五月廿六日

外務大臣伯爵大隈重信

内閣總理大臣臨時代理
樞密院議長伯爵黑田清隆殿

【別紙】

露公使留任運動ニ關スル件

露國派ノ跋扈ヲ憤ルモノハ以爲ラク不日代理公使「スペエル」氏ノ來ツテ代ルアラバ「ウエバー」氏ハ直ニ當地ヲ去ルベシトテ意密ニ之ヲ待ツモノヽ如クナリシニ先頃來頻リニ說ヲ爲スモノアリ「ウエバー」氏ハ從來ノ關係ヨリ切ニ其留任ヲ希望シ若シ留任ノ事協ハザレバ彼ハ其官ヲ辭スルモ當地ヲ去ルヲ欲セザルモノヽ如シト又同氏ニ眷戀タル所謂露國派ハ若シ同氏ニ於テ歸國スル如キ事アラバ直接其身上ニ影響スベキハ必然ノ勢ナルヨリ是レ又同氏ト相提携シテ引留策ヲ講スルトノ事ニ就キ當館ノ探聞スル所ニ由レバ今年三月初頃ノ事ニテウ氏ハ侍從金鴻陸ヲ伴ヒ國王ニ密奏シテ曰朝鮮ノ前途甚タ氣遣ハレ特ニ王室ノ安危知ルベカラス予當國ニ在ルヿ歲久シ而シテ常ニ王室ニ對シ誠衷ヲ傾ケタルハ陛下事ヲ已往ニ鑒ミテ知悉セラルヽ所タルベシ然ルニ今ヤ予當國ヲ去ルノ期近ニアリ若シ予ニシテ一旦當國ヲ去ルトセンカ王室ノ事復タ實ニ知ルベカラズ故ニ專ラ陛下ノ爲メニ計ル

ニ本國政府ニ電報シテ予ノ留任ヲ望マルヽコソ然ラン而カモ猶ホ本國政府ニシテ陛下ノ請ヲ容レザルキハ予ハ此ニ斷然印綬ヲ解キ陛下ノ宮中顧問トシテ晝宵陛下ニ奉侍シ終始誠忠ヲ致サントス云々於是國王ハ宮内大臣李載純ヲシテ「ウェバー」氏留任ニ關スル電信ヲ露廷ニ致サシメタリト又曰六國使節閔泳煥一行コソ之レガ密旨ヲ帶ヒ其英國ニ到ラザル前先以テ露都ニ赴キ「ウェバー」留止ノ件ニ付キ斡旋スル所アラントスルモノニテ「ウェバー」夫人ガ同行シタルモ蓋シ之レカ爲ナリト右ニ付本官ハ過日佛國代理公使「ブランシー」氏ヲ訪ヒ先ツ本官ヨリ「ウェバー」氏去留問題ヲ說キ起シタルニ之レニ關シテ同氏カ探聞シタル所モ殆ント當館ノ聞込ミタルト同樣ノ事柄ニシテ別ニ耳新シキ說ハ無之キモ同氏モ「ウェバー」氏這回ノ擧動ニ痛ク不快ヲ感シ且ツ說ヲ爲テ曰ウ氏ハ甚タ表裏反覆ナル人物ニシテ毫モ信ヲ置キ難シ外面ハ常ニ無爲平和ヲ粧フモ其裏面ヲ伺ヘバ頗ブル隱險的手段ノ伏在スルヲ見ル惟フニ這回ノ秘密運動ニ付テモ其平素ニ鑒ミテ事實ヲ證スルニ足ルベシト申居候其後宮内顧問「リゼンドル」氏ニ面會シタルニ同人モ「ウェバー」氏運動ノ内幕ヲ知リ竊ニ其擧動ヲ非難スルノ語氣相洩レ居候處尙又去十九日本官ヲ訪ヒ來ツテ申スニハ予ハ國王ノ召ニ由リ此頃内謁シタルニ陛下ハ露公使内密ノ相談ナリトテ其御沙汰ニ據レバ露公使ハ予ヲ宮内府ヨリ排斥セントテ内奏シテ曰「リゼンドル」ハ甚ダ陛下ノ爲メ良シカラザル人物ナレバ速ニ解傭アル方可然トテ彼此惡樣ニ誹謗スル所アリシモ陛下ハ故無ク雇外人ヲ解傭スレハ徒ニ其感情ヲ害シ安シトテ暫ク其請ヲ容レ給ハス程能ク挨拶セラレタルニ其後六回程侍從金鴻陸ヲシテ間接ニ奏上スル所アリシ由ナレモ國王ノ決心固クシテ終ニ今日迄ハ其目的ヲ達スル能ハザルモノヽ如シト述ヘ且ツ目今ノ形勢ヨリ察スルニ國王ハ「ウェバー」氏ヲ痛ク慊厭セラルヽヨリ恐ラク予ノ地位ヲ動カスニハ至ラザルベシト申居候

右「ウェバー」氏カ「リゼンドル」ヲ宮内府ヨリ排斥セント企タルハ疑モナク他日自家立脚ノ地ヲ存シ且ツ豫メ其障害物ヲ除カントスルニアリテ若シ同氏ノ留任策ニシテ行ハレザランカ此ニ斷然其職ヲ辭シ宮内府ニ入リ當國ニアッテ最モ威權ノ集點タル宮廷ヲ繰縱シテ以テ大ニ爲スヿアラントスル野心ニ外ナラザルモノヽ如ク推測致候而シテ同氏ハ今尚ホ其運動ヲ繼續シ何トカシテ其目的ヲ貫カント致居候哉ニ相聞候間若シ同人ニシテ其地位ノ如何ニ拘ハラス此上當國ニ滯留スルハ我ニ於テ甚タ不利益ナルハ論ヲ俟ザル樣ニ付過般不取敢別紙ノ通リ電稟ニ及ヒ置候得共猶爲念此段及報申候敬具

明治三十年四月廿六日

辨理公使加藤增雄

外務大臣伯爵大隈重信殿

【別紙】

四月五日午後八時發

大隈外務大臣　　加藤辨理公使

露公使「ウェーバー」ハ毫モ「メキシコ」ヘ赴任ノ意ナク成ルベクハ其儘當地ニ居据ハランコトヲ欲シ若シ行ハレサレハ辭職ノ上當國宮内府ノ顧問トナラントノ決心ヲ爲シ閔泳煥ハ國王ノ内意ヲ受ケ英國ニ至ルノ前先ヅ露國ニ至リテ之レヲ露帝ニ請ヒ同行ノ「ウェーバー」夫人モ共ニ之ヲ周旋セントスルモノヽ如シ右ハ將來ニ甚タ面白カラサル結果ヲ日露間ニ生スヘシト思考スルヲ以テ露國ハ成ルベク其初志ヲ變セサル樣相當ノ手段ヲ以テ其筋ヘ勸告スルコトニ御取計ヒアリタシ

一一一三　矢野文雄書翰「大隈重信宛」　明治三十年五月廿六日

肅啓

閣下御清穆奉賀候東京出發之節ハ態々御見送り沒辱フシ奉深謝候小生昨日無事上海着仕候御休神奉願候今夜より直ニ蘇杭二州巡視之途ニ上リ候筈ニテ本月三十一日迄ニ歸着シ直ニ便船次第ニ北向仕候心得ニ御座候

當地小田切（武善）領事始メ一同無事服務致居候小田切氏ハ年若なから大ニ適任之人物之樣ニ見請ケ申候

當地居留地之事等夫々申談居リ候ニ付後信ニ詳細可申上候當地も意外之繁華之樣相見へ申候

東京出發後直ニ呈書御禮可申上候處各地共知人之來訪不斷長崎ニ至ル迄も幾ント寸隙無之有樣ようて御無音仕候

新聞ニ據れハ京坂御出張被遊候由定て御賑やかしき事と奉察候

孰れ北京より次便ハ呈上可仕候得共先ハ御禮申上候且ツハ支那地着之御報申上度如此御坐候草々頓首

五月廿六日

大隈閣下　下執事

乍筆末令夫人樣ニ御致聲宜敷奉願候以上

文雄（清國駐劄、特命全權公使）

一一一四　矢野文雄書翰「大隈重信宛」明治三十年六月十四日

謹啓

御清康奉賀候偖小生事一昨日着仕候幸ニ無事ニ有之乍憚御休念奉願候

蘇杭二地沒巡視致候ハ大ニ心得ニ相成リ申候同地ト北方トハ人民之貧富土地ノ冷熱萬事大なる相違有之樣相見へ申候

陸軍之一士官北京より右二地ニ來リ候者ト杭州ニて出會候處「支那よもケ樣之土地あり」トテ驚居リ申候右ニテ御推察被遊度候

右兩地共到て待遇丁重ニ有之又裕公使より申通候事ト見へ招商局、北洋大臣等之待遇總て懇切ニ有之候

近來天津ゟ人心不穩ゟ事ありとて北京迄士官兵士汰併て五名隨行爲致吳候

御笑草ニ申上候兵士ニハ是方ヨリ食料等汰給もる上ニ御祝儀ニ金ヲ與へ候例ゟ由有之天津上陸ゟ小瀛舟又ハ護衞兵ニハ幾十圓ゟ所費アリ與へサルキハ請求スルト申事ニ御坐候萬事祝儀手當ゟ世ゟ中ニハ驚申候

天津より瀛車ゟて京城近クマテ參リ候故ニ大ニ通州川舟ゟ苦汰免れ申候公使館員ハ皆無事ニ有之色々申上度事も有之候得共先ハ着任ゟ事申上度如此御坐候

過日ハ京坂御出張被遊候由御障りも無之候段々新聞ゟて承知仕候尙ホ御自愛千萬奉祈候書餘再信可申上候草々頓首

六月十四日　文雄

閣下　下執事

尙々

蘇州ゟてハ楓橋寒山寺杭州ゟてハ西湖等汰も序ニ一覽仕候追て御慰迄ゟ申上候

一一一五　藤波言忠書翰「大隈重信宛」　明治三十年六月廿二日

拜啓昨今御不例ニ被爲入候旨新聞ニ相見如何被爲在候哉折角御自重奉祈上候一昨日太田秘書官を以テ御申聞の馬車馬ゟ事ハ本年來月ゟ八月ニハ是非北海道新冠御料牧場へ小生參リ度もし參リ不得候ハヽ調馬師を遣し候ゟ其時ニ閣下の分としテ良馬二頭買入候事ニ取計度キ考ニ御坐候右ニ付とても昨今東京ゟさゟし候ても良馬純良彩るもの無之候間是非其事ニ願度き考御坐候間御使用相成候迄ハ來年の冬迄御猶豫無之てハ不相成と存候本年明三才のものより無之譯ニ御坐候此比ハ中々の所望人ゟて二頭

毛色の同しものよて立派ニ壹對ニ相成候ものハ三才駒を買入ねハ不相成候事ハ御承知置奉願上候平素御無音之罪御海容被下度早々拜答旁得貴意候也頓首

六月廿二日

言忠（主馬頭）

大隈伯閣下

一一一六　高野孟矩書翰

「大隈重信宛」　明治三十年六月廿四日

益御健勝御執掌之段奉恐賀候爾來ハ心外之御無音汗顔多罪之至ニ候臺灣之模樣ニ付テハ隨時ニ高橋神鞭（健三）（知常）兩氏ニ報告致シ置候次第モ有之候處改善之處置トシテハ何之着手モ無之唯々弊害ニ弊害ヲ相重テ今日ハ殆其極點ニ相達シ最早姑息ノ手段ニテハ改善六ケ敷事ト存候就中一日モ捨置キ難キハ治安之事ニテ今日ノ如ク總督軒下安眠ヲ妨ケラルヽ有樣ニテハ民人其堵ニ安ンジ其業ヲ樂シムハ到底望ム可ラサルナリ其治安策ニ關シ殊ニ司法制度ノ義ニ關シ乃木（希典）總督ニ差出シ候意見書秘密書類ニハ候得共供御内覽候御一覽被下候ハヽ御參考相成ル廉モ可有之存候

○乃木總督着任以來何一ツトシテ着手シタル事無キハ如何ニモ怠慢若クハ無能ノ所爲ナルカ如ク論セラルヽ人アルベシト雖モ是レ總督府内部ノ積弊ヲ詳知セサル人ノ論ナリ總督着任以來改善ノ意見ナカリシニアラサレ𪜈府内ハ皆一種ノ類屬ヨリ組織セラレ些細ノ一小事ト雖モ彼レ等ノ意ニ逆ヒテ決行セントセハ相結ンテ抗論批議シ實ニ容易ニ其議ヲ決行セシメズ甚シキニ至リテハ決判ヲ迄モ取消サシムルカ如キ事アリシ要スルニ乃木總督ハ恰カモ出戻リノ兄嫁カ敬シテ遠ケラレツヽ内實ハ極メテ邪魔物視セラルヽ同樣ノ位地ニ立チツヽアルナレハ一事ヲ遂ケ得サルモ無理ナラヌ事ナリ而シテ此積弊ヲ活斷シテ英進スルノ方法ヲ今日迄ニ決行セサルハ聊カ怠慢ナルニ似タレ𪜈偖自ラ其任ニ當ル人ノ心トシテハ是亦餘